

# 新版 四ツ手網の記憶

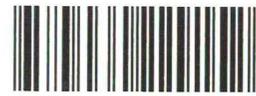
日本のこころを愛したカルシュ

若松秀俊

Wakamatsu Hidetoshi

新版  
日本のこころを愛したカルシュ  
四ツ手網の記憶

若松秀俊



9784434229152



1920095014005

ISBN978-4-434-22915-2  
C0095 ¥1400E

発行／杉並けやき出版  
発売／星雲社  
定価【本体 1,400 円 + 税】

杉並けやき出版

杉並けやき出版

# 四ツ手網の記憶

日本のこころを愛した  
フリッツ・カルシユ

若松 秀俊

あ  
あ傘さしてわれ行けば  
ほのかに頬のつめたくて



目次

|         |     |
|---------|-----|
| まえがき    | 5   |
| カルシユ博士  | 9   |
| 山陰との縁   | 16  |
| 住居と庭    | 20  |
| 散歩      | 29  |
| 偶然の出会い  | 47  |
| 生い立ち    | 55  |
| 縁の糸     | 61  |
| 学問と著述   | 66  |
| 松江高等學校  | 73  |
| 親類と縁者   | 87  |
| ドイツ語の授業 | 105 |
| 講義録から   | 114 |
| カルシユと大山 | 122 |
| 軽井沢     | 129 |
| 文化の窓    | 161 |
| 自然と神々   | 175 |
| 友との別れ   | 180 |
| 大使館勤務   | 183 |
| 戦後      | 190 |

|        |     |
|--------|-----|
| 松江の街   | 198 |
| 松江城から  | 203 |
| 山頂から   | 210 |
| 樂山公園   | 212 |
| 水辺     | 214 |
| 鉄道     | 224 |
| 祈願     | 228 |
| 田園     | 230 |
| 神社仏閣   | 234 |
| 美保関    | 239 |
| 加賀浦    | 245 |
| 弓ヶ浜    | 249 |
| 大根島    | 252 |
| 隠岐     | 256 |
| 松江の祭   | 259 |
| きずな    | 265 |
| 日本への招待 | 272 |
| 終生の因縁  | 281 |
| その後    | 289 |
| 調査雑感   | 301 |
| 記録と報道  | 317 |

## まえがき

天から与えられた全くの偶然の導きで出会ったカルシユ博士の足跡を追ってゆかりの地を訪ねてみた。その間に松江の昔の様子を写した珍しい写真を見ることができた。その多くは旧制松江高校の卒業生の所持していたアルバムの中の写真であった。金沢に住む六期生の澤田が同期の増田の紹介でいきなり、自分のアルバムを筆者の研究室あてに郵送してくれた。早速このすべてをコピーして返却した。この時期にはカルシユ博士の手がかりは少なく、調査の進展は難しい局面にあった。

澤田は自分の高校生活と当時の先生の思い出を病をおして、文書を用いて語ってくれた。彼とは、幸運にも二〇〇一年（平成十三年）の十一月に、金沢の自宅で直接面会することができた。その折りに、本当に嬉しそうに、当時の思い出を語ってくれた。それと前後して、田島、竹原らより、かつてカルシユ博士が描いた松江の景色のコピー数枚を手に入れることができた。後で見た実物とはだいぶ異なる印象の絵であったが、この中にカルシユの心底を垣間見た思いであった。

また、カルシユと直接の師弟関係にあった溝上、白石、宮田、遠藤、江上、奥野からも資料とともに、写真を受領した。その後、彼らのうち白石、宮田、奥野、それに岡崎と面会し、具体的な話ができただけでなく、遠藤を京都の自宅に訪ね、彼のアルバムから古い景色や松江の写真や、カルシユの家族と交換した手紙の写しを手に入れることができた。

その折に、カルシユ在住当時の松江の様子を調べようとして、松江郷土館にも当時の松江に関連した風景や人物の写真が残っているかどうかを直接尋ねてみたことを記憶している。しかし、残念ながら、一九二五年（大正十四年）から一九三九年（昭和十四年）ごろの写真は戦時の混乱もあって、あまり持ち合わせてな

いことがわかった。

その後、二〇〇一年（平成十三年）から一年ほどの間にカルシユの次女でドイツ・マールブルク在住のフリーデルンとアメリカ・テネシー州チャタヌーガに住む長女メヒテルトの自宅を訪ねるに及んで、昭和の初期に撮った写真をつぶさに見せてもらうことができた。そして、娘たちの厚意からその一部を入手することができた。写真のほとんどに番号と撮影日、場所などが、独特のドイツ髭文字で添えられている。画質が黄ばむなどの劣化は驚くほど少なく、保存状態は良好だった。涙の出るほどの新たな感慨が湧いてきたことを記憶している。すべてを見た訳ではないが、一五〇〇枚程度の写真が整理されていた。公開に関する厳重な約束のもとに、その大部分のコピーを日本に持ち帰った。それらをもとに、カルシユの言動や彼の家族、また生徒達との対話を併せて、松江の昔の姿の再現の手掛かりとすることになった。

《文中敬称略》



フリッツ・カルシュ博士

多くの若者を育んだ

フリッツ・カルシユは大正末期から十四年間、旧制松江高等学校で教鞭を執り、多くの人材を育てた優れた教育者であった。これまで全くといって良いほど、その業績が地元松江でも知られていないこともあって、彼の残した大きな足跡と人々との交流を可能な限り、順に語っていききたい。

袖すり合うも他生の縁」というが、縁もゆかりもなかったカルシユと筆者を全くの偶然が結びつけた。

筆者は一九七三年から七五年にかけて、ドイツ学術交流会(DAAD)の奨学生として、ドイツの大学で研究生活を送った。そのお陰で、ドイツの文化とそれを生んだ風土に若き日に触れる機会を与えられた。ここでの物語のそもそものはじまりが一九九九年(平成十一年)に、シュトゥットガルトでカルシユの次女に筆者が出会ったことにある。それに到る経過は単なる偶然とは思えない出来事の連鎖の帰結によるものであった。

カルシユは日本では人に知られぬ哲学者である。僅かな手掛かりから彼の足跡を追う中で、次第に彼の偉大さを知ることになった。何とかして、知られざる彼の功績を公平な眼で眺めてあげたい。そんな思いから筆をとることにした。

戦前、旧制松江高等学校(現島根大学)のドイツ語の講師として、十四年間にわたり教壇に立ち、生徒に大きな影響を与えたドイツ人哲学者、フリッツ・カルシユ博士が生まれて、すでに二〇年以上経

カルシユ博士

過した。いまや、ほとんど人々から忘れられている彼は、人の認識の発展過程を考究する人智学を提唱したシュタイナーを日本に紹介した人物でもある。日本を第二の故郷として愛した同氏を顕彰することは日本だけではなく、日独関係や日本の哲学史研究の上からも大きな意味がある。

彼は一八九三年(明治二十六年)、ドイツ東部のブラゼヴィッツで父ヘルマン(一八六〇—一九〇二)、母ルイーゼ(一八六一—一九四二)の間に生まれ、一九七二年(昭和四十六年)にカッセルで没した。一九二五年(大正十四年)にブラーゲの後任として松江高校に赴任、多くの人材を育てた。同時に日本の哲学や宗教の研究に力を注ぎ、また外交官として終戦まで働いた。

松江を選んだのはラフカディオ・ハーンの影響による。カルシユの薫陶を受けた生徒の中には養崎の鐘》で知られる永井隆博士をはじめ、高齢ではあるが調査時には健在であった著名人を見出すことができる。直接的な指導と影響を受けた者として、政界では国務大臣など要職にあった人々、学界では文学、医学、化学などの分野で著名な学者、法曹界の重鎮、大使などの外交官などが見られる。さらに数知れない実業界の指導者、スポーツ界の功労者が挙げられる。また、当時指導を受けた台湾と朝鮮からの生徒は、殆ど例外無く、戦後に故国で要職に就いてその発展に貢献した。その他、個人的接触や間接的接触によって、影響を受けた人は各界に多数見られる。

たとえば、政界では衆議院議員で、自治相を務めた赤澤正道(昭和二年卒業の四期文乙)、元島根県知事伊達慎一郎(五期文乙)、元衆議院議員の楢橋勇(六期文乙)、衆議院議員・国務大臣十回・衆議院議長を歴任した福永健司(七期文甲)、元衆議院議員の高田富之(九期文乙)、衆議院議員で自民党総務会長・行政管理・防衛庁長官・運輸大臣を歴任した細田吉蔵(九期文甲)や元衆議院議員・労働大臣の山手満男(十一期文乙)があげられる。

外交官としては元イラン・インド・中華民国・ブラジル大使を歴任した宇山厚（九期理甲）、海外移住事業団理事・ウルグアイ大使歴任の大城斉敏（十期文甲）がいる。

法曹界では大阪弁護士会会長・日弁連会長を務めた和島岩吉（五期文乙）、元広島高裁長官の松本冬樹（六期文甲）と同じく元広島高裁長官矢崎憲正（十期文乙）、元福岡高裁長官綿引紳郎（十五期文乙）が挙げられる。

学界では前述の元長崎医科大学放射線医学教授永井隆（五期理乙）、元島根大教授・元琉球大教授の酒井勝郎（五期理乙）、元滋賀大文学教授で雑俳史研究家の宮田正信（九期文乙）、元北海道大印度哲学教授、僧侶で鈴木大拙の後継者の古田紹欽（十期文乙）、元大阪大教授・微生物病研究所長で、マラリア研究の奥野良臣（十四期理乙）らの活躍がある。

芸術界・出版界では元カリフォルニア州立フランクフルト大教授、また舞踏家でドイツ留学後の欧米の舞台で活躍した邦正美（朴永仁）（八期文甲）、岸田国士の劇作同人で、大映グランプリ『羅生門』のプロデューサー・放送作家を務めた異能の士である辻久（九期文乙）、『曙の手帖』社を設立、編集長を務めた花森安治（十期文乙）など枚挙に暇がない。

## 二

フリッツ・カルシュは一九一二年（明治四十四年）、ドレスデンにおける国際博覧会で『吾本』と出会い、日本に強い興味を抱いた。第一次大戦に志願兵として従軍した後、マールブルク大学でニコライ・ハルトマン門下として哲学を学び、一九二三年（大正十二年）に哲学博士の学位を取得、以後人智学の研究組織に加わった。

一九二五年（大正十四年）九月末に、憧れの日本に來た彼は松江市奥谷町の官舎に住んだ。そして一九三九年（昭和十四年）三月にシムアルベと交代するまで教壇に立ち、この地で妻、エンメラとの間に、長女、メヒテルト（昭和三年生）、次女、フリーデルン（昭和十二年生）に恵まれた。彼は絵画が趣味で、余暇には愛する松江や周辺の田園を精密に描写した。彼の描いた宍道湖、嫁ヶ島、袖師ヶ浦、大山、山陰の農村、さらに軽井沢近辺のパステルや水彩の風景画が、合せて九十枚以上、現在も二人の娘の手許に分割して保存されている。また、当時の松江や近隣の人々の暮らしの様子を撮影した一五〇〇枚を超える貴重な写真も残している。

彼は松江高等学校で生徒にヨーロッパの文化を伝えながら、同時に自らの精神生活を磨き上げた。当時の日本を深く愛し、日本人々を慈しみ、自分の持てる知識を惜しみなく生徒に伝えた彼の著述には、『刃トとハルトマンの比較論述』、『吾独文化協会、昭和三年』があり、その他ドイツに関する著述『同協会、昭和九年』がある。同僚の高橋敬視教授によるハルトマンの著書の翻訳は、彼の紹介と協力によるものであった。また、長屋喜一元東大教授と『ハルトマン哲学』の著書を残している。

一九三七年（昭和十二年）、復活祭の期間に英語講師のウッドマン氏の住む隣家が火の不始末から火

災に遭遇したが、近所の助力により鎮火した。そのときの印象がますます彼をして日本を好きにした。同博士に関しては、門下の酒井勝郎が『畱舎の大学』私家版、昭和四十五年）で記述し、また同窓会誌『翠松』や旧制松江高校史の『需たけのふもとに』で、その人柄を当時の生徒が語っている。

松江高校を離任した彼は駐日ドイツ大使オットの仲介で、一九四〇年（昭和十五年）から一九四五年（昭和二十年）までの間、国会議事堂近くの大使館に勤務することになり、そこで終戦を迎えた。

カルシユは日本の宗教や文化の多様性に対する共感や人間肯定のために想像力の世界を自らの精神に描くことの重要性を語り、人智学的にみた東洋哲学史の膨大な未刊行原稿を残した。現在米国に住む長女らが整理中である。内容は、哲学史と有史以来の人の意識の進化に関する事、また学問や内的修練により、シユタイナーの思考に如何にして到達可能か、についてである。彼は行動的人智学者としてこれを広めようとしたが、戦時中のドイツではこの関連学会は禁じられた。また、宗教哲学への興味から、高野山で修業を体験し、著名な哲学者の西田幾多郎や宗教家の鈴木大拙らとの親交もあった。

両親から影響を受けた長女は、戦後自らその研究を行い、次女はマールブルク大学で政治学と地理学の学位を取得し、自由ヴァルドルフ学校の教員になった。この学校は、日本では『シユタイナー学校』と呼ばれ、その全人教育には興味深いものがある。

一九四七年（昭和二十二年）に帰国した彼はマールブルクで成人教育に従事し、そこで在独日本公館や日本の著名人との親交をもった。一九六一年（昭和三十六年）には年金生活に入り、キリスト教共同体の古巣のカッセルに移住して研究を続けた。

カルシユ博士  
一九六八年（昭和四十三年）には、かつての生徒から招待を受け、日本各地を訪問し、彼らと親しく過ごす

時間を得た。この時、彼は出雲大社で、至聖の神に対面する願いがかなえられ、日本における自らの天命に対して神々に感謝の言葉を述べたという。

約一ヶ月間の滞在の後に帰国した彼は一九七〇年（昭和四十五年）に金婚式を祝い、翌年、脳腫瘍のため亡くなった。

彼は少年期に夢見た風景を松江周辺に見ることができたことを、自らの人生の終末期に、周囲の者によく語っていたという。

戦中戦後の混乱のために彼の足跡の記録が乏しくとも、松江と東京での奉職期間からいって、有形無形の功績が少なくないと確信していた。彼の足跡と言動を少しづつ確認するなかで、彼の亡き教え子が彼を心底から敬慕していたことを知って、なおも彼の業績を詳細に調べる必要性を痛感している。

# 日本との出会い

神々の里に見た美と安らぎを追う

## 山陰との縁

一

大正時代の終わり、自由の雰囲気はまだ日本全体にみなぎっていた頃、一組のドイツ人夫妻が憧れの日本の地を踏んだ。フリッツとエンメラであった。

フリッツは旧制松江高校のドイツ語講師としての誘いを受けていた。文部省の採用通知を胸に不安と希望の混じり合った気持ちで松江に入った。

赴任してしばらくした頃、大山<sup>だいせん</sup>の雄姿に接した。そのとき衝撃が彼の身体の中を走った。幼い頃何度も夢見た懐かしの風景であった。

やがて、この地は彼にとって、生涯切り離すことのできない不思議な縁で結ばれていることを悟った。戦争の足音が彼の運命を次第に変えていった。そしてついに愛する日本を離れた。しかし、それも彼の日本への想いと彼を慕う人々との絆を断ち切るものではなかった。

彼のその想いとその絆は、彼とは何の縁もなかった一人の名もない科学者に天から優しく呼びかけることになった。

『きずな』と『縁』を暗示する『湖畔の夕映え』のプロローグである。

フリッツ・カルシュは大正末期から十四年間、旧制松江高等学校（現島根大学）で教鞭を執り、多く

の人材を育てた優れた教育者であった。彼の残した足跡とその間の人々との交流には特筆すべきものがある。しかし、彼の残した業績は彼が住んでいた松江の人々の間でもほとんど知られていない。

縁もゆかりもなかったカルシュと筆者を結びつけたのは全くの偶然であった。縁らしきものがあるとすれば、筆者が四十余年前の若き日にドイツ学術交流会(DAAD)の奨学生として、ドイツの大学での研究生活の中でドイツの文化とそれを生んだ風土に触れる機会を与えられたことだけである。

ここで語ろうとする話のそもそもの発端は、実はシュトゥットガルトのホテルで、カルシュの次女に筆者が出会ったことであった。しかし、今にして思うに、それに到る経過はとても偶然と思えない出来事ことの集積によるものであった。

カルシュが最初に日本と出会ったのは、一九一二年(明治四十四年)のドレスデンの国際博覧会であった。関東大震災の前に日本の高等学校への誘いがあったが、震災の混乱のために募集が見送られた。その後に、親友の長屋喜一の進言もあって、松江高校のドイツ語講師の道を選んだ。

一月半ひときに及ぶ航海の末に神戸港に着いたカルシュ夫妻は、見知らぬ国で、不安と期待で一杯だった。それでも何とか一九二五年(大正十四年)九月二十八日に憧れの松江に着いた。

証拠はないが、後に東大教授になった長屋喜一の著書にこの時期に自ら帰国したことを記しているので、カルシュ夫妻と一緒に帰国したのであろう。

## 二

松江の駅では高島教授と多田教授が迎えてくれた。早速、人力車で二年前に造られた奥谷町の官舎に向かい、そのまま入居した。多田教授が新任の夫妻の居を定めてくれていた。その官舎は外国人講師のために建てられた小さな洋館である。

妻エンメラは異国で頼り合う愛を確かめるように夕日の中でフリッツの傍に身をよせた。

これが、日本での第一歩であり、真の意味での日本とのきずなが形づくられる序曲であった。そして、諸々の人々との不思議な縁が彼らを待っていた。

それから一ヶ月ぐらい経って、周りのことがおおよそ分かって、生活が落ち着いてくると、フリッツはすこしずつ動きだした。日曜日の散歩はやがて習慣になった。奥谷の官舎の近くは静かなところだ。ここに来ると不思議なくらい不安が消える。気持ちが悪く落ち着くのだ。どうやら、心の静けさを感じさせる何かがあるようだ。

神々の住む出雲地方のことはハーンの書からよく知っていたつもりであった。

自分の心が神々とともに、そして生徒たちとともにありたいものだ》

フリッツは来日以来、日本の社会や自然の中に落ち着きの雰囲気を感じていた。一見混然とした佇まいの中に見られる不思議な秩序に心のや



ハーンの旧居を訪問したときの  
フリッツ・メヒテルト・高島喜市

すらぎを感じる毎日であった。そんな中で、日本に限りない愛着と親近感を見出していった彼は積極的に地元の人々と交流し、かつて経験したことのないなかつた、不思議にも思える異質の雰囲気をすこしでも多く吸収しようとした。そして、自然の中にヨーロッパには見られない調和の美に象徴される日本の確かな良さを見出した。

ラフカディオ・ハーンの住んでいた家を何度も一人で訪ねたという。ハーンの影響を受けて来日したフリッツにとっては、日本との最初の接点を与えてくれたという意味で感慨深いものがあつたろう。前頁の写真は長女のメヒテルトと同僚の高島教授とともにハーンの旧住居を訪ねた時のものである。メヒテルトは父と何度かここを訪れたという。

今も当時と変わらぬ雰囲気とたたずまいである。彼女の現在に連なる感性を培った日本の心と息づかいをなお感じるところである。後で、偶然に眼にしたのであるが、この写真が絵葉書の題材になつていたのが興味深い。

## 住居と庭

### 一

松江市奥谷町の路地を歩くと、外装の剥げたこじんまりとした洋館があつた。これが一九二五年（大正十四年）から一九三九年（昭和十四年）までカルシュ一家が暮らしていた住居であつた。一九二〇年（大正九年）十一月松江高等学校官制が定められ、翌年五月起工の運びとなり、翌々年五月十八日に同校が設立された。これに続いて、この住居が新築され、落成したのが一九二四年（大正十三年）十一月二十九日である。この時には、官舎として同じ形で並んで建つ双子の家として存在していた。

最初は、プラーゲドイツ語講師とパウマン英語講師が住んでいた。この時期にプラーゲの家で働いていたお手伝いの《舎葉》を五期理乙の酒井勝郎が残している。それによれば、授業は勿論のこと、生活を律する時刻から歩く時間・距離まで正確に把握しないと気が済まないカチカチの先生であつたようだ。このあたりは、四期文乙の柴田午郎や米田勇次郎らも語っていた。

当時の高校生が大学に進学すると、外国の進んだ知識を吸収するために外国語が不可欠であつた。中学生の頃は英語を学び、高校ではより深く外国語が教え込まれた。外国語は重要な教科であつたし、どの高校にも外国人がいたようである。高校によってはフランス語も教えたが、多くの場合に外国語といえば、英語とドイツ語であつた。将来の進学志望先によって文科系か理科系に分類した。さらに外国語の選択によって英語（甲）、ドイツ語（乙）、フランス語（丙）とした。その組み合わせにより文甲、文乙、理甲、理乙などに組分けした。したがって、それに生徒の学んだ時期を付して九期文乙のように表記した。



大正14年から昭和14年までカルシュ一家の住んだ奥谷町の官舎

ところで、二戸建ての官舎は教師の外国人が住めるように設計された家であった。博士号を取得したカルシュは、もしかしたら、やや遅れて設立された和歌山高等商業学校に赴任することになったかも知れなかった。しかし、実際の赴任先は、後に東京大学の教授になった友人の長屋喜一から紹介してもらった松江高等学校であった。どのようにして、長屋が日本で働く外国人講師の仲介をするようになったのかはわからない。とにかく、ラフカディオ・ハーンのことか頭の中にあつたカルシュは、赴任先を松江に決めた。就職先もなく困窮していたカルシュ夫妻には渡りに船だったということであろう。

この地で、メヒテルト、ゴットフリート、フリーデルンの三人が生まれた。残念ながらゴットフリートは生後二週間で亡くなったとのことで、当時の父母の嘆きを想い出しながらメヒテルトが語ってくれた。

写真は一九三五年頃の官舎と呼ばれていたカルシュ家の住居の様子である。この奥谷の地から実際に足を使った調査が始まった。そのときには、すでに家の内外は全く様変わりしていた廃墟であつたが、ぜひ修繕して、当時の様子に近づけ、調査資料や家具調度、人形、絵画、写真、研究成果の保存を願ひ、以来、筆者はずっとその実現を訴え続けてきた。

メヒテルトはこの官舎に造られたブランコや砂場でよく遊んだ。庭には藤棚があり、初夏には藤の花

が咲き乱れたものだった。それにイチジクやビワの木が植えてあつた。妻エンメラにとつては、庭を整えるのが日課であつたという。もともと、神経質なエンメラには松江の気候がどうにも合わず、体調が優れないことも少なくなかつたが、庭いじりは心の慰みであつたという。

## 二

双子の住居のうち、隣のウッドマン一家の住んだ住居は、残念ながら一九三七年（昭和十二年）、復活祭の期間に火災に遭遇したが、近隣の助力により鎮火した。そのときの周りの人々への印象がフリッツの家族をして限りなく日本とその風土を好きにしたようである。メヒテルトが後年何度も多くの人にこの出来事を語っている。出火の原因は隣人の英語講師ウッドマン家のお手伝いの火の不始末であつた。松陽新報（由陰中央新報の前身）によって報道されている。同紙には、この地区の人々の火事見舞いやそのお礼が掲載されている。

火事は実は、焦げる臭いから、九歳のメヒテルトが最初に発見した。この時に、近所の人々が断りもなく家財道具を避難させた。殆どのものが斜向かいの渡部宅と隣家の桑田宅に詰め込まれた。渡部忠、桑田武一郎らが、炎事場の馬鹿力<sup>〽</sup>で運んだとのことである。メヒテルトが、母が出産間近で用意していた産着を抱えておろおろしていたと当時の光景を想い出しながら語っていた。延焼もなく鎮火した後



カルシュ家の庭から見たウッドマン家の様子 1937年に消失



しは「ここに寝たわ。ここにピアノがあったの。犬はここにいたの」メヒテルトの記憶と写真をもとにして、何度も図面を書き直した。現在の様子とは大分異なるよ



官舎の庭 1927年頃

うだ。アメリカ・チャタヌーガでフリッツの残した写真を整理中に、メヒテルトと一緒に家屋や庭の見取り図を再現した。不明な点は帰国後、電話とFAXで確かめた。子供の遊び場の砂場やブランコ、それに小さな池は父フリッツの手作りである。家の間取りも庭の様子も再現できた。

よく手入れされている花壇の様子がすばらしい。しかし、この周囲は荒れ放題で、無惨な姿をさらすことになった。庭を含めて再現し、ボンのベートーベンハウスのようなこじんまりとした形で全体を記念館としていたと思っていた。庭の様子は、小説『湖畔の

夕映え』のなかでの**「家族」**の章でも人物を配して描いている。家の左側にはフリッツの書斎に面して藤棚があった。

天気も良いし、表で食事しようか」

わー、きれいだわ。藤の花」

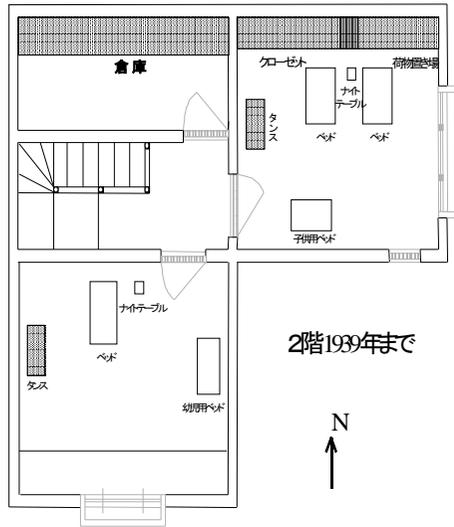
「これが藤色というのだよ」



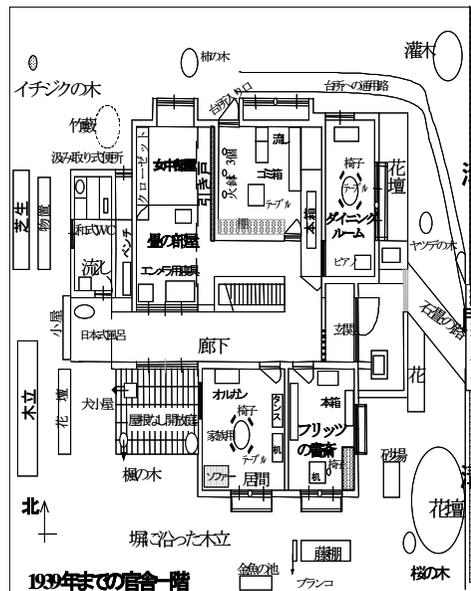
奥谷町の官舎の階段 松本の提供

「これを髪に挿すときれいだよ」

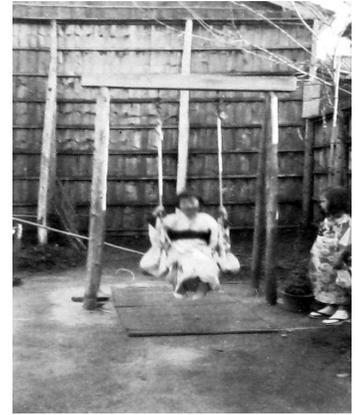
ここに両親が砂場を造ってくれた。メヒテルトもフリーデルンも砂まみれが大好きだ。見たことのない城をつくる。絵本でみたお城だ。



官舎の間取り図 2階



官舎の間取り図 1階



父フリッツの作ったブランコでの遊び、高橋トシ子とともに

フリッツは、砂場の右隣に、ブランコをつくった。休みには、フリーデルンを膝に抱いてブランコを揺らす。左隣には小さな池をセメントでつくった。小さな命の金魚と鮎を飼った。

「ほら、金魚だ。鮎だ」メヒテルトがはしゃいでいる。フリッツがどこからか形の良い岩を見つけてきた。「これが島だよ」

時々二匹の蛙が池の縁で休んでいる。

つかのまの静けさだが、落ち着いた午後のひとときだ。

ときどき、静寂を破るように、鮎がはねる。

エンメラが庭仕事をしている。

「マティ、お母さん、何しているの？」

「バラの手入れよ」

「赤いバラね。きれいだわ」

「赤いバラは愛の証なのよ。いつかお前もそれを……」

た。エンメラは娘の将来と自分たちの将来を不安に思っ、言葉をつまらせた。

「白バラもいわね」

「黄色も好きよ」

「これは前に植えた銀杏よ。これはビワ、イチジク。そのうち大きくなるわよ」

「それにヤシの木とマツよ」

「お前たちが大きくなる頃にはビワもイチジクも大きくなるわね」

「日本は、湿気が多くて、つらいわね」

「でも、こうして草木が涼しくしてくれるのよ」



フリッツ手製の金魚の池



官舎の庭で 蜜柑 158 個を収穫



官舎の庭 1930 年頃

## 散歩

—

通勤用に買い求めた自転車でカルシユは家の周囲を乗り廻しては、農作業のみんなに挨拶していた。ありや、今度の異人の先生だけな。こげなとこで何しているかいな？」

わしら、よくわからんが、何でもこの辺の写真をとっているとうことだで」

最近ドイツからひとづてに購入したカメラを持ち出しては松江周辺の田園の写真を撮っていた。

「いや、この間、太くて短い色つき鉛筆を使って、絵を描いていたようだったで」

あれは、クレヨンと言うげな」

「いや、ちがう。チョークに似た棒状の絵の具でパステルというげな。粉末の顔料を固めたものだ。近所の高校生がいったな」

「こんにちは」

ちよつとからかい半分に絵を覗き込んで、

「へーうまいもんだな。本物と同じだ」

草木が風にそよぐ。松江の周辺の田園の春はフリッツに若い血潮をたぎらしてくれる。

カルシユ博士



松江近郊の景色 フリッツ自筆絵画



松江近郊の景色 フリッツ自筆絵画



松江近郊の景色 フリッツ自筆絵画

自然のなかの命、一体となった自分の姿と心。フリッツは余暇にはそこで感じた美しさを一心に描写した。

宍道湖に出てみた。風に吹き寄せられる水の立てるかすかな波音、水の底の神秘が自分の心に呼びかける、その響きに耳をそばだてる。そこに深い静けさを感じる。嫁ヶ島のひとり湖上にたたずむ静かな美しさ、袖師ヶ浦の伝説を想い浮かべる。

そして、山陰の農村の風景に感動しながら、画用紙に向かって描写するときに、より深い心の平安と満足感を味わうのだった。

ここは古くから栄えた出雲の国。

宍道湖に臨む水の都松江は、東洋のヴェネチア、あのドレスデンにも雰囲気が通じる風光明媚な落ち着いた城下町である。

そして、現実眼前でゆらぐ景色の抽象が自分の心のなかで心象風景として美しく夢と融合し調和する。

## 二

空はよく晴れていた。口笛を吹きながら松江へ用事で自転車を走らせている高校生が酒井である。途中の持田で自転車に乗ったカルシュ先生に行き会った。

「こんにちは。いい天気ですね」

互いに挨拶し、酒井がまず聞いた。

先生どちらへいらっしゃるのですか？」

先生は、すぐ詳しい地図を拡げて、指でさした。

「こちらの案内なら、わたしにお任せください。ここの生まれですけん……」

カルシュ博士

彼は、自分の歩いたところはすべて辿れるようにしるしをつける。

「これから、ここに行くのです」

それを見て驚いた。土地のひとにとっても難所で、子供の頃は親から厳重に注意されていた加賀の詰坂である。

「そこは難所だから行けません、先生。まして自転車では……」と、

とめたが、先生は案外強情であった。

地図には道が描かれているから、きっと行けるはず」

あまり強く言うので、説得をあきらめて、先生を見送り松江に向かって自転車を走らせた。

しかしどうも気になる。心配だった。先生がいつか言っていたことを思い出した。

「ドイツの森は平坦でしかも疎林で、その間を自在に行ける。でも、日本の森は木が密生して道も急峻で、なかなか通り抜けができない」

しかし、まあ、その森へ無謀にも自転車で行ったのだ。

「まず予定通りには帰れまい。下手すると、捜索隊でも出ることになりませんか」



持田村の夜景 フリッツ自筆絵画

と思つたら、居ても立ってもいられなくなった。

呑にかく後を追いかけて追いついて、一緒に行くなり、帰るなりせんとえらいことになる。」

松江の用事をそこそこ済ませて、大急ぎで引き返し、後を追った。本庄から手角、中山峠を越えて、日本海沿いの出雲浦部落を通じて西へ行くのだ。この辺は集落を通過することに、上りと下りの坂道があるのだ。

「とても自転車では速くいけないのだが」

酒井は、ぶつぶつ言いながら、北浦、千酌、笠浦にでる。日本海の荒波に浸食されて、できあがった海岸線は、いたるところ岬と湾、そして絶壁や岩礁で形づくられている。漁港で賑わう野井、瀬崎と難路を急ぎ、走り抜けて野波の部落へは行ったが、先に行った先生の姿はもうどこにもなかった。

ここから先はもうあの噂に聞く難所の詰坂である。どうにもしようがなく、通りがかりの土地の人に聞いてみた。

「異人さんを見なかったか？」

見ましたよ。かれこれ三十分も前だったな。大柄の異人さんが自転車で山の方へ行かれるのをね。いま頃は、もう詰坂でしょう」

「これを聞いて、」

「こりゃ、だめだ。無理だ」

もう、これ以上追う気力を酒井はなくしてしまった。翌日、先生が受け持ちのドイツ語会話の授業が

あった。きっと何か話があると思っていた酒井の目の前を通って、先生は教壇へ進み出てきた。

いつもと少しも変わらず、先生は、

「おはよう、みなさん」と挨拶だ。狐か狸につままれたようでもあった。拍子抜けがした。

授業が終わると酒井がすぐ教壇に近よって、

「先生、詰坂はどうでした」

聞いたら、

「いやはや、けわしかった」という返事だった。

「自転車は？」と聞いて聞いたら、手を肩まであげて、担いで行った恰好をした。

さすが、この先生、大戦中に従軍して、盛んに山野をかけまわった歴戦の人だ。道理で強い人だ。

酒井の残したカルシュの間の体験記によるものである。

## 家庭生活

一

奥谷の双子の家屋で、カルシユ夫妻の生活が始まった。一九二五年（大正十四年）の秋のことである。それから一ヶ月ぐらい経って暮しが落ち着いてくると、周囲のことが少しづつわかってくる。

フリッツは故国と全く雰囲気を異にする人家や景色にも興味を覚えて、日曜日には必ず、散歩にでかけた。官舎の近くの神社は静かなところだ。ここでは不思議なくらい不安が和らぐ。気持ちが落ち着く何かがあった。

官舎の夕べのひとときを再現してみた。

日本にきてよかった。みんな親切だ」

フリッツは手を休めてエンメラに向き直った。

それに日本人はとても礼儀がたたく……」

エンメラが編み物の手を休めてそう付け加えた。

この言葉はフリッツから何度も聞いている。彼の心は日本を深く愛し、日本の人々を慈しむこと一杯なのだ。彼は自分のもてる知識を惜しみなく生徒に伝えようとしている。それが彼女にはよく分かる。

カルシユ博士

紅茶でも入れるわ」

今年になって待望の女の子のメヒテルトが生まれた。星の輝きを願って日本名を「壘子」と命名した。

エンメラにとって静かな幸せであった。

でも、この子を連れて、ドイツに帰りたい。両親にもこの子を抱かせてあげたい。

何度もそう思った。日本に住んで、もう三年になる。メヒテルトが母親をみて無心に微笑んだ。

昨年は日本では大蔵大臣の国会での失言を契機に金融恐慌が起こり、社会不安が走る世の中になった。ドイツも同じ状況にあった。

安らぎが欲しい」

+++++

先の見えぬ不安があるから、そう思うのか。フリッツもつぶやいた。

エンメラが美しい声で静かに子守歌を歌う。それがメヒテルトだけでなく、フリッツにも静けさと安らぎをもたらしてくれる。

彼女には異国にあって、環境に馴染めないことがあり、孤独を感じていた。それを紛らわすために、樹木を植えたり、花壇を造ったり、毎日それらの手入れをすることを日課にしていたという。

とはいえ、調査当時には、写真や図面からそれが判るだけで彼女が庭の手入れした様子は、もはや覗うことはできないし、なにしろすべてにわたって老朽化が著しく、人が住めるような状況にはなく、ただ廃墟として放置されていた。

一人で悩み不安があった家事や育児のことでは近所が居力してくれた。これも、エンメラにとっては絶えざる不安の二因であった。後のことになるが、家庭内教育では、中村（香飛）フデ子がメヒテルトの日本語教育に協力してくれた。やや手こずったと、カルシユ再来日時にメヒテルトを前にして自らが語っている。学校にメヒテルトを取って行かせなかったのは、娘を通してシュタイナーの理論の実践を自らの手で行いたかったのか、それともドイツ人としての教育を護りたかったからなのか？ 今となってはその理由がよくわからないが、メヒテルトはそう語っている。もちろん、彼女は折に触れて認識の方法や行動原理などの教育を父から丁寧にシュタイナーの理論に従って受けたことを筆者にも語っている。

隣の英語講師のウッドマンの一家では、母親が日本人だったからだろうか、子供が北堀の小学校に通っていた。

次の写真は一九三五年（昭和十年）頃、エンメラが風邪をひいて養生しているとき二人で撮った写真である。そのころ二人にとって、和風の家具・調度品はよほど珍しかったのである。いろいろなツテ

「二〇〇九年に部分的に修復され、登録文化財となったが、残念ながら筆者が提案した後掲する写真ものとはかなり異なる様相である。」



フリッツと風邪療養中のエンメラ

から、着物 金属手鏡、掛け物、人形、仏像、置物、陶器などを手に入れたという。とくに、北堀の掛け物屋の井上とは親しく交わっていた。

松江の古い土地柄、これらを手に入れることは比較的容易であった。江戸時代の手鏡はエンメラが大事にしていたという。箱に入った人形のセットはメヒテルトのお気に入りであった。

急須や仏像は母の着物などと一緒に現在フリーデルンが保管している。

松江の気候はエンメラには合わず、病気がちであった。彼女は、きちんと物事を処理しなければ気の済まない人であった。お手伝いもその点は大変だったようだ。

メヒテルトは感覚的には母にやや違和感を感じていたとのことであった。フリッツは、孤独であったという。それが理由であろうか、フリッツは自分の気持ち、よりメヒテルトに向き、母エンメラは次女のフリーデルンにより強く傾いたという。

普段はエンメラは庭の手入れに余念がなかった。

家の天井はいつもネズミの運動会であった。その対策として猫を飼っていた。犬も飼っていた。最初は黒いポチ、その後は斑点のあるフレッキーだった。後年、ポチが亡くなった時の様子を斜向かいに住

んでいた、当時十歳前後の竹内（渡部）紀代子が語ってくれた。  
母衣町にカトリック教会の神父だったゲルハルト・ハーマツヘル氏が居た。彼はベルギー出身でフランス語とドイツ語を話す神父であった。一九三二年（昭和七年）春から夏にかけてフリッツが一時帰国したとき、臨時にドイツ語を松江高校で教えたことがある。プロテスタントのエンメラは最初は宗教上の理由から、彼を警戒していたが、後にはうち解けたという。とにかく、家族以外のたった一人のドイツ語での話し相手であった。



大事にしていた急須と仏像



1929年頃 官舎の前で

二

どういふ訳か、メヒテルトはあまり家事の手伝いを母エンメラにさせて貰えなかったとのことであった。当時の生活と近所の様子をメヒテルトが筆者に語ってくれた。

.....

家に戻る。中では、エンメラがお手伝いのきみえにドイツ風料理を教える。

わたしもしたいわ」

邪魔になるから、本でも読んでらっしゃい」

母はあまり教えてくれない。

「まんないの」

きみえさん、材料をむだにしないで」

エンメラが注意をうながす。

石橋の豆腐屋に、メヒテルトはときどきお使いに行く。

「いい匂い」

豆腐の匂いのすばらしさ。

「いっしょに豆乳も店で買うわ」

大好きな香りだ。ヨーロッパにはないものと両親から聞いている。

「マティ、寒天ブッディング、ミルク・卵・砂糖入りカスタードを食べたいわ」  
「お昼は稲荷ずし、卵巻き、海苔巻きを食べるのよ」  
きみえが代わって答えた。

一九三四年（昭和九年）メヒテルト六歳の時、アメリカからか、イギリスからかよく分からないが、お客があった時の写真である。椅子に座った婦人が訪問客であるが、だれか分からない。近所の人も一緒であった。そのときの記念写真である。向かって右から四番目が、斜め向かいの住民の渡部フミである。

一九六八年（昭和四十三年）に『奥道湖ホテル』でのカルシュ父娘のインタビュで、きみえが、エンメラのことを語っている。そのエンメラの姿・形のすべてにわたって、このとき四十歳になっていたメヒテルトがそっくりだといっていた。  
もちろん、笑いながらフリッツはこれを否定していたが……。



外国からの客を交え学校関係者と一緒に撮影

そのときの録役で、『日本の女性はメヒテルンぶされたときっている。筆者は彼女の娘のうちの一人と電話で話したことがあるが、残念ながら、



近所の土木工事「よいとまけ」

音が筆者の手許にある。子守はきみえの母』として彼女は後々まで慕われた。ルートにとっては極めて重要な存在で、おのぬくもりや子守歌を今もなお、記憶し

カルシュ家に関する記憶が殆どなかった。

小泉八雲記念館の近くに好奇心旺盛な小学生の松本昭が住んでいた。当時、自分とは別世界と感じたこの官舎の洋館はいまでも、忘れ得ぬ彼の心のふるさとである。現在、大阪在住の『少年』から家の内部の写真が送られてきた。時期同じくして、アメリカからも修正を終えた家の見取り図を手に入れた。この時に、メヒテルトから直接に聞いたことがもともとなって、『湖畔の夕映え』の一節にあるような『官舎での夕べ』を描写した。



居間で愛犬と戯れるエツメラ



日本の母と呼んでいたきみえにオンブされたメヒテルト

## 近所の人々

松江市奥谷町の双子の官舎に向き合った二軒の家が渡部家の二家族の住居であった。ウッドマン家の向かいが渡部愛之助宅、カルシユ家の向かいはその分家であった。愛之助夫婦、長男忠、長女紀代子、それに二男順が住んでいた。愛之助は旧制松江高校の創立以来の学務課担当であった。二人の子息も同じ学校に通っていた。忠は十六期文甲、順は二十期理甲で親子で松江高校に縁があった。どちらも選択した外国語は英語であった。紀代子は一九二〇年（大正九年）生まれで、周囲の様子を良く記憶している。現在、埼玉県所沢に住んでいる。

メヒテルトは彼女より八歳年下である。二〇〇二年（平成十四年）暮れに、彼女の娘の信子が友人から紹介された。彼女は祖父愛之助の家に中学生まで住んでいたという。紀代子は乳母車を押しているメヒテルト

として、十七歳頃あの火事をも目撃して、記事には愛之助の名が見られる。

### 松本による提供

子を自宅に訪ねた。懐かしみながら、当時のことを筆者に話してくれた。その母フミは小泉八雲旧居で知られる根岸家の出身である。かカルシユ家に招待された。当時は今と違って、クリスマスのことな



奥谷町の官舎の階段



埼玉の自宅で 竹内紀代子とともに  
2003年1月



官舎の庭と飼い犬 1933年頃

この地方にある数少ない洋館を文化財として、大切に保存する意味もあるが、この建物をカルシユの残した偉大な足跡の資料を保存する記念館として、再生させたいものである。



1926年 多田宅での  
カルシュ夫妻

エンメラが自ら焼いたパンであった。バターは北海道から手に入れた。いつかメヒテルトがそんなことを筆者に語ってくれたことがある。

復活祭には、種々に色塗られたゆで卵を紀代子が貰ったという。オースタハーゼと呼ばれるウサギが子供達に置いていく卵といわれる。遠い昔ドイツ人から筆者が聞いたことがある。ビート（赤カブ）とタマネギの皮を使って卵を染めたとメヒテルトが教えてくれた。紀代子には何のことか分からなかったという。後日、林檎をそのお返しというか、お礼にカルシユ家にあげた。林檎は愛之助が学務事務を務めていたこともあって、生徒の故郷からの贈り物であったという。林檎や卵は当時高価なもので、裕福なカルシユ家でもそんなに食べられるものでなかったそうである。

渡部家では正月にカルシユ夫妻を家に招いて餅を、またお雑煮やおせち料理を御馳走した経験がある。英語を学んでいた忠はよくエレーナの面倒をみていたので、ウッドマン家から食事に呼ばれたこともあるという。

カルシユ夫妻が夏休み中に軽井沢に行っている間は、紀代子が猫を預かった。餌はときには鯉節だったが、普段は魚の残りか小麦を煮たオートミールのようなものであった。ほかに与えたものは何だったかよく覚えていないという。

一九二九年（昭和四年）頃である。エンメラはドイツ人が多く住んでいた軽井沢行きを楽しみにしていた。夏休みになって、フリッツとは別に、エンメラがメヒテルトを連れて軽井沢に出かけたときの様子を紀代子が鮮明に覚えている。

飼っていた黒い犬のポチであろう。この犬が道端の排水溝のなかで口に物を突き刺し死んだとき、そ



モニカ・ウッドマン ウサギ小屋の前で

の嘆き悲しむエンメラの様子を紀代子が印象深く目撃したことを語ってくれた。

ところで、二〇〇三年（平成十五年）の暮れに、カルシユ博士顕彰に何かと心遣いのあった江角比出郎の案内で、奥谷周辺の説明を聞いていたときに、偶然に一九一三年（大正二年）生まれの桑田武一郎と出会った。因みに、江角はカルシユ博士を尊敬する五期文、酒井勝郎の教え子にあたる。右隣家



カルシユ博士の旧住居の前、桑田武一郎

の桑田が自分の母親のハルがメヒテルトから受けとった手紙を筆者に、当時のことをしみじみと話してくれた。たとえば、カルシユ家のお手伝いが砂糖を買ってきたとき、袋の縁を叩いて、大事に容器に移す様子を見たという。ドイツ人というものは「冬ういうこと」を丁寧にするのかと感心したという。火事的时候はこの桑田家の奥まで荷を運んだ。この様子を筆者がいろいろ尋ねた。そのときの右隣宅の桑田、左隣家の母子、それに筆者と一緒に撮影したのが右の写真である。

渡部宅が庭も広く、当時高校生の渡部忠がいわゆる「突事場の馬鹿力」で、とにかく夢中で荷物を運んだということである。

兄の忠が元気であったら」が紀代子の結びの言葉であった。

## 偶然の出会い

—

ここで、この物語のもとになった、筆者とカルシユ博士との出会いの奇縁を述べてみたい。

一九九九年 平成十一年)の九月五日朝の出来事がすべての始まりであった。おそらく、このことがなかったなら、カルシユ博士のことは人知れず、自然消滅していたであろうと高齢の関係者の誰もが口を揃えて後に筆者に語っている。

それは、シユトウツトガルトの小さなホ

### Hotel am Friedensplatz

| Hotel am Friedensplatz, Friedensplatz 2-4, 7030 Stuttgart   |              |  |       |           |          |       |       |           |          |              |   |       |       |              |  |  |  |       |
|---|--------------|--|-------|-----------|----------|-------|-------|-----------|----------|--------------|---|-------|-------|--------------|--|--|--|-------|
| Mr.<br>Hidetoshi Wakatsuki<br>1-5-45 Yushima Bunkyo<br>J Tokyo  |              |  |       |           |          |       |       |           |          |              |   |       |       |              |  |  |  |       |
| Datum : 05.09.99<br>Rechnung : 09902692<br>Res-Nr. : 9903013  |              | Datum : 05.09.99<br>Rechnung : 09902692<br>Res-Nr. : 9903013 |       |           |          |       |       |           |          |              |   |       |       |              |  |  |  |       |
| Auftrag : ab<br>Referenz : BR   |              | Abreise : 04.09.99<br>Abreise : 05.09.99                     |       |           |          |       |       |           |          |              |   |       |       |              |  |  |  |       |
| Zimmer : 17   |              |  |       |           |          |       |       |           |          |              |   |       |       |              |  |  |  |       |
| <table border="1"><thead><tr><th>Datum</th><th>Leistung</th><th>Menge</th><th>Preis</th><th>Gesamt DM</th></tr></thead><tbody><tr><td>04.09.99</td><td>Übernachtung</td><td>1</td><td>90,00</td><td>90,00</td></tr><tr><td colspan="4">Gesamtsumme:</td><td>90,00</td></tr></tbody></table> |              |  |       | Datum     | Leistung | Menge | Preis | Gesamt DM | 04.09.99 | Übernachtung | 1 | 90,00 | 90,00 | Gesamtsumme: |  |  |  | 90,00 |
| Datum   | Leistung     | Menge  | Preis | Gesamt DM |          |       |       |           |          |              |   |       |       |              |  |  |  |       |
| 04.09.99  | Übernachtung | 1  | 90,00 | 90,00     |          |       |       |           |          |              |   |       |       |              |  |  |  |       |
| Gesamtsumme:  |              |  |       | 90,00     |          |       |       |           |          |              |   |       |       |              |  |  |  |       |
| In dieser Rechnung sind folgende Mehrwertsteuerbeträge enthalten:   |              |  |       |           |          |       |       |           |          |              |   |       |       |              |  |  |  |       |
| Brutto: 90,00 Netto: 77,59 MWST: 12,41 zu 16,00 %   |              |  |       |           |          |       |       |           |          |              |   |       |       |              |  |  |  |       |
| Summe Belastung 90,00 DM  |              |  |       |           |          |       |       |           |          |              |   |       |       |              |  |  |  |       |
| Vier 90,00 DM   |              |  |       |           |          |       |       |           |          |              |   |       |       |              |  |  |  |       |
| Restbetrag 0,00 DM  |              |  |       |           |          |       |       |           |          |              |   |       |       |              |  |  |  |       |

Hotel am Friedensplatz,  
Friedensplatz 2-4  
7030 Stuttgart  
Tel. 07 11 / 2 56 50 42  
Fax 07 11 / 2 56 43 96

Wir danken für Ihren Besuch und wünschen Ihnen eine gute Reise  
Bankkonto: Landesbank Baden-Württemberg Kto.-Nr. 2 530 082  
BLZ 600 501 01

7030 Stuttgart - Friedensplatz 2-4 - Telefon 07 11 2 56 50 42 - Telefax 07 11 2 56 43 96

ホテル宿泊の際の領収書 普通なら捨ててしまうものを何故か捨てずに保存してあった。



ホテル・アム・フリーデン・プラッツ

テルでの出来事であった。フリーデン・プラッツ 広場)に面したホテル・アム・フリーデン・プラッツで筆者がフリーデルンと偶然に出会ったことであった。

さて、問題の、偶然のその日の朝のこと、仕事の準備もあって七時頃であっただろうか、階下のダイニングルームで室蘭工大の高原健爾博士らと三人で朝食を摂っていた。すると、上品な婦人が私の左斜め向かいのコーナに壁を背にして座った。彼女が食事を始めたとき、筆者らは食事を終えたばかりで、この日の予定について、もちろんのこと日本語で語り合っていた。そのとき、彼女がふと筆者の方をみて微笑んだ。気づいてそのわけを尋ねると、大部分は忘れた日本語の響きをととても懐かしく感じて、自然にそうなったとのことであった。

彼女は宗教の街のマルブルクに在住の地理学と政治学を専門とするフリーデルン・クリスタ・カルシユ博士であることがわかった。彼女は松江、横浜、東京、軽井沢での懐かしいかつての暮らしをしみるように語ってくれた。そして話題は父フリッツが一九二五年(大正十四年)から一九三九年(昭和十四年)まで旧制松江高等学校で教鞭を執っていたことへと順に進展していった。しかし、残念ながら筆者らの出発の時間も迫り、再会を期して一緒に写真を取り、住所を伺って別れた。

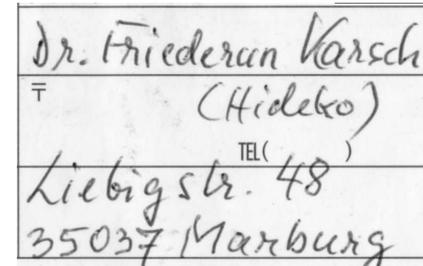
そのとき、低解像度設定のままのデジカメで写真をとったので、帰国後その出来映えを見てちよっと悔んだが、もはや後の祭りであった。

フリーデルンとの別れ際に、急ぎ筆者の名刺を手渡した。彼女には名刺の持ち合わせがなく旅行案内書に書いていた葉書に自分の住所を急ぎ書きつけた。ついでに、そこに彼女の日本名の「ひでこ」を記した。この一片の書き付けが実際に、調査の総ての出発点そのものであった。これ以外にカルシユ博士を知るすべは全くなかった。フリーデルンから別れ際に手にした紙片に、住所と一緒にメモされた彼女

るに十分ではなかったことが、その文面から推測された。しかしながら、この時点では、カルシュ博士が、どのようなひとであるか、また生徒との関わり合いも全くわからず、推測の域をでることはなかった。



1999年9月5日シュトゥットガルトのホテルで撮影  
フリーデルンと筆者



フリーデルンの住所が書かれた紙片

の日本名が、私の名前の ひで・としと 同じであった。あとで気がついたこととはいえ、出会いには偶然が幾重にも重なっていた。

帰国後、約束の写真をフリーデルンに送ったところ、返事にカルシュ博士の履歴と業績の概略が届いた。戦中、戦後の混乱時に紛れて彼の業績が散逸し、日本では十分に時間がとれず、その後ドイツに戻る機会があってもなおまとめ

二

フリーデルンの話に興味をもった筆者は、松江市役所と島根県庁、島根大学に問い合わせたが、カルシュ博士に関する具体的情報は全くと言っていいほど得られず、筆者も多忙で、彼女とはクリスマスにカードを交換しただけであった。ただ、関連する史実と人名の確認を細々と行っていた。年が改まり自らの周辺に種々事情が生じたこともあって、その後も十分に時間がとれなかった。それでも、フランスで開催された遠隔医療国際会議に参加・発表時に、時間をみてドイツに立ち寄り、会おうとしたが、結局、時間がとれずこれも断念した。帰国後の四月にやっとこの件に本格的に取りかかることができた次第であった。



竹原敏夫 修繕前の官舎の前で 2000年4月28日

その後、フリーデルンから紹介された長女のメヒテルトに電話と手紙で接することができた。これから得られた情報をもとにして、かつてのカルシュ博士の生徒と縁者の何人かに接触を試みた。ところで同博士は長女の彼女を Mechtild メヒティルトとよび、幼な友達はメヒちゃんと呼んでいたという。しかし英語圏ではMの発音が困難なので、アメリカでは、ミドルネームのマリアと呼ばれている。

あとでわかったことだが、一九六八年（昭和四十三年）にカルシュ博士は旧制松江高校同窓会から招かれた。それ以来、彼女がずっと交友を温めていた数人の住所をアルファベットの形で筆者に紹介してくれたことがあった。そのなかで国内のカルシュ博士に縁のあるキーパーソンである酒井勝郎、増田義哉、白石・遠藤捨雄、江上正孝に最初に連絡をとることができた。もちろん、住所もアルファベットなので、まず対応する日本語を調べ、さらに電話番号を調べ電話をしたのが実質的な調査の開始となった。酒井からは厚意により郵送で『カルシュ先生 私家本』のコピーを入手した。



九期文乙のクラス代表を務め、何かとまとめ役を行ってきた白石・の紹介で、宮田正信、岡崎道夫、奥野良臣らとの面識を得た。また、同窓会長の中村啓成、そして澤田弘夫、田島康弘、松本昭などからも、元気に過ごしている旧生徒の経歴などの情報を得ることができた。このころ、同時に、米国在住のメヒテルトからは、次々と事実を明らかにする手がかりを得ることができた。その間、彼女が提供するすべての資料を彼女の許可のもとに公開することを任された筆者は、『カルシュ先生顕彰発起人会設立』と『将来の計画立案』のために白石、宮田、岡崎、奥野の四氏と芦屋で会うことになった。

この時期に東洋経済ビルで毎月第二木曜日に開かれた松江高校同窓会で細田吉蔵らと語る機会が得られた。また、金沢では澤田弘夫とも親しく語り合うことができた。

カルシュ博士は戦前、松江高等学校でドイツ語、ドイツ文学、ドイツ哲学の教鞭をとっていた。一九四〇年（昭和十五年）からはドイツ大使館に勤務し、両国の友好関係に尽力した。娘が二人あり、そのうちの一人が Frau Friederun Karsch（日本名 ひびこ）一九三七年四月二十三日生）で、現在ドイツのマールブルクに住む学者である。もう一人は Mrs. Mechtild St. Goar（日本名 ほしこ）一九二八年一月二十七日生）で、現在アメリカ合衆国テネシー州チャタヌーガに住んでいる。カルシュは一九三九年に帰国後、翌年に再度来日して、横浜（一九四〇～四四年）、東京（一九四四～四五年）、軽井沢（一九四五～四七年）に居住したとのことであった。

妹のフリーデルンからは十分に話を聞けなかったが、何回か姉メヒテルトと直接に電話で話すうちに、カルシュ博士の残した資料と絵画、松江の写真およびかつての生徒とその縁者の資料を二人が保管していることがわかった。日本では広く、ラフカディオ・ハーンが顕彰されているが、カルシュの十四年に及ぶ滞在期間から言っても、松江や松江高校で果たした功績は大きいものと推測された。おそ

らく戦中・戦後の混乱期に当たり、彼の足跡を記録として留めおくことができなかったのであるかと想像した。それゆえ、彼の足跡を明らかにし、故人の縁者が元気なうちに、歴史の狭間に埋もれた彼の功績を明らかにしたいと思うようになっていた。そこで、筆者が独自に調査をした結果、カルシュが当時の日本を深く愛し、日本の人々を慈しみ自分の持てる知識を惜しみなく生徒に伝えていたことがわかった。このことを何とか広く日本人々に知らせたいと思っている。

また彼の日独友好の努力の証もさらに明らかにし、友好発展の礎にしたいと思っている。

彼の履歴についてはフリーデルンから得た書を翻訳したものが調査に役立った。また、長女メヒテルトとカルシュの旧生徒から得られた直接・間接の情報と、外務省、宮内庁、文部省および関連機関、図書館を利用して得た情報をもとに、ほぼ正確に知り得た部分については、記録として留め置いた。折しも、シドニーオリンピックの時期であった。毎日、テレビ放送を見ながら、いや聞きながら、ひたすら資料のワープロ入力を行った。もとよりことさら、まとめようとは思わず、どなたか、興味がある人がいたら読んでもらおうと思っただけで資料を綴った。この時期に、調査のまとめの協力とカルシュ顕彰を各方面に働きかけてみたが、『こんな人はゴマン』という冷たい反応にいつも泣かざるを得なかった。このような環境にあって、結局は、自ら総てにわたって関わらざるを得なかった。こうした調査とそのままに関することについての苦労については、いずれ語ることにする。

生い立ち

フリッツ・カルシュ博士はドイツ・ザクセン王国の首都であったドレスデン郊外のブラゼヴィッツで、手広く食肉品を扱うヘルマン・カルシュの長男として、一八九三年（明治二十六年）に生まれた。ブラゼヴィッツのシラープラッツにあるフリッツの生家は、その一部が後に小さなレストランとなっている。母はルイーゼ・クニスである。二人の姉がいたが、長女のエリザベートは幼少時に亡くなった。すぐ上の姉が、後にオーストリア出身のドイツ人のハンス・フツシエルベルガーと結婚したフリーデルである。

生家から通りに出て緩やかな道を下ると、エルベ河にかかる橋のうち、ブラウエス・ブンダーと呼ばれる有名なロシユヴィッツ橋がある。

カルシュ博士



ブラゼヴィッツ・シラープラッツにあるフリッツの生家  
HK (Hermann Karsch) が見られる



ブラウエス・ブンダーと呼ばれる

ロシユビッツ橋  
エルベ河を挟んで  
ブラゼヴィッツと  
ロシユヴィッツ  
の間にかかる青色  
の橋がそれである。  
造ったときには緑  
色だったのが、時を

経るにつれて青色に変わった。土地の人は  
青の不思議と呼んでいる。

フリッツは四歳になるころ、エルベ河で  
危うくおぼれ死にそうになった。そのとき、  
どこの誰ともわからない旅人が助けてくれ  
たのだった。その情景が彼の脳裏に、はっ  
きりと焼き付いている。両親が名前を聞き  
忘れた。きつと神様であったらうと、フ  
リッツは後に何度も長女のメヒテルトに語  
ったという。

ロシユヴィッツ橋の工事のおかげで蓄財

ができ、裕福になった家庭で育ったフリッツは、近くの市立小学校に入学した。当時の小学生は約二十  
人で、父親の職業が記録されている書類がある。これより工場主などの実業家、大学教授、医師、弁護  
士、薬剤師、貿易商などで、どの子供もいわゆる裕福な家庭の子弟であることが分かる。

フリッツの小学校時代の成績はあまり芳しくない。これは落第だ」とマールブルクの自由ヴァルド  
ルフ学校で教師をしていた次女のフリーデルンは、成績表を見て笑いながら語っていた。日本の通信  
箋・通信簿に相当するが、父親ヘルマンの確認のサインが見られるのも興味深い。ちなみにドイツでは  
数字が小さいほど良い成績で、日本の五段階評価とは異なる。

父ヘルマンは運悪く、一九〇一年の復活祭の時期に、食肉冷凍庫の中で患った風邪がもとで、肺炎を

Schuljahr Ostern 1899 bis 1900

| Klasse                  | Miquelis       | Ostern         | Bemerkungen.   |
|-------------------------|----------------|----------------|--|
|                         | 1899           | 1900           |  |
| Betragen.               | 1              | 1              |  |
| Stetig.                 | 1              | 1              |  |
| Ordnungsliebe.          | 1              | 1              |  |
| Religion.               | 2 <sup>a</sup> | 1              | Genfurgrade:<br>sehr gut (I, P),<br>gut (II, II, IV),<br>genügend (III, III, III),<br>wenig genügend (IV),<br>ganz ungenügend (V). |
| Deutsch.                | 2              | 2              |  |
| Englisch.               | 2              | 2              |  |
| Rechnen.                | 2              | 2              |  |
| Formenlehre.            | -              | -              |  |
| Zeichnen.               | -              | -              |  |
| Errenen.                | -              | -              |  |
| Schönheitsreiben.       | 2              | 3 <sup>a</sup> |  |
| Singen.                 | 3              | 3 <sup>a</sup> |  |
| Weibliche Handarbeiten. | -              | -              |  |
| Handarbeiten.           | 1 <sup>a</sup> | 1 <sup>a</sup> |  |
| Bekannte Tage.          | 0              | 0              |  |

Unterschrift des Vaters. Miquelis: H. Karsch. Ostern: H. Karsch.  
Unterschrift des Lehrers. Miquelis: Carl Gottmann. Ostern: Carl Gottmann.

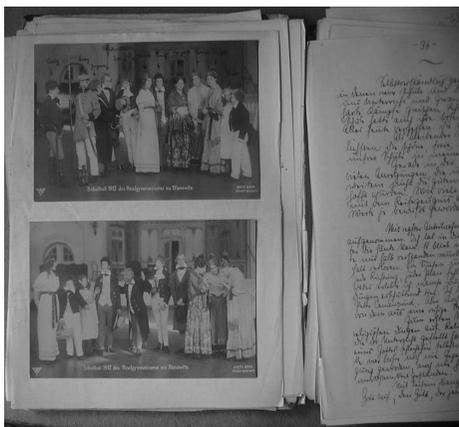
フリッツ小学一年生時の成績表  
左下に父ヘルマンの確認のサインが見られ  
ズ

併発して亡くなった。フリッツ八歳の時であった。

ところで、フリッツが若き日に綴った、日記帳を兼ねたノートが残っている。そのノートのページをめぐっていると、その間に挟まったままの古い絵葉書が見つかった。父ヘルマンがどうやらオーストリ



オーストリア滞在中の父ヘルマンから  
フリッツへの絵葉書



フリッツ自筆の若き日の想い出のノート

カルシュ博士

アへの旅行中に、立ち寄り先のリンツからフリッツ宛に送ったもので、フリッツは終生、大事に保存していたという。父の残した数少ない形見の品の一つであった。もう百年以上前のものである。

フリッツの残したノートの内容の大部分は、若き日の想い出である。内容はまだつぶさに調査してい

ないが、おそらくそのすべてが第一次世界大戦前に書いたものである。十四、五歳までの、音楽を聴いたときの感動と、女の子とのやりとりや自分の心の動きを控えめに綴っている。彼の心根を知る有力な手がかりとなる記録である。

この書に残っている十枚ほどの写真には、一応解説が付いているが、誰の写真か、何のためのものか現在のところ分からない。

フリッツの母のルイーゼは、自分たちの大きな家が人手に渡ってからは、アパート暮らしであった。一九三二年に、三歳のメヒテルトは独り暮らしの祖母ルイーゼと、この地で面会している。このくだりについては、彼女が初めて見るドイツの街や祖母の印象とともに拙著『湖畔の夕映え』に載せている。

## 二

裕福な家庭の子供が通う市立小学校を終えたフリッツは、当時としては珍しく、大学進学を目指して上級学校であるドレスデン・ノイシュタット王立ギムナジウムに通うことになった。一九〇四年 明治三十七年)のことである。ドイツのギムナジウムは、日本でいえば中学校から高校までに対応する学校である。父親の死後にあつて、母のフリッツに対する期待の大きさがわかる。

一九〇六年 明治三十九年)にブラゼヴィッツ職業ギムナジウムに移ったフリッツは、一九一四年 明治四十七年)三月十三日に卒業発表会で、英語での講演を義務づけられていた。このときフリッツは二十一歳になっていた。最初は文科系のギムナジウムに入学、後に理科系に移ったので、大学入学までに

他人より長い時間を要した。

写真に示したギムナジウムの年報は、卒業資格（アビテュア）認定時の公開テストの案内であり、学校長ベルナー教授博士の名で父兄に知らされている。これと同時に、彼の進路が自然科学であることとの記録書類となっており、彼が自然科学を志していた確かな証拠になっている。

フリッツは理科系に方向転換していたし、当時脚光を浴びていた



フリッツ 16歳

カルシュ博士

32

Alle Prüfungen bestanden die Reifeprüfung:

| No. | Name           | Geburtsjahr | Geburtsort | (Geburtsort) Wohnort der Eltern | Schüler der Anzahl seit | Prüfungstermin | Prüfungsort | Prüfungsfach | Prüfungsergebnis |
|-----|----------------|-------------|------------|---------------------------------|-------------------------|----------------|-------------|--------------|------------------|
| 1   | Böhrer, Hubert | 1884        | S. X.      | (Görlitz) Bismarck              | 1899                    | 1913           | 1914        | 1914         | 1914             |
| 2   | Conrad, Rudolf | 1885        | S. XX.     | (Pisa) P. P. P.                 | 1899                    | 1913           | 1914        | 1914         | 1914             |
| 3   | Conrad, Rudolf | 1885        | S. XX.     | (Pisa) P. P. P.                 | 1899                    | 1913           | 1914        | 1914         | 1914             |
| 4   | Conrad, Rudolf | 1885        | S. XX.     | (Pisa) P. P. P.                 | 1899                    | 1913           | 1914        | 1914         | 1914             |
| 5   | Conrad, Rudolf | 1885        | S. XX.     | (Pisa) P. P. P.                 | 1899                    | 1913           | 1914        | 1914         | 1914             |
| 6   | Conrad, Rudolf | 1885        | S. XX.     | (Pisa) P. P. P.                 | 1899                    | 1913           | 1914        | 1914         | 1914             |
| 7   | Conrad, Rudolf | 1885        | S. XX.     | (Pisa) P. P. P.                 | 1899                    | 1913           | 1914        | 1914         | 1914             |
| 8   | Conrad, Rudolf | 1885        | S. XX.     | (Pisa) P. P. P.                 | 1899                    | 1913           | 1914        | 1914         | 1914             |
| 9   | Conrad, Rudolf | 1885        | S. XX.     | (Pisa) P. P. P.                 | 1899                    | 1913           | 1914        | 1914         | 1914             |
| 10  | Conrad, Rudolf | 1885        | S. XX.     | (Pisa) P. P. P.                 | 1899                    | 1913           | 1914        | 1914         | 1914             |
| 11  | Conrad, Rudolf | 1885        | S. XX.     | (Pisa) P. P. P.                 | 1899                    | 1913           | 1914        | 1914         | 1914             |
| 12  | Conrad, Rudolf | 1885        | S. XX.     | (Pisa) P. P. P.                 | 1899                    | 1913           | 1914        | 1914         | 1914             |
| 13  | Conrad, Rudolf | 1885        | S. XX.     | (Pisa) P. P. P.                 | 1899                    | 1913           | 1914        | 1914         | 1914             |

Zur Befreiung des Reifezeugnisses Blasewitz zugelassen (bis 12. VI. 1914) (Reifezeugnis Blasewitz):  
 14) Jagdforst, Christian, 1884, S. XX., (Pisa) P. P. P., 1899, 1913, 1914, 1914, 1914.

Die Entlassungsfeier der mit Reifezeugnis Abgehenden findet Freitag, 15. März 1914, früh 10 Uhr nach folgender Ordnung in der Aula des Realgymnasiums statt:

- Gesang des Schulchores: „Gud ist der Herr“ von Karl Phil. Ein. Bach.
- Schülerverträge:
- Französischer Vortrag (Herrn Späthholz, Ia)
- Englischer Vortrag (Herrn Karisch, Ia)
- Deutscher Vortrag (Herrn Walter, Ia)
- Abschiedsgruß an die Abgehenden (Herrn Starke, Ib).
- Gesang des Schulchores: Mendelssohn Komiat.
- Entlassung der Abgehenden durch den Rektor.
- Allgemeiner Schlußgesang: „Zucht in Frieden euer Pfad!“ (Jud. 51).

A. Öffentliche Klassenprüfungen.  
 Die schriftlichen Prüfungen der Klassen IV–VI wurden vom 7. bis 16. März 1914 abgehalten.

ギムナジウム終了の発表会案内 1914年



実業ギムナジウムの卒業資格試験予告

電気工学の技術者になろうとしていた。ドイツでは故郷の近くの大学に入学することが普通であったことと、大都市の有名大学であったことから、ドレスデン工科大学に入学し、関連科目の勉学を開始した。この時期は、世の中が不穏な動向にあって、間もなくサライェボ事件を契機に第一次世界大戦が勃発した。このとき、理由は不明であるが日本語で言えば義侠心からなのか、フリッツは自らの勉学を中断し、学友らとともに、ドイツ帝国の電信隊志願兵として参戦した。この間、戦争の悲惨さを体験し、多くの仲間を失ない、復員した彼はテクノロジストと人の生き方に強い懐疑的な関心を抱くに至った。そして、宗教に関心を寄せ、大学では哲学を学ぶ決心をした。

このために当時の学問の中心地であり、もっとも意に沿ったと考えられるマールブルクを訪れた。この地はフランクフルト・アム・マインの北八〇キロに位置する宗教の都市でもあり、ライン支流ライン河に沿って早くから開けた古都である。小高い丘からはもちろん、街なかでもライン河の静かな流れを見ることができ。中央駅を降りてすぐのエリザベート教会はドイツ最古のゴシック教会でこの地は随一の宗教聖地となっている。図書館の豊富な大学町としても有名である。

ここはフリッツとエンメラそれに長屋喜一との運命的な巡り会いがあった古都であり、松江に赴任する直接的な機会を与えられた縁（ゆかり）の地である。

天から優しく微笑むカルシユ博士の见えない縁（えにし）の糸で導かれるように、筆者は彼の足跡を辿りながら、ついに荘厳で美しいマールブルクの地に降り立った。

この町のシンボルのエリザベート教会を左に見て、木組みの古風な家々が並ぶ石畳の通りに入った。そこを軽い靴音を立てながら、ゆっくり歩を進めると、緩やかな登り坂の小径に出た。

光の陰影のなす霞のなかに織り込まれるこの情景のなかにカルシユ夫妻の在りし日の姿を見たような気がした。今来た途を時折振り返りながら、あたりを見渡すとそんな気配が感じられる。この地の歴史の重みを背にゆっくりと歩を進めていくと、これまでずっと心に抱いていたカルシユへの熱い思いが急激に胸に迫ってくるのを感じた。

## 石畳胸もと熱く登りゆく つたの絡まる古城の街の

山頂の城からの街の眺めはすばらしい。遠く、ゴシック様式の教会がライン河と調和し、一体化した景色が霞んで見える。ここから貴族の館に入る細い路地を下るとツタの絡まる石垣がつづく。これを左手に見ながら、さらに下ると街の広場が眼に入る。そこに佇む古風なロカール（居酒屋）が印象的である。

カルシユ博士

典型的なドイツの街並みの雰囲気である。

この地は、河を挟んで広がる美しい城下町であり、後述するがエンメラの七百年前の祖先が宗教家であったことを伝える因縁の地である。また、戦後カルシユ夫妻が住んでいたところでもある。

## 見ぬ人の跡を尋ねしけるげると この街かどに眠る偉業を

そんな感慨が胸にこみ上げてきた。

そこからさほど遠くない通りの小さなアパートに、シユトウツトガルトで運命の出会いをしたフリーデルンが現在住んでいる。

広場に面した場所にフリッツがよく立ち読みした本屋がある。ここで、フリッツはドレスデンの博覧会以来、再び、ラファディオ・ハーンの本をここで目にする事になった。これを期に自分の運命が日本へと急速に大きく傾いていく事になった。フリッツはマールブルク大学の文学部の建物の二階の教室でエンメラと出会った。フリーデルンがそう語ってくれた。おそらくラテン語か何かの講義のときであつたらう。

学生時代には、二人とも経済的に恵まれなかったので、学生食堂のメンザ以外での食事は難しかった

ようだ。贅沢な食事をする余裕はなかったという。また、二人ともアルコールやコーヒーはほとんど飲むことはなかったとのことである。筆者は『湖畔の夕映え』では留学生の長屋らともによく利用したように描いているが、事実とは異なるようである。長屋に対するドイツ語のレッスンは研究室で行っていたとのことである。しかし、それでも二人で過ごしたことのあるガストシュテッテがあった。そこは当時、その名をディ・ゾンネ（太陽）といった。現在のツァ・クローネ 冠がそれである。

## 二

恋愛時代に、シュタイナーの言葉をフリッツが手書きでまとめて恋人のエンメラに贈った。絵も手書きである。これがメヒテルトの手許に残っている。このころすでに、シュタイナーの人智学に彼の関心は傾き、そのような仲間との交流を深めていた。



フリッツとエンメラが最初に出会ったマルブルク大学文学部二階講義室



ガストシュテッテのディ・ゾンネ現在のツァ・クローネ

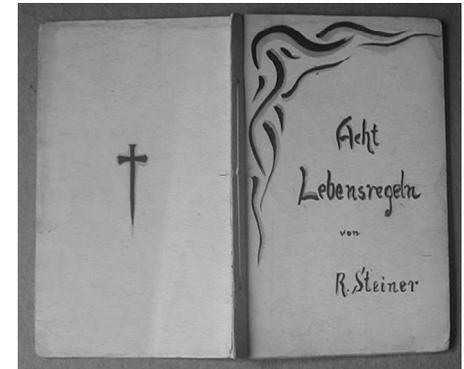
フリッツは大学卒業後、ニコライ・ハルトマン教授のもとで哲学博士の学位を取得した。その証明書を筆者がドイツ訪問時に次女フリーデルンより手に入れた。同じニコライ・ハルトマンに師事し、生涯の友となった長屋喜一にはドイツ語を個人的に教えたことによって、二層親密さを増した。長屋は後に東京大学教授として教鞭を執った人で、退官後はヨーロッパ各地で禅の普及に努めた。当時は今と違って、ふたりは互いにDu、ボウで呼ぶことはなく、Sie（ズイ）で呼んだという。今のドイツ語の主語の用法から言うとかなり、かしこまっている。小説『湖畔の夕映え』で描いたほどに、互いに親しい仲間になっても、終生、姓を用いて呼び合ったという。現在とはずいぶん異なる習慣である。

メヒテルトが母エンメラから聞いたところによれば、当時の社会事情もあつたろうが、ハルトマン教授はフリッツの就職先の世話には、あまり熱心ではなかったそうである。このような彼に対する不満があつたにも拘わらず、後に長屋と一緒に『ハルトマンの哲学』についてわざわざ書を著している。したがって、軽い不満の程度のことか、あるいはフリッツの人智学への興味からいって、学術的な信条・意見の違いによることが彼にそう言わせた理由であつたのであろう。いずれにせよ、当時の就職状況はきわめて劣悪であつたので自分にあつた職業を見つけることは容易なことではなかつたはずである。

ところで、哲学者ハルトマンというとカルシュの師のニコライ・ハルトマンとエドアルド・フォン・ハルトマンがいる。

『海の幸』や『羽だつみのいろこの宮』などの作品で有名な、仮象の世界を生きるエネルギーとした天才日本画家の青木繁が大きな影響を受けたのは後者からである。

フリーデルンによれば、本頁下写真の家の二階が、一九二二年（大正十年）に結婚してから一九二五年（大正十四年）松江高校に就任するまでエンメラと新婚生活を送ったところである。二人は、知り合ってから僅かの期間で結婚したという。その住居のある場所はヴァイセンブルガー通り、現在のシュッキング通りである。



フリッツがエンメラに贈ったシュタイナーの八つの人生訓（1920年）

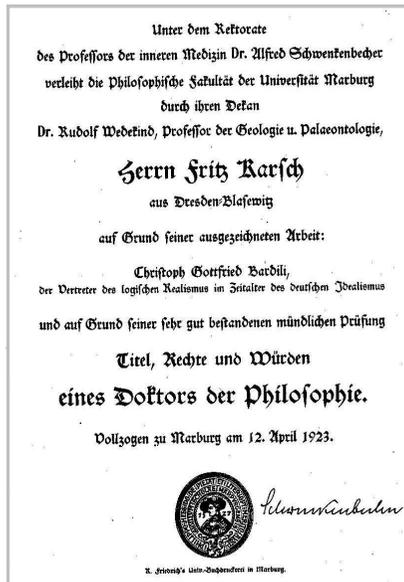


新婚時代の住居（1921-25年）

### 学問と著述

—

カルシュ博士は生涯、自らの研究成果の殆どを体系的にまとめることなく、ルーズリーフのノート、一万五千頁に及ぶメモを残している。現在アメリカ合衆国テネシー州チャタヌーガにある長女メヒテルの自宅の倉庫に大切に保管してある。約一〇〇〇頁は、父フリッツの肉筆の特徴を知っている彼女が解説したが、そのメモの脈絡の解説は、彼の思想背景や事情を知らないものにはほとんど不可能であるという。これを何とか解説して、若い研究者や学生のためのカルシュ研究資料としてデータベース化したいと思っている。これには多くの労力と費用を必要とするので、公的な資金援助と古い文字と難解な文章を解説できるドイツ人の協力が望まれる。カルシュはほとんどの研究成果を活字化しなかったとはいえ、印刷物になった著書をいくつか残している。特に自分の運命を変えた、生涯の友であった長屋喜一とは、自分と共通の師であったハルトマンの思想を解説しようとした。その書が『ハルトマンの哲学』長屋



哲学博士学位記 1923年

喜一・フリッツ・カルシュ共著、東京中文館、(一九三七年)』である。加えて、日独文化協会(Japanisch-Deutsches Kultur Institut Tokyo)出版の二つの論文『ラントとハルトマンにおける自由への課題 (一九二八年)』と『ドイツにおける国民運動の民族的根拠 (一九三四年)』が残されている。前述のように、カルシュは第一次大戦後マールブルク大学で学び、後にニコライ・ハルトマン教授に師事した。同教授は、ポール・ナトルプおよびルドルフ・オットーとともに、同大学哲学科の三大スター教授といわれた傑出した人物である。ハルトマンは、本邦においても昭和期の哲学者に少なからず影響を与えている。

そのハルトマン教授の指導で、論文『ドイツ理想主義の時代の理性的リアリズムの代表的人物、クリストフ・ゴットフリート・バルディリ』をまとめた。この研究により、一九二三年(大正十二年)に彼は哲学博士の学位を授与されている。

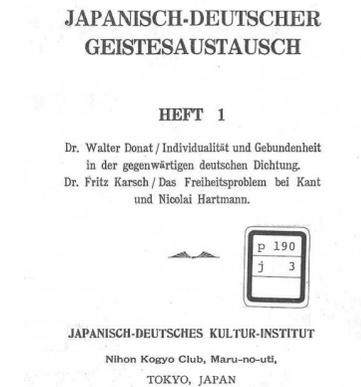
シュタイナーの影響を受けたカルシュは後に、『ヨーロッパ文明の没落』の著書で有名なシュペンクラーと同様に、根本精神の欠落している性急な歩みに対する批判だけでなく、人間性を肯定する可能性として『復象』の世界を描き、さらに『復象』の社会を実現し、そこで生きることを目指すことの重要性を当時の生徒達に語っている。

具体的には、唯物主義に走り過ぎた病態にある文明に支えられているヨーロッパ諸国に文化の崩壊の時が来る。それも西暦二〇〇〇年頃といっている。この時期に全世界の人々の間に混乱が起り、大きな危機に直面するという。驚くべきことに、これが、当時の講義の中で高校生に語られている。ヨーロッパ

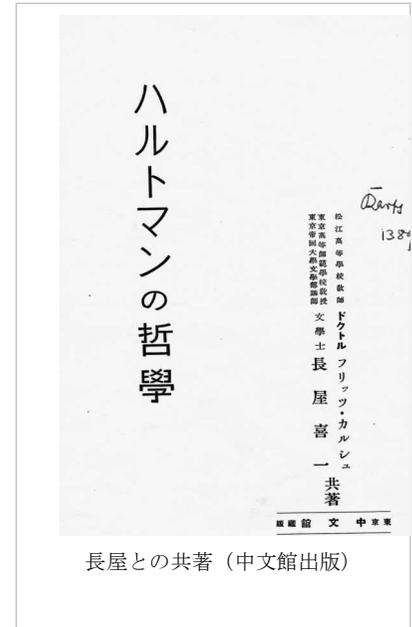
カルシュ博士

は物質文明の発達により、その精神が物質的成果のみの社会に閉じこめられていることと、そうした中で、社会も個人も自らを支える精神的根拠が希薄であって、不安定な状況に晒されていることをその理由に挙げている。なお、『尚質と異質』の『混在と調和』で特徴づけられる日本の文化の一面と、他の地域からの思想や文物を巧みに吸収してこれを融合する力を大きな特徴として指摘している。そして、一つのが他を滅亡させることなく共存している日本の文化の在りようは世界中の識者の注目するところであると語っていたという。

まさに、今日の世の有様を年代を含めて的確に予測していた。このことは混乱の時代に生きる我々にとって実に驚くべき洞察力であり、これらの講義内容の一部を五期理乙生の酒井勝郎が記録にとどめている。また、日本を離れるに際して、カルシュが生徒に語ったことをドイツ語の文章で印刷物として自ら残しているのは確かな証拠として極めて興味深い。



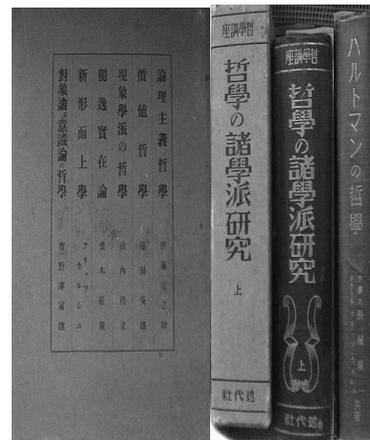
日独精神文化交流のカルシュの論文  
(日独文化会館発行 1928年)



長屋との共著 (中文館出版)

ファイルブックが三十七冊現存している。

敗戦時の混乱により、彼は軽井沢で一九四五年（昭和二十年）に自らの執筆をやむを得ず停止した。ドイツ帰国後も生活のために、種々の仕事に追われたこともあって、残念ながら日本に關して十分な学問的繋がりを保つことができなかったようだ。彼は自分が通じていた事項についてまとめる作業をせずに、逆におびただしい数の追加や訂正を書き込んだ。全体に流れる彼の意図は有史以来、人の思考がどのように変化してきたのかを示すことであった。彼が禅と西田哲学に大きな興味を抱いてい



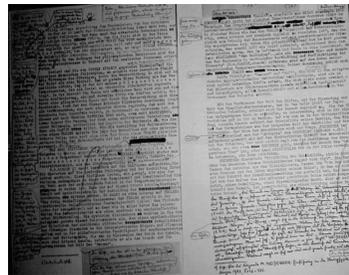
フリッツ・カルシュの著書及び共著

たことを彼の残した文書中に見出せるものと確信できるし、彼がどこから日本の哲学に入って行ったのかを明らかにできるはずである。

フリッツは自分の仕事の中で、人の思考がどのようにして、今に至ったかを論述し、また学問や内的修練を通して、シュタイナーが唱えた新しい思考に如何にして到達できるかを示そうと努力した。人が直接知ることのできる肉体的なものから、ひとの知識ではない、しかし、接近可能である形而上学的な「天の信念」に、大胆に自分が入り込むことによって、見出したものが彼の哲学であろう。また、彼の仕事はシュタイナーの哲学とカント哲学との関連を示そうとしたことにもある。フリッツは自らを称して行動的人智学者であり、シュタイナーの「精神科学」を世に広める教師であると云っていたとのことである。彼は自分の子供達にも基本的な哲学的思考法を真剣に伝えた。



メヒテルト自宅に保存されている  
カルシュ博士遺稿 約 15,000 頁



カルシュ博士 上記未整理遺稿の一部

長女メヒテルトは人智学とシュタイナーの哲学的洞察法のいわば、一人の「耆徒」であったとのことだった。現在のメヒテルトの主な仕事は人智学のドイツ語テキストや文献を英訳することである。戦後ドイツに帰ると、

次女のフリーデルンはマールブルクの自由ヴァルドルフ (Waldruf) 学校に通いマールブルク大学で政治学と地理学の二つの学位を取得し、同じ自由ヴァルドルフ学校の教員になった。この学校は日本では

次に、筆者の理解した範囲内でカルシュ博士の学術業績と思想の一端について述べてみたい。

カルシュ博士の未発表の研究は哲学史と人の意識の進化に関することである。ドイツ旧字体による記述と書き込みのために、解読困難であるが、これまでに一〇〇〇頁余を解読済みであり、古代のインド、中国、ギリシヤの哲学、および初期のグノーシス説 (Gnosticism) に関してほぼ整理できた。現在メヒテルトが中心になって引き続き整理中である。彼はルーゼリーフの形ですべてを書き綴り、一冊当たり約四〇〇頁余の

『シュタイナー学校』として知られており、今の日本の教育論議と関連してこのシュタイナーの教育理論の応用としての全人教育には極めて興味深いものがある。

### 三

メヒテルトや関連著書によれば、ドイツに起こった秘教的な種々の思想をシュタイナーが集成し展開したという。この一連の体系を人智学とよんでいる。冷静な意識をもって、思考と実践を通して自身の認識力を拡大し、通常感覚では捉えられない世界の認識を目指すものである。したがって、その過程は、神からの啓示とか絶対者への帰依によるものではなく、『思考』と『修業』の具体的活動からなるという。人智学では、人は、身体、魂、精神、靈から成ると考えている。地上では個々の人間の『精神』は永遠であり、繰り返し地上の『身体』の中に再生すると考える。『精神』はその中で次第に成熟度を深め、やがて自らの姿と世界との関わり合いを認識し、真に自由で自覚的な参加者となるという。『シュタイナーの人間観と教育方法 広瀬俊雄著・ミネルヴァ書房』によれば、『魂』は自己認識と感覚を包むものであり、それを手段として『精神』が自らを取り囲む『身体』と世界を経験し認識する。子どもは発育とともに、『精神』と『魂』が『身体』を意志・欲求・感情・思考のための道具として使うことを次第に学び、世界を理解し、参加してゆくようになるという。この学習過程で、親や教師は適切な指導をする必要があり、それによって、子どもの『精神』と『魂』は健全に成長し、真の姿の認識に向けて発達を続けてゆくことができるという教育思想に連なる。幼い頃より、メヒテルトは両親からそう教育を受けてきた。

カルシュ博士

当時、二元論的世界観を斥け、心理主義的な思想が流行していたことと、このシュタイナーに代表さ

れる思想の流れは決して無縁ではないし、フリッツが後に日本で仏教や禅に大きな関心をもったのも納得できることである。

シュタイナーの教育理論は、誕生から人の生涯全体を実践の連鎖ととらえ、同時に、こどもの魂、本性の細部に配慮したものである。したがって、単なる机上の理論ではなく、実際に数多くのすぐれた教育効果を生み出しており、内外にその実績が見られる。アメリカでの人智学の中心的存在であり、高齢にあっても今なお、独英翻訳に勤しむメヒテルトが、筆者と父フリッツ・カルシュとの縁を仏教にも通じる言葉でにこやかに語ってくれたことを思い出す。

ちなみに、人智学に基づくシュタイナー理論による教育実践のための学校は一九一九年（大正八年）に十二年制の学校としてドイツに初めて設立されたが、ヒトラー政権下では禁止された。第二次大戦後にこの学校が再開された。その後、一九八〇年代には世界各地に設立され、発展をとげて現在に至っている。日本でも今日、シュタイナー学校として発展し続けている。この理論に心酔していたカルシュ夫妻はできる限り、自分の二人の娘に人智学を伝えようとした。長女はやがてこの分野の専門家となり、次女は自由ヴァルドルフ学校で学び、同じ学校で実際の教育に当たり、二〇〇二年（平成十四年）に定年を迎えた。シュタイナー理論に基づく学校の先生となることは、この教育の実践による自らの精神的深化の一つと捉えることができるからであろう。



かし、卒業生の結束力は終生強く、また高校への憧れともいえるべき感情を依然として強固に保っている。旧制高校は本来は七年制、実質は三年制の戦前の高等教育機関であった。一八八七年（明治二十年）に高等中学校が、東京、仙台、京都、金沢、熊本の順に五校設置された。その後高等学校に改称、新設、改組を経て、以後大正まで学習院の他に高校の新設はなかった。大正期になると、大正デモクラシーの影響もあり、高校が各地に新設され、松江には一九二二年（大正十年）に設置され、そしてこれら公立校とともに大学予科も設置された。

旧制高校は高等教育機関の一つと位置づけられていたが、実質的には大学進学のための準備のためにあった。その存在理由は、効率優先の観点からいえば、必ずしも明確ではなかった。

というのは、不確定要素を視野に入れながら、十分な教育効果を望める教師の確保や関連行事の有機結合に費用がかかり過ぎることがあったようだ。しかし、生徒達は、未来を見つめるために自分に最も必要な思考の自由と行動の無軌道性を自ら選択しながら、他人の生活との比較と切磋琢磨の中で三年間を日常として過ごすことができた。これが、現在の学校制度にない旧制高校の特色であったろう。専門性から眺めれば、より効率的な高等工業専門学校、高等商業専門学校、軍人養成学校なども存在したし、ことの是非はともかくこうした学校も優秀な人材を多数輩出している。このことは当時から、一般に誰からも認められていた。

ところで、旧制高校の教育というものが感覚的にも魅力をもつて、今なお語られる理由は、多くの人々が認めているように、一つにはやはり今日と違って、価値の押しつけのない自由行動と大卒の試験での大学進学が容認されたことによって、受験からの自由の実質的保証と同年代との青春生活体験とその謳歌であろう。もちろん、その背後には将来を担うエリートとしての保証とその感覚的得心があったこと

がある。そして、それが大らかで余裕のある勉学と他に対する行動と心配りを醸し出すに必要な環境を提供していたこともほぼ確かである。こうした物理的、精神的支柱は、若者に是非とも必要な土壌と栄養であるはずなのに、残念ながら、今の教育のなかには殆ど見られない。

大学へは一割程度の進学率の時代背景のなかであっても、国立の高校は日本の伝統的なプライドを満たすうえで生徒には好都合であった。そして、全国二学区でどこでも受験できたから都会の生徒が結構、地方の高校にも進学した。そのような理由で、松江のような地方都市の高校の存在そのものはもちろんのこと、諸々の生活背景をもつ生徒とそこに赴任した教師には、文化の導入者としての役割を果たす大きな功績があった。カルシュ博士も後者の象徴的存在であった。

これに対応して全国から優秀な中学生を引き抜こうとしたのが海軍兵学校と陸軍士官学校であった。試験日を早くするような方策まで打ってきた。これら諸々の条件は、人生の揺籃期にあって、目標を将来の彼方においていた人生設計とそのため的大局的競争のための有意義な時間と空間を彼らに保証してきた。時世を問わず、狭い専門性を掲げて受験をはじめ教育におけるいわゆる競争に終始し、その結果を後々まで引きずった人々の人生の内容については「貧弱」かつ「脆弱」の印象が強い。とくに思想や人格に関して、また体力や精神力についても同様なことが日常的行動にもよく観察されるものである。

今日、少ない科目で受験可能にしたので、逆に細かい知識を入試では要求されている。その結果、未知の困難な問題解決のために、周囲の必要な知識を大きく動員して考えることが不可能な、自らの小さな内的環境の枠内に留まることになりがちである。

少なくとも一九七九年（昭和五十四年）に共通一次試験が世に現れる以前には、総ての科目をまんべんなく学習し、試験に臨むのが所謂国立大学であった。いま、考えてみて、その頃までの新制高等学校

や新制大学を卒業しても、政治、経済、社会を短絡的ではなくそれなりに大局的に見る事ができる者が概して少なくない感触をもつことができる。そして、後々まで、折に触れてその時代のすぐれた教師の言葉の影響を感じて心の糧にできたのを、何ともありがたいと思うことが少なくない。共通一次試験は受験競争の緩和や難問・奇問を排除することをめざして、国立大学の一期校、二期校制を廃止のうえでの導入だった。しかし、結果は偏差値による輪切り選抜により、大学の厚みのない画一的序列化の弊害を生んだ。

若者の姿がいわゆる大人の世界を反映していることを棚に上げて言うことになるが、今日の大学に限らず、世間の若者を見てみると、すべてにわたってそうと言うわけではないにしても、どうも利害には敏いが、根本的問題に関して、与えられた思考パターンの中で回答はどうか可能であっても、その枠を越える思考がなかなか受容できないことが少なくない。そして、そのときに逃げ込むところが安易な居直りであることが少なくない。これには、残念ながら人格形成の訓練になるものは見当たらず、こうした行動は世によく言う全人教育に役立つことからはほど遠いものである。もちろんそうでない若者も全体から見れば昔と同じような割合で出会わず。カルシュの広めようとしたシュタイナーの理念を思い巡らしながらそう感じた。

軽薄な平等を標榜し英才教育を差別と悪とみなした戦後の安易な学校教育はまさにそれを助長するものであった。そこには、正当で大局的な競争意識がなく、自分の周辺だけの小さな集団の中で他人と横並びにならないければ、安心した社会生活が不可能であるという、極めて浅い根拠の願望の



自習寮での生活の様子 遠藤の提供

追求しかみられなくなった。そしてそれとは対照的に、優越感に浸るために、少しでも差をつけようとする非生産的で低次元の競争意識とそれを原因とする争いを新たに生む弊害を呼び込むことになった。欧米や他のアジア諸国でも英才教育は選ばれた誇り高い存在として、多くの人々がその社会的必要性を認めるところである。そこで見られるものは、結果として将来、社会から付与される特権的要素に伴う義務感を早くから自らの心底に刻みつけた信念として自負していることである。かつての日本では、良きにつけ悪しきにつけ、国家を思惟（おも）い気概の伝統を受け継ぎ、実力に裏付けられ、誇りに包まれ、そして将来の自らの責任ある役割や地位を夢見る若者の姿があった。振り返って今日でも、世に言う権力や地位をもつ者が形式的にはこのような人々に当てはまるが、その精神構造と行動の実態は異なるものと思えてならない。もちろんすべてがそうであるといっているのではない。しかしながら、彼らにあるのはそれから派生する特別な役割に伴う義務ではなく利権であるように、諸々の機会に眼前に映し出されることが少なくないのである。

ところで、若者にはある年齢に到達するまでに、何らかの意味で他とは異なる優れた点をだれかに、特に尊敬する人に認められ、それを通して自分が特別な存在たる願望があることを多くの人が思い出して語ることがある。これは、理想を掲げる若者の誇り高い心の表現であり、一人前の人格として早く扱ってほしいというパフォーマンズが時に加わる。したがって、向上心に富む若者には成果に結びつくような、達成感を誘導し、心理的な充足感を与えることが重要である。その理由は個としての自己の存在が認識されず、没個性を強いられることへの不満は、人生経験の浅い若者では、時に暴発したり邪道にそれること



自習寮（学寮） 遠藤の提供

が見られるからである。このあたりが、どうやら今日の教育論議の中でより深く考察すべき肝心なポイントであろうか。

若者に内在し沸き上がる人間性が旧制高校の備えていたと思われる自由な環境と全人教育のなかで、おそらく發揮し易かったのであろう。このことは、カルシユと生徒の間で繰り広げられたエピソードを見て容易に想像できる当時の教育の特筆すべき根本であり、今にして最も強く求められるべき論点であろうか。となれば、旧制高校の存在そのものは別として、その意義は評価されてしかるべく、特にその建学の精神の実現のための教育方法の見直しと再展開を、今日の教育の荒廢のなかに行うべきであろう。もちろん、単純な制度的復活は今日にあっては不可能であろうが、再評価と再活用に向けての新しい展望を求めるべきであろう。カルシユと生徒とのやりとりを語る老いた生徒の言葉と変わらぬ気概を聞いてそんなことを考えてみた。

### 三

旧制高校の特色に全寮制生活がある。全国各地から生徒が集まってくるので、その寮では多くの人間との出会いがあり、そこでの切磋琢磨から得られる人間形成が多くの人々から評価されていた。

今日の大学の寮というのは単なる下宿であったり、学生の政治的活動の本拠地だったりする。しかし、旧制高校の寮は、それ自体、教育の場であったし、それだけ寮生活に大きな意味があった。それは周囲と自身の価値を納得するための、既存の価値の見直しと再構築の場であったと思われる。戦後二十年頃までは、戦前の古い体質を残した学寮が存在した。そうした寮の中で筆者も生活したことがある。入寮の日に即日退寮しようと思ったほどの不潔さと見かけ上の怠惰、理不尽な先輩との付き合い。どれをと

ってもとても肯定できるものではなかった。しかし、やがて、その大きな意味とその生活の価値がわかる。一晩かけて共に大声で議論し、ある日はストームで大暴れをし、またある日は酒を呑み心底をさらけ出す。それらはそれまでの親元では決して存在しなかったような滅茶苦茶な生活であり、また過去の価値観を根底からひっくり返す毎日であった。親から与えられた価値観、社会から与えられた価値観に対する根底からの疑問とその解決である。かのアインシュタインは十七歳までの知識・経験は総てひとから与えられた偏見であるといっている。これを根底から自らの手で検証するところにその人の獨創性を培う下地があるようなことを若き日に読んだことがある。これが、旧制高校の学寮にあったのだ。少なくとも筆者が経験した大学の寮にもあったと思われる。同レベルの仲間と四六時中顔をつきあわせて人間的にも総合的に相当揉まれる筈だし、このあたりに寮で生活してみなければ、わからない価値が潜んでいたようだ。

寮生活で出会った人間関係は熱いもので、終生のつながりをもつ。したがって他の同級生以上に繋がりがあるのは勿論で、寮で培われた密な人間関係は一生にわたって続くものであるといえる。自分の経験から、そう断言したい。

自らそれまで信じて疑わなかった価値の破壊や見直しは、今日にあっては情報が入手しやすくなっているのが容易であるように見える半面、実は強烈な人との切磋琢磨に欠けているので十分にそれを得心できない。また、人との強烈な出会いの機会も減っている。人生の揺籃期、胎動の時期に出会ったものや人々というのは一生にわたる財産なのであるが、この意味でもとくに旧制高校の寮というものはもっと評価されて良いはずだ。

次に、話はやや堅くなるが、松江高等学校がどのような経過と意図で設立されたのかが設立の趣意書の形で残っているので、一部原文で載せておきたい。

教育機関の所在地は、利便の点よりも寧ろ周囲の感化の点を多く考慮するを要す。松江高等学校の所在地は利便の點に於ても、山陰地方第一の都市にて、同地方の中央部に位し水陸交通の要衝に當れる等、洵に其の宜しきを得たるものなり。而して感化の點に於ては、特に注意すべき長所を有せり。申略）松江市に高等教育機関を設置するの希望は頗る古し。明治三十三年第十四議會に於て、當時の方針に基き高等實業教育を以て地方開發を促すの主旨より、島根縣選出代議士が、山陰道に高等農林學校設置の建議案を衆議院に提出し、全院一致可決を得たるに始れり。然れども其の設置は容易に實現せず、遂に大正六年に至り漸く實現の運びとなりしも、而かも隣縣鳥取市に設置せらるる事に決定するや、更に大正七年政府に高等教育機關擴張の議あるに際し、島根縣會の決議を以て、島根縣に高等學校設置に關する意見書を内務大臣に提出し、遂に大正八年三月貴衆兩院を通過せり。申略）次いで大正九年十一月松江高等學校官制を制定せられ、翌十年五月起工せらるるに至りたり」

というように、設立まで紆余曲折があったものの、地元の熱意と努力で勝ち得た、松江の誇るべき、学問のシンボルの高等教育機関であった。

カルシュ博士

この頃の生徒である六期理乙の澤田弘夫が「高校受験から憧れの白線帽を冠る迄」について貴重な手

記を残している。

明治も終わりに近い頃に、北陸の城下町金沢で生を享け、そこで育った澤田が不思議な縁で、気候風土も似かよった山陰の城下町松江で、多感な青春時代を過ごした。一九二五年（大正十四年）中学卒業時に受験に失敗し、悶々の日々を送っていたところ、翌年の高校入試では、全国の官立二十五高校を二班に分けて、二回受験の機会が与えることの文部省の決定は全国の入学志願者を喜ばせた。

第一班は一高、五高、七高、新潟、水戸、山形、松江、大阪、東京、浦和、静岡、姫路、広島の一三校、第二班は二高、三高、四高、六高、八高、松本、山口、松山、佐賀、弘前、福岡、高知の十二校とし、受験生は各班から一つ、志望順位を決めて、入学願書を提出する仕組みになった。

澤田は第一志望を四高とし、松江高を第二志望として受験し、後者の理乙に合格した。三月十日から四日間 第一日は国語、漢文及作文、第二日は世界地理、日本史、物理及び博物通論、第三日は数学、第四日は英語）は一班の共通入試で一日休み、更に四日間同一の科目の組み合わせで二班の共通試験を受けた。この制度は、各高校の事務掛が東京に集まって、合格、補欠入学者の決定に、多くの手間を要し、二回だけで廃止されたが、全国官立高校の合格点数のバラツキは正と浪人救済に役立った。

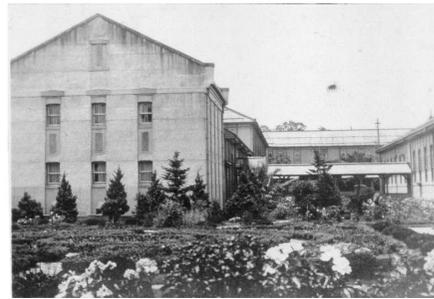
澤田が志望校に松江を選んだ理由は中学の国語教諭が島根県出身で、松江中でラフカディオ・ハーンに英語を教わったとのこと、また出雲は名所、旧蹟に富み、宍道湖に望む水の都松江は、風光明媚な落着いた城下町であると賞讃していたことが、耳に強く残っていたからであった。

入学許可書を携えた彼は金沢から約十七時間の長旅の末、目的地の松江に到着した。駅で人力車に乗り、松江大橋を渡り、市街地を通り抜けて田園地帯の真中にある高校前に出ると、車から降ろされた。この年の理乙合格者の三十九名中、島根県内からは松江中学二人、浜田中学三人、大田中学一人の計六





旧制松江高校 正門 宮田の提供



旧制松江高校 中庭 宮田の提供



旧制松江高校 校舎 宮田の提供

の夕映え』中に「ククター・シムアルベ」とあるのは、当時周囲の人がそう呼んでいたことを暗に示すものである。

島根大学図書館所蔵の『松江高等学校二覧』のなかにカルシュ博士の名が見える。前出の毛筆の彼の経歴書とこれらの書をみて、筆者が調査を本格的に行うようになった経緯がある。

このころ、東京新聞の文化部が誰も全く関心をもたなかったカルシュの足跡の偉大さを認めて大きく報道してくれた。改めて同紙の先見の明に敬意と共に感謝の意を表する次第である。なお、調査の過程で分かったのであるが、当時の和歌山高等商業学校では後に、独和辞典・和独辞典や数々のテキストを残した、ロベルト・シンチンゲル夫妻がドイツ語教師としての教鞭を臨時に執っていた。

ちなみに、このシンチンゲルの娘が東京医科歯科大学で現在ドイツ語の教師を務めているエミ・シ

ンチンゲルであり、四十五年以上前からの筆者の友人でもある。

とにかく、カルシュには長屋からの情報以外に、彼からの情報も入っていたに違いない。

フリッツ生誕百二十年を経て、その意味から是非、彼の松江での足跡と生徒との交流を世の人に知らせたいと念じていた。しかし、このカルシュ顕彰に心血を注いでくれた、岡崎、遠藤、宮田、白石、田島は相次いで他界した。謹んで冥福をお祈りしたい。小生が国立大学の制度改変の渦中において現職教授の公務と併せて、これ程多忙でなければ、面談調査に奔走もできただろうにと思いつながら、カルシュと旧生徒との数々の交流を記録にとどめ得なかったことを悔やんでいる。今日の教育論議とも密接に関連する当時の旧制高校の現場を彷彿させる生徒の言動を十分に残せなかったのが返す返す残念である。ところで、東京新聞のカルシュ紹介に続いて、調査が進展して生徒とのエピソードが手許に集まった頃、日経新聞が「遠来の師、今なお追慕」として、顕彰の進展を激励して採り上げてくれた。そのお陰で全国からカルシュについて問い合わせがあり、「湖畔の夕映え」出版や旧制松江高校同窓会の支援に連なってきた。その後、産経新聞や読売新聞、山陰中央新報の報道の中で、カルシュに関心のある人々が増えてきた。このような経緯から、今こうして諸々の人々と紙面を通して、おつきあいをいただいている。これらの機会を創ってくれた、右記の新聞各社に改めて深く御礼を申し上げたい。

## 親類と縁者

一

一八九三年（明治二十六年）二月十九日ドレスデン近郊のブラゼヴィッツで父ヘルマン、母ルイーゼの間に三人兄弟の末子として生まれたフリッツ・カルシュは、一九七一年（昭和四十六年）十一月十八日にカッセルで没した。祖父ヴィルヘルムが牧畜業を営み、エッシュドルフで父のヘルマンが生まれたことと、母方の姓がクニスであることしか解っていない。詳しくは彼が残した青春の記録を解読すればわかるかも知れない。どういった経緯か不明であるが、フリッツの父ヘルマンはドレスデン郊外のブラゼヴィッツの広場に面する店で大規模な食肉業の経営に携わった。巨大な鉄橋の建設に従事する労働者に食事を用意したり、サンドウイッチを売って、大きな利益をあげ、富を築いた。同様にして裕福になった隣人たちと共同で建てた石造りの大きな建物は現存し、中央先端部には父のイニシャルH・Kが見られる。ヘルマン所有の主要部分は、一九〇一年（明治三十四年）に彼が肺炎で亡くなった後、間もなく人手にわたった。

カルシュ博士

フリッツは三、四歳の頃に、エルベ河でおぼれかけた。そのと



ルイーゼ・クニス・カルシュ（母） ヘルマン・カルシュ（父）

き名も知れない労働者に救われたとのことである。また、九歳の時盲腸から腹膜炎を起こし生命の危機に陥ったこともあった。彼の長姉エリザベートは乳児の時死亡し、次姉フリーデルはオーストリアで結婚し、三人の子供に恵まれた。そのうちの一人がルイーゼであり、彼女には、ハンスヨルク、ヘルムート、ヴェルナーの三人の息子がいることがわかっていて、フリーデルその他の子孫の消息については、筆者はいまだその調査をしていない。

一九三九年とその翌年にメヒテルトは祖母ルイーゼにドレスデンのアパートで会っている。ドレスデンはザクセン王国の首都でエルベ河畔の優雅なバロック調の芸術都市である。筆者が二〇〇二年に訪れた時には、かつて、夢のように美しかったドレスデンは残念ながら第二次世界大戦で受けた戦禍から完全に復興していなかったし、煤で汚れた建物は痛々しい様相であった。地元の人々の話では財政の事情もあって、いまだこの街は完全に復興できていないとのことであった。

このザクセンとバイエルンは、かつてはドイツで最も裕福な王国であった。メヒテルトは、これまでの生涯の殆どを日本と米国で過ごしたので、彼女にはこの芸術の街に格別深い思いがないようである。しかし、父フリッツにとっては、両親と何度も訪れたことのあるツヴィンガー宮殿やゼンパー劇場での歌劇や演奏は生涯忘れることのなかった思い出であったとのことである。



1943年 フリッツとエンメラ



フリーデル・カルシュ、  
ハンス フシエルベルガー夫妻

ドイツ人は、一般に「ハイムマート 故郷」をこよなく大事にするが、フリッツにとつては、まさに生まれ故郷であり、両親との思い出が詰まっているこの街を限りなく愛していたとのことである。

二



ツヴィンガー宮殿よりエルベ河を望む

フリッツの妻、エンメラは、ゴージェスベルクで父ゴットフリート・アクセンフェルト、母ベルタ・ホイザーの間に五人兄弟姉妹の長子として生まれた。この出生の様子が地方紙に報道されている。その横に「Japan」という文字が書かれた記事が載っているのは、エンメラの日本との縁を暗示しているとフリーデルンが、筆者に真顔で語ってくれた。

エンメラはベツツドルフでの生活を経て、ボン大学で語学・古典文学・神学を学び、さらにマールブルク大学でそれらを学んだ。ここでフリッツと出会った。彼女は、とくにラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語を好んで学んだが、健康上の問題があつて大学を卒業することはなかった。

エンメラの伯父に、フライブルク大学教授のテオドール・アクセンフェルト博士がいる。モラー・アクセンフェルト菌 モラクセラ・ラクナータ(Moraxella lacunata)を発見した人で眼科学の世界的権威であった。一九三〇年 昭和五年) に日本眼科学会の招待で来日し、各地で講演した。岡山での記念写真が残つて

メヒテルトによれば前妻の間に第一次大戦で戦死したハンスがいた。



1930年 原田教授 テオドール・アクセンフェルト エンメラ ヘルムート

いる。このとき、カルシュ博士に教わった六期理乙生の増田義哉が九州帝大医学部の学生として、直接にアクセンフェルト教授の講演を聴いている。これが増田が眼科学を志す誘因になった。増田が博多で筆者に語ってくれた。このとき、エンメラの従兄であるアクセンフェルトの長男ヘルムートも父教授と同行している。来日時に松江高校の原田ドイツ語教授が何かと世話をしたとのことである。

次頁の写真は上段は伯父テオドール夫妻、下段はエンメラの両親ゴットフリート夫妻である。

内最古のゴシック

建築の聖エリザベート教会がある。筆者自身は確認してはいないが、石棺(Coffin)の装飾と刻文によれば、聖エリザベートはチ ユーリングゲン出身で七〇〇年前のエンメラの先祖筋にあたるという。そして、この教会はそのエリザベートを記念して創設された教会である。

メヒテルトは母エンメラの従妹のエディット・ピヒト



エンメラ誕生を知らせる 地方新聞 1896年

アクセンフェルトをタンテ おばさん」と呼んでいた。彼女は一九三七年（昭和十二年）シヨパンコン



上段はベルタS、テオドール アクセンフェルト夫妻、  
下段はゴットフリート、ベルタH.アクセンフェルト夫妻

クールでピアニストとして入賞した経歴をもつ。しかし、ナチス政権が確立された当時は、ユダヤ人の彼女は自由に演奏活動ができなかった。彼女は戦後には、フライブルク国立音楽大学の教授となった人で、世界的なピアニストであり同時にチェンバリストであった。このエディットは、多数の日本人ピアニストを弟子にもち、度々来日して各地で演奏をしたことがある。とくに草津は殆ど毎年演奏のために訪れていた。彼女は二〇〇一年（平成十三年）四月に逝去した。偉大な演奏家として、世界中から哀悼の意がささげられた。このことは、米国の『タイム』や『ニューズウィーク』に類したドイツの代表的雑誌の『シュピーゲル』誌にも掲載された。

カルシュ博士

時の服装がよくわかる。グリム童話の絵本によく見られる赤ずきんちゃん』に出てくる おばあさん

や 魔法使い』の衣装に通じる装いである。

メヒテルトが三歳の一九三一年（昭和六年）に一時帰国した際に、エンメラの直ぐ下の妹である叔母ルイーゼが、昼の休息をとっている父カルシュ博士をデッサンした。その作品が彼女の手に残っているし、その当時のことをよく記憶しているという。



ユーラ・アクセンフェルト  
エツメラの妹



義妹ルイーゼによる  
フリッツのデッサン 1931年

次ページの図は、  
カルシュとアクセン  
フェルト両家の家系  
図である。

メヒテルトの夫の  
ヘルベルト・セイ  
ント・ゴアはハンブルク  
出身のユダヤ系ドイ  
ツ人である。一九三八  
年（昭和十三年）ナチ  
ス政権に追われて米  
国に亡命した。戦時中  
は米兵としてバルジ

戦に従軍した。後に、生活用品スーパーマーケット Dixie Saving Store) を経営する実業家として活躍した。ホルトンと離婚後のメヒテルトと一九五四年（昭和二十九年）に結婚し、エドワードとエリ



セント・ゴアが手にしているのがヒトラーの側近が撮影した16ミリフィルム。上記は米兵時代の写真シュピーゲル誌より

本頁下の写真はセント・ゴアが自宅で自分が出演しているテレビの録画を見ている様子である。筆者はチャタヌーガの彼の自宅に

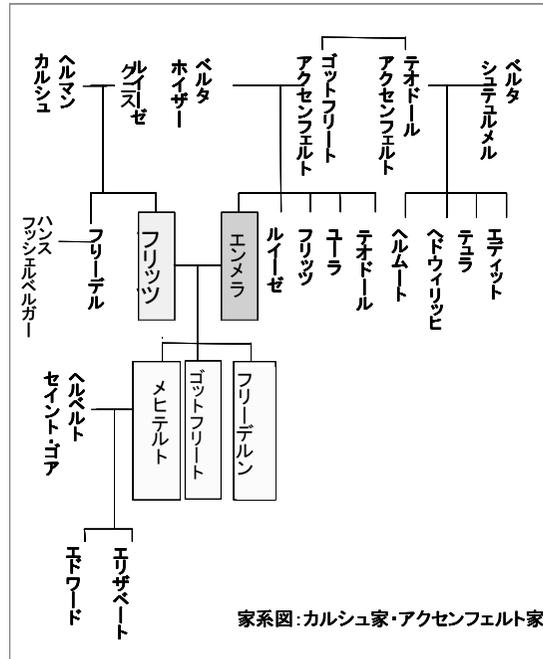


自分が出演しているテレビ録画を見ている様子  
チャタヌーガの自宅にて 2002年4月

在していたという歴史的事実は長年の謎を解明する極めて貴重な記録であった。そして一九九八年十月二十六日発行の『ユピール』誌には数ページにわたって、記録の内容とそれを手にした経緯が大きく掲載された。これより以前に、歴史的カラー記録映画が『ユピール』によってつくられた。また、諸々の関連記録と証言を併せて編集して構成したドキュメンタリーが後にテレビ放送された。筆者は当時のことをぼんやりと記憶しているが、これがカルシュ博士に連なる縁であることは、もちろん夢想だにできなかった。

彼は緊急入院し生死の間をさまよったが、後のバイパス手術により健康を取り戻した。このとき多くの主な言語で、テレビ放送をはじめとしてマスコミによるセンセーショナルな関連報道が全世界で行われた。

六年 昭和十一年)のニュルンベルクの様子から始まって、ローマでのムッソリーニとの会見、ドイツ傷病兵の慰問の様子、とくに一九四〇年 昭和十五年)六月二十八日の占領直後のパリにヒトラーが滞



家系図:カルシュ家・アクセンフェルト家

家系略図:カルシュ家とアクセンフェルト家

ザベートの二人の子供に恵まれた。エドワードには二人の子ども、エリザベートには三人の子どもがい

戦後のドイツでのヘルベルトの任務は諜報活動で部隊の責任者であった。この折、ヒトラーの専用機の私的操縦士であった側近のハンス・パウアーを、彼がミュンヘンで尋問した。パウアーは同時にアマチュアカメラマンであった。それゆえに貴重な歴史的映像を十六ミリカラーフィルムに残すことができた。ミュンヘンの自宅の花壇の下に秘匿して置いたこれら十六巻をヘルベルトが押収し、そのうち四巻を手許に残し、他はすべて上部組織に提出したとのことである。一九九八年 平成十年)になって、歴史の証言として、このフィルムの公開を決意した。偶然も手伝って、これをドイツ・シュピーゲル社に売却することになった。ヒトラーの行動を裏付ける極めて貴重な歴史記録である。一九三

あつて、彼自身の詳しい説明を傍らで受けながら、繰り返し眺めたものである。

ヘルベルトは『ユビゲル』誌の関連記事と自伝『Taking Stock of my Life』を出版したことにより、アメリカはもとより、ドイツでも知られるようになった。彼の自伝からも解るように、妻のメヒテルトを「昇する株」とみなして、妻をこよなく愛する姿が著書に描かれている。この縁から、二〇〇二年（平成十四年）九月には、ライン河流域の小都市セイント・ゴア市長から花火祭りに時を合わせて公式に招待を受けた。そのことが二人の写真入りで新聞に大きく報道された。ヘルベルトの祖先の出身地はこの古都セイント・ゴア市で、ライン河近郊での有力な商人の家系を為していた。この都市と同じ姓のラツアルス・ヴォルフ・セイント・ゴアが二〇〇年ほど前にこの地の市長を務めていたという。これが次頁右上の写真に示す記録から判明した。

ところで、ヘルベルトはシュビゲル社に前述の歴史的フィルムを記録として確かに売却したが、自分たちユダヤ系住民を苦しめたナチスに関する資料をもとに、個人的な利益を上げるようなことや宣伝を固く辞退したという。彼の穏和で誠実な人柄がこれからも伝わってくる。



| St. Goar in den Jahren |                       |                   |
|------------------------|-----------------------|-------------------|
| 1800                   | Lazarus Wolf          | Maire             |
| 1805                   | Jac. Leopold de Noy   | Maire             |
| 1814                   | Joh. Niclaus von Coll | Oberbürgermeister |
| 1819                   | Herr Dietr. Osmart    | Bürgermeister     |
| 1823                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1825                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1826                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1827                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1828                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1829                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1830                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1831                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1832                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1833                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1834                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1835                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1836                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1837                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1838                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1839                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1840                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1841                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1842                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1843                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1844                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1845                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1846                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1847                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1848                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1849                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1850                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1851                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1852                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1853                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1854                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1855                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1856                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1857                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1858                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1859                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1860                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1861                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1862                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1863                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1864                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1865                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1866                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1867                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1868                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1869                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1870                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1871                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1872                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1873                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1874                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1875                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1876                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1877                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1878                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1879                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1880                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1881                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1882                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1883                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1884                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1885                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1886                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1887                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1888                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1889                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1890                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1891                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1892                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1893                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1894                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1895                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1896                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1897                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1898                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1899                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |
| 1900                   | Herr Dietr. Osmart    | "                 |

ラツアルス・セイント・ゴアの名が町の歴史に記されている。

### Riverview Resident Herbert St. Goar Honored in St. Goar, German

by Sonia Young

When Mayor Walter Mallman of St. Goar, Germany, received a copy of Chattanooga Herbert St. Goar's recent autobiography, *Taking Stock Of My Life*, he immediately began to make exciting plans, inviting St. Goar and his wife, Maria, to visit the town where St. Goar's ancestors lived a few hundred years ago. The longtime Riverview couple accepted the invitation, planning their trip to coincide with the town's traditional annual fireworks presentation, "The Rhine in Flames." When Herbert and Maria arrived in Germany, they were surprised to learn that Herbert was being honored at a banquet, because his ancestors had been prominent merchants in this Rhine River city almost two centuries ago, and Herbert is a direct descendant of Lazarus Wolf-St. Goar, who was mayor of the town of St. Goar, from April 9, 1800, until April 9, 1805. At a festive dinner, the mayor presented his Chattanooga guest with a "Plate of Honor of St. Goar" and a detailed history of the St. Goar family they had researched and put together in his honor.



Herbert & Maria St. Goar at Castle Rheinfels

While in the city, the St. Goars enjoyed the fireworks display, which they viewed from a large boat, along with officials of St. Goar and other nearby towns. During his visit, St. Goar visited the town whose name his ancestors had adopted in the 17th century, when they moved from St. Goar to Frankfurt/Main. The town's hospitality was very heartwarming, according to the St. Goars.

Although his ancestors St. Goar, Herbert was born in St. Goar, Germany, and lived there until he returned to the United States in 1948. He returned to Germany during World War II with the United States Army, in which he served as a member of the Chief of Intelligence for the 1st Army, and later as a member of the Government for Bavaria. St. Goar served as President of the Dixie Saving Stores, Inc. for many years, until his retirement in 1980. He resides in Chattanooga with his wife, Maria. Son, Edward, in-law, Rebecca, and grand daughter, Julia and Carl, also live in St. Goar, Germany. Herbert's book *Taking Stock Of My Life* was published in 2000.

ヘルベルトとメヒテルトによるセイント・ゴア市訪問に関する報道 2002年9月

ドイツ連邦アーカイブに寄贈された。このフィルムは貴重な歴史資料として、現在はここに厳重に保管されている。

話によれば、彼の父はナチスに殺され、母も米国に逃亡後、終戦から間もなく亡くなったという。そのとき、携帯した一幅の絵が現在、米国のチャタヌーガの自宅の一室の壁に掛けてある。これが、彼の穏やかな口調と共に筆者にはとても印象的であった。因みに、四巻のフィルムは、シュビゲル社からベルリンの

## 子どもたち

奥谷町で生まれたメヒテルトは五、六歳の頃、毎日午後三時になるとカラスに会いに、近くの神社や寺院に出掛けたものだった。とくに、エレーナと史と手をつないで、うたを歌いながら行くことが多かった。

奥谷の官舎から北に少し歩くと豊かな森や竹やぶがある。今も千手院や春日神社を囲んで、明るい木立が目に入る静かなところである。史は春日神社の近くに住んでいた。

メヒテルトは今も鮮明に、少女時代の体験を感慨深く思い出す。彼女は学校が済んだ近所の子供らとも連れだって、あたりを一回りしてくる。

毎日のように神社に現れるお客さんのカラスに会いに行く。みんな、カラスが三時ごろに現れることを知っている。カラスもこれらのかわいい友達と会うのを楽しみにしている。カラスが飛んで来ては、虫をついばむのだ。落ち着いた生活の中で、この娘たちは、ハーンが発見した神々の国の残像を感じながら、静けさを満喫していた。子供たちは周辺の雰囲気と自然を的確にとらえていた。次頁に掲載する写真は奥谷町にある春日神社の当時の姿である。ここで少女のメヒテルトは午後のひとときを友達と過ごした。

カルシュ博士  
お日様が沈むと、またおてつないで 夕焼けこやけの唱歌をみんなで口ずさみながら、カラスと一緒に家路を急いだ。不穏な世の中の様相をよそ目に、アメリカとドイツと日本が子どもたちの小さな



春日神社 1935年頃

手によってしっかりと結ばれていた。子どもが帰った後はもう家々の明かりが灯り、どの家も夕食の時を迎えるころである。

湖畔の夕映えの 神社のカラスの一節には子供の純真な心の交流が描かれている。そして、こうしたエピソードは 官舎の夕べ、奥谷の洋館、家族にも詳細に描かれている。

魚屋の娘の石川チヨ子が あそばや」といって、よく誘いに来た。彼女も遊び仲間であったが、一九三八年 昭和十三年に亡くなったと聞いている。官舎のすぐ裏の家に四歳年上の神田 高橋 トシ子、三歳年上の高島キミ子がいた。それに同年の中林佳子や二歳年下の史とも一緒に、かくれんぼ、影踏み、ままごと、お人形あそび、かけっこをして遊んだ。

眼を閉じて当時のことを思い出しながら、斜向いの渡部愛之助の家のこと話してくれた。その娘にあたるのが前述の紀代子であることはすでに述べた。

写真は、後ろ左から教練講師の永田家三の娘フミ子、英語教授の高橋寛丈の娘トシ子、メヒテルトである。前列左からドイツ語教授の高島喜市の娘キミ子、東 小豆沢 史である。キミ子は父から習ったドイツ語を話したという。

日本人形を抱えて遊びに行く。メヒテルトの家には、青い目の珍しい人形がたくさんあって、並べてお人形さんごっこ。楽しかった。日本語の勉強のきらいな彼女も、このときばかりは日本語が達者で

あった。



後列左から永田フミ子、高橋トシ子、メヒテルト。前列左から高島キミ子、小豆沢史（1937年頃）

でも小学校までのつき合いで、メヒテルト十一歳ごろまでであった。

後で知ったことだが東史も成人してから松江を離れた。

「ままごとしましょう」

「お団子を作りましょう」

「わたしもするわ」

「はいません。服がよくれます」

「お母さんは、何を言っているの？」

「おかあさんが、いけないって」

彼女もしたくてウズウズしているが、洋服が汚れる」と

いって、させてもらえなかった。

「じゃ、あたしがするわ」

最も大切な泥こねは、もっぱら史の役目であった。

「お父さんはいつもニコニコした方でしたが、お母さんが厳しくしつけていたんですね」

後に再会したときに、メヒテルトが史から聞いた。

「幼心にも感じたドイツ人気質だったわ」

史が当時の印象を思い出して言いかけた。

「どういうこと？」

今度はメヒテルトが理解ができずに史に尋ねた。

「そんな昔話をメヒテルトが語ってくれた」

二人は、今もクリスマスカードのやり取りを続けている。

これは隣人の桑田武一郎が、その昔エンメラの言動を見て感じたのと同じようなことであった。

仲良しの少女たちが掴まえようとして追いかけたメダカやホタルは、いまでは、ほとんど見られない。けれども、朽ちかけていた官舎の姿が、このあたり一帯の変わらぬ閑静な雰囲気をとどめていた。

ところで、一九三七年（昭和十二年）の復活祭の期間の三月二十八日に火災に遭遇したウッドマンは、

一九三二年（昭和七年）四月から一九四二年（昭和十七年）三月まで日本に滞在し、同じ旧制松江高校で英語教育を行ったが、戦争のために米国に強制送還された。彼の妻ヒデは日本人で、モニカとエレナの二人の娘がいた。

大柄でいつも元気なモニカとみんながエナちゃんと呼んでいたかわいいエレナである。

奥谷の入り口の桑原商店には、四角の大きな食パンが置いてあった。子供達は食パンは異人さんの食べ物だと思っていた。一般の人々にとっては、パンはあんパン、張り込んでやっどジャムパン、クリームパンであった頃の話だ。

京店のまつ屋に行くとしュークリームが売られていた。子供達は一度食べてみたいなど、ため息をついていた。とにかく、すごいごちそうに見えた。

桑原商店には高級なアイスクリームもあった。

だから おれ、昨日アイスクリームを食べたで」という具合に、子供は自慢げに言ったものだ。たいていの子供は自転車に旗を立ててくるアイスクリンしか知らなかった。そんな時代であった。

## 二

フリッツは子供のために、人形を買ってくれたし、講談社の絵本もすべて揃えてくれた。寝る前には一人で本を読んだ。

講談社の絵本は今でも手許においてある。日本的な倫理感を併せもつ彼女の感性の原点でもある。みんなが学校に行っている間は、一人でさびしかったが、本を読んで過ごした。その時に培った日本的な感覚は今に続いているという。



教訓名画集（上）と  
お気に入り人形（下）

これらの本をメヒテルトとフリーデルンが分けて、現在は所有している。失った分は戦後になって、アメリカの書店を経て、注文のうえ取り寄せた。子供にとっては宝物であった。絵本の裏には、自分の名前を日本語で自ら書いてある。本来発音から言えばメヒテルトと書くのであるが、自身はメヒテルトと書いていた。今もそのように書くので、筆者はこれを尊重して、人に紹介するときには、日本語では常にエンメラとあえて綴った。

彼女は父の影響もあって、日本の神話をよく読んだという。それも、日本の童話とともに美しい思い出として心に刻まれているという。

したがって、これは『湖畔の夕映え』の【神話の里】の章で、一九六八年（昭和四十三年）にカルシ

ユの来日時に、メヒテルトが酒井らとの神々に関する物語が可能であったことの裏付けとなっている。こうしたことは、父フリッツの話と絵本から、ほとんどすべて学んでいたことであったという。父と一緒に来日したときに、メヒテルトは風が少し冷たい奉納山ほうのうざんの展望台に立って、はてしない海と、弓なりの長浜を見ているうちに、昔父から聞いた国曳くにひきの話の思い出



当時の日本人の子供への鼓舞  
(上)と教訓のための絵本(下)



家族愛用の人形(1935年頃)



ウッドソン夫妻とモニカと  
エレナ(1933年) 田島の提供

していたという。

神様が、国を引寄せた綱に当たる長く連なる菌の長浜とその端をつないだ場所がこの地であること、それにこの浜が全国の神々が神無月に上陸するところであること、というような神代の話はすでによく知っていた。

今私たちが立っているこの杵築きづきが崎を引き寄せたというのでしょうか。知っているわ」

メヒテルトが言葉をついだことがこれを暗に示している。

『国来、国来』と酒井の口から一節が流れると古代人が創った国曳くにひきの物語に投影された歴史背景や国ゆずりの談判の時の石投げくらべの光景が自分の眼前に彷彿するようであった。その時投じた石が島つぶて岩になったという伝説も一緒に思い出すことができた。こうした話は、近所の小さな友達がみんな知っていたと筆者に語ってくれた。

展望台では、夕日に映え、海面に浮かぶ優美な小さな島と周りに点在する島々の姿の美しさを心ゆくまで味わった。そのときのこと脳裏によみがえった。フリッツとともに眺めた遠い昔の光景にかつて抱いた少女時代の感動をメヒテルトは思い起こしたのであった。

少女メヒテルトは、天気の良い日には家の中で、近所の子どもたちやその年上のお姉さんたちと人形遊びをした。彼女たちが学校に行っている間は、学校に行かなかったメヒテルトは家庭教師の石飛フデ子から日本語を学んだ。母からも折に触れて教育を受けたが、一人でもよく人形遊びをしたし、時には人形に自分の思いを話しかけたという。

今も、当時と同じような配置で人形を飾っているということである。たまたま、アメリカ・チャタヌーガの自宅のソファベッドに置いてあった古びた人形の姿がとても印象的であった。

## ドイツ語の授業

一

カルシュの着任前後のドイツ語教育について、当時の生徒が語っている。教える先生の人柄によってその印象はずいぶん違うようだ。興味深い証言である。ドイツ語の前任講師のプラーゲに関する思い出では一様に、厳しい先生という言葉が返ってくる。プラーゲは西洋人としては小柄なひとで、最初の授業時間に

「ドイツ語は正確に耳で聞き、そのまま発音しろ」というように強調したらしい。彼は、熱心だったが教え方が厳格で、質問に答えた生徒の様子をいちいち、闇魔帳に記入していたようだ。そんな風だったので生徒の反発を受けて学級全体がサボタージュし、樂山に逃げたりしたことがあった。ドイツ語主任の小林教授が心配そうに教室へ来たことを覚えている。四期文乙生の米田勇次郎はそのような記録を残している。

私はプラーゲであるが、本名はプラーギウス（苦惱）というのです。よく当たっているでしょう」

と自分のことを皮肉って言っていたという。後年『プラーゲ旋風』と称して音楽の版權について騒いでいたが、これあるかなと思った。著作権という概念が日本になかった時代に勝手に西洋の文献、音楽などを使用したことを訴えたが、日本政府はこれに十分に組み込まなかった。日本の著作権の父ともいわれるプラーゲの意外な話であった。

「プラーゲ先生といえ、まさに拳骨教育である」と言っていたのは四期文乙生の柴田午郎<sup>ごろう</sup>である。大正の末頃、どうした嵐の吹き回しか、柴田は文科乙類に入学許可になった。主としてドイツ語を教え

カルシュ博士

るクラスで、英語は従であった。ドイツ語という思いもしない外国語を主とする教室に入れられた彼は、中学一年の時に初めて英語を習った時のことを思い出して、やや憂鬱であった。当時のドイツ人講師はプラーゲで、教えられる生徒は毎日戦々兢兢であった。ところが、それから、一年半あまり経ってその先生が帰国し、その代わりに笑顔をたたえる大男のカルシュが現れた。以前と違って教え方もやさしく、ほっとした記憶があるという。今日思い出してみると、この二人の先生は性格も教え方も全く正反対なのである。一方は拳骨をふりあげる程のこわい先生。他方はいつもにこやかで、甘えたい程の大男の先生。しかし柴田が今でも思わず口をついて舌に乗せるドイツ語は、あのプラーゲに教えられた詩である。

ある時先生が暗唱して来いといった『ネンメン湖』という詩の一遍を、柴田は覚えて来なかった。

「フバタハ コノゴロ、ベンキヨウ シナイデス」ときんさん叱られた。

戦後五十年以上経った頃、同級生に次のように漏らしたことがあるという。

「この頃は青少年の教育問題がやかましく論じられる。当時に比べると、その教え方もずい分変わったらしいが、少しきつく生徒を叱ると新聞で非難されることもある。しかし七十年前に、拳骨をはらばかりにしてプラーゲから教えられたドイツ語が、今でもすらすらと口から出るのに、やさしく丁寧にカルシュから教わったことは殆ど忘れている」

柴田は自分の経験と照らし合わせて、『拳骨先生』の効果を価値あるものと信じて疑わないようだ。

五期理乙生の鈴木繁徳によれば、当時外人講師から直接外国語を習うのは、生まれて初めてのことだ。嬉しいことでもあった。ところがプラーゲ、案外ときびしくコッピドイのだ。そこでワルどもがい

たずらを思いついた。チョークを一本残らず隠してしまった。しばらくして、先生が教室に来て、ちよ

つとさがしていたが、それと気づいて、開きなおった。

「……日本の将来を背負って立たねばならない君たち……」

に始まってジュンジュン。

将来が案じられて仕方がない……」

一人立ち二人と立って、スゴスゴと。純情な小学生にそっくり。チョークは戻り授業が再開。当時、先生によっては、毎時間、真新しい長いチョークで大きな字を書かれ、折れるとまた新しい分を出す、といった具合であった。それにひきかえプラーゲ、小さなチョークのヒトコゲを箱の底からさがし出して、三本指の先に摘んで、やっと書ける位の小さな字で書く人であった。

## 二

このような見方もあったが、先述の酒井勝郎はプラーゲの授業や小言の様子を以下のようにリアルに描写している。

松江高等学校理科乙類へ入学すると一週に一回一時間のドイツ語会話の時間があった、その先生がプラーゲだった。この先生は始業のベルが鳴ると、ぽつと教室へとびこんで来る。五分位遅れて来る先生が殆どなので、ベルの音を外で聞いて悠々とはいつて来ると、はつと一睨みして、閻魔帳に遅刻のマークをする。

カルシュ博士

さて授業だがこれがまた大変だ。ドイツ語なるものに初対面で、まだアー・ベー・ツェー程度を修業中のこのクラスへとび込んだ最初の時間に、いきなり黒板に変な文字で文章を大きく書いたのである、それは今まで見たこともない文字であった。後で聞くとドイツ語の古書体だったそうだが、これを一字ずつ指して読めと言った。

無理だ。読めるわけがない」と思っている間もなく、どんどん全員に当てていく。この先生は当てるのに決まった順を踏んでいった。教室で着席最前列の右から左へ順に、一人も外れることなく規則正しく当てて、次第に後列に及ぶのである。だが新入生では誰もこんなのは読めない。当てられて、口をもごもごしている。

ナ、ナ、ネヒスト」と言うのだ。ネヒストはどうやら英語のネクストのことらしいので、次の席の者が眼を白黒させていると、指名は次へ移る。そして、みるみる全員に行きわたる。

どうなることか？」と思ったのだが、やがて

なーんだ！」と思うことがあった。それはクラスの中に、昨年入学して留年した人がいたのだ。このクラスメートの存在によって、問題文のアルファベットが、まず一字ずつ読まれ、言葉も発音されて文章全体が、

ダスイストアインテイツシュ（これは一脚の机である）」

というのだとみんなにわかったのは、始業四十分ぐらいで、三十人の全員に指名が三、四回まわった後だった。

最初の時はまあこれぐらいで済んだのだが、次の時間からはなおきびしい。いっぺん教わったこと

を忘れて返事ができず、へどもどしている、

だめ、だめ」というのはつきりした日本語の叱声がとんで来る。そして黒い表紙の閻魔帳に何やら記入するのだが、これが度重なるひどい。

お前のような者は、こんな学校へ入ってくる必要はない。家に帰って田の草取りでも手伝った方がいい。今、お百姓さんは忙しいのだ」

噂によるとこの先生は、青島でドイツ軍側の日本語通訳をしていたのだが、青島陥落で捕虜になった人だとのことだった。日本語も達者だった。

ある時、神様の話が出て、

ヨーロッパには神様が一つしかない。日本には、大黒様、恵比寿様、弁天様、稲荷様それにお釈迦様まであって人々が拝む。これを多神教といって、野蛮国ではそうである」

これを聞いて憤然とした永井隆は、直接この憤懣を先生にぶつける言葉を知らず、みんなに向けてもらした。

日本を馬鹿にしている。ギリシャには神様が沢山あるのに……」

と言ったが、しばらく考えて、

でも、もともと敗戦国の捕虜なんだから、怒ってみても仕方ないね」

日本人の自尊心を逆撫する言葉だったが、もともと我々はヨーロッパの学問を志してこの学校へ入って来たので、こんなことでは怒れない。猛烈な会話訓練だって、我々の将来を思っこの人のサ

ビス精神の発露なのだろう。ひよっとしたら、私達が志向してるドイツ文化の魂が、こんな所にむき出しにされているのかもしれない。この先生は好かれてはいなくても、会話訓練の辛さを理由に嫌がる人はなかった。

誰かが教室で、突然大声をあげた。ドイツ語の字引を見て、大発見をしたというのだ。

あった。あった。ドイツ語に、プラーゲンという動詞があつて、

日本語では「苦しめる」とか「ひじめる」という意味なんだ」

というわけであった。

### 三

プラーゲは、この学年は一学期だけ勤めて、帰国した。二学期の初め、会話の時間に、教室でみんなが待っていると、ドイツ語主任の高島教授の後ろから背の高い偉丈夫の人がついて来た。

「これから諸君のドイツ語会話を受け持つて下さる、ドクター・カルシュです」

と頗る簡単に紹介して、高島はすぐに教室を出てしまった。

後に残されたカルシュは、やおら大きな身体を教壇へ運んで挨拶らしいことを言うのだが、とんと生徒にはわからない。話す言葉はドイツ語だろうが、プラーゲに猛訓練されたからといって、一週一時間の二学期間では高の知れたものだ。一同ちんぷんかんぷんで、日本語がわからない先生はどうとう立往生の格好になってしまった。



校舎の傍で生徒とともに

「これで会話の授業ができるのかしら！ どうなるだろう」と心配していたら、先生が英語を使いはじめたのである。聞きなれない訛があって、わかり難かったが、それでもこれだと中学時代の訓練が役に立つ。聞き返したり質問もできた。いよいよわからなきや黒板に書けばいい。こうして先生との間に会話の途が開かれると、後は何でもなかった。早速ドイツ文が書かれ、発音から会話の訓練になった。

ここで実に意外なことがあった。ドイツ語会話の授業といえば、当時の生徒達はプラーゲの猛訓練しか知らない。

だから、身体も大きく強そうなこの後任の先生が、

「どんな強行をするのか」

とみんなで不安に思っていた。でも、話を通じたら一向にそれらしい心配がない。いやむしろ温厚であって、その親切さでは他の日本の先生に勝るとも劣らない。真面目さでも際立っている人だった。一時間にも満たないこの会話の時間だったのに、先生の思いやりの深い人柄と、日本語なしの不利をしのいでやろうとする熱意がみんなの心にひびいた。

授業の終わりには、ほこつとした笑顔を見せて行かれた。

プラーゲさんとはまるで違うのお……」と後でみんなは話し合った。

開業医として永く地元で尽くした坪内謙吉（大期理乙）が七十余年前のカルシュの記憶を二〇〇一年（平成十三年）四月二十七日付けの手紙の中で筆者に次のように語っている。

坪内が旧制松江高校に入学したのは一九二八年（昭和三年）であった。ドイツ語が第一外国語であるのは、将来はその大半が国立大学の医学部か農学部に行く理科乙類の生徒であった。

当時、ドイツよりグラーフ（伯爵）フェルディナンド・フォン・ツェッペリンが日本にやって来た。カルシュがそのことを非常に誇りに思っていたらしかった。というのは、自らが設計した飛行船によってツェッペリンという彼の名は飛行船の代名詞になっており、フリードリクスハーフェンに設立された世界的に知られていた世界初の商業航空会社であったからである。しかも、第一次世界大戦においては、この飛行船は偵察機のほか、英国に対する長距離爆撃機としても使用された。こんな話が自然科学に詳しいカルシュ博士から説明された。

ところで、ツェッペリン飛行船は空気よりも軽い水素やヘリウムを用いた航空機で、外皮にはアルミニウムなどの軽金属が使われた。乗客・乗員用の居住空間が枠組の底部に取り付けられ、動力源はレシプロエンジンであった。一九三六年（昭和十一年）、ヒンデンブルク号は、アメリカの飛行場に着陸作業中、火災を起こし墜落、多数の犠牲者を出した。これにより、定期旅客航路の運航は中止され、数年後には事実上活動を停止した。

日本人としての感想をカルシュから聞かれて、同級生の奥村通があてられた。彼は咄嗟のこととて

「ヴァイルコンメン、グラーフ・ツェッペリン」

とのみ言った。すると、先生は非常に喜び、満足の笑みを浮かべた。その様子を昨日のこのように

記憶している。

先生は難しい授業の時間をなるべく短くしてくれた。それにてより先生が誇りに思っていたローレライの話については、生

「ビッテ、ローレライ」

と言うとよろこんで教えてくれたし、その伝説を何回となくてくれた。後年欧州旅行をしてライン河にローレライの岩を見ルシュを懐かしく思い出したものである。



人智学に踏み込んだカルシュの講義

かね 徒が  
話し てる

### 講義録から

一

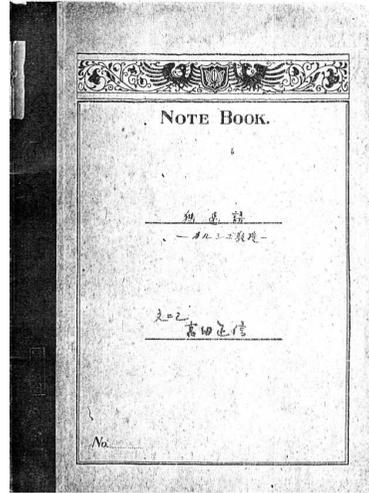
二十世紀も押し詰まった二〇〇〇年（平成十二年）の秋深い頃、九期文乙の宮田正信がノートを土蔵の中から、偶然見つけたとのことを電話で突然、筆者に連絡してくれた。必要な部分をコピーし、丁寧に糊付け製本して送ってくれた。早速ノートを開いてみた。ノートに記録したドイツ語のアルファベットは今日の筆記体とは違う。そう簡単に読めやしない。頁をめくるうちに、ローレライの歌詞が現れた。これなら筆者も歌詞を全部そらんじている。これを基に筆記文字の解読を始めた。カルシュ博士の授業の様子が目につかぶようになった。丁寧な講義とそれを細部にわたって、記録した生徒の宮田の生真面目さがよくわかった。それにしても、驚いたことは、これ程几帳面に彼がノートを取っていたことであ

筆者もかつてドイツ人によるドイツ語の授業を直接聞きながら、学習したことがある。しかし、メモを整然ととりながら、ペンを走らせることは、そんなに容易ではなかった。宮田は大阪出身の国文学者で、滋賀大学教授などを務めた、俳諧・俳句の研究者で一九七〇年（昭和四十五年）に文学博士を授与されている。著書に『羅俳史の研究』があり、つい先日まで、毎日研究に勤しんでいた。

ところで、ノートの発見と同時に、自由題のレポートの答案用紙が出てきたという。カルシュの授業には試験はなく、自由題の宿題があった。丁寧に細かく添削がしてある。その添削結果が残っている。カルシュは、授業中に自分の専門の分野の話が及ぶととても嬉しそうに、黒板にチョークで図をまじえていて講義をしてくれたことを宮田が手紙の中で語ってくれた。カルシュが在職中に九十枚に余るパス

テル画を残していたことを、宮田に後で電話で話したら、「なるほどと合点がいった」と言っていた。他のエピソードからも窺い知ることができているが、生徒の質問をうるさがることもせず、決してそれをはぐらかさず、カルシユは徹底してつきあってくれた。生徒に対しては、上段に構えた態度を見せることなく、教師としての思いやりの態度に今も頭が下がる思いであるといっていた。

カルシユは講義のなかで手紙の書き方を図解しながら教えたそうだった。ドイツの歌も教えてくれた。ノートからは細かく講義の内容が窺え、当時の授業を彷彿とさせる。できるものなら、今ここで聞けたらと思ったものだ。時には、聞き取りの練習の添削もあったようだ。丁寧に一人一人の答案を見ては、出来がよければ「グート」または「ゼア・グート」と微笑みながら返却してくれたとのことである。宮田が思



1931年当時の宮田青年のノート

Malerei (Grim)  
Ich weiß nicht, was ich abmalen soll,  
Ich ist so schwierig bin? Ein Maler  
mit allen Jahren, ich kann mich nicht auf  
den Boden, der liegt so tief und ist  
Landschaft, und weiß, fließt der Regen; der  
Gigant der Bewegung, fließt im Abflusswasser!

Die flüchtige Jugendzeit soll abgemalt werden,  
für goldenes Gesicht, fließt, für Kinn  
für goldenes Haar, für Kinn und  
goldenes Kinn, und fließt am Land ab,  
das fließt wie ein Wasserfall, ganz und  
Malerei.

ローレライの歌詞（宮田自筆）

い出の中で語った先生が答案用紙を一人一人の生徒に返却する。その風景が眼に浮かぶようである。

ところで、『湖畔の夕映え』で何度か登場する九期文乙のあの高等小使（クラス代表）の白石・は陸上クラブでの練習で忙しく、こんなに丁寧でよ

い授業をカルシユ先生がしてくれたのに、自習寮に帰っても、食事をすると、眠くて勉強どころではなかったという。しかし、もっと、ドイツ語を勉強すればよかった、と筆者に何度も繰り返し語っていた。

その白石が二〇〇三年（平成十五年）八月に逝去した。カルシユ頭影に最も重要な役割を演じた一人がこの世を去った。今天国で先生に現状を報告しているあの高等小使の姿を想像しながら、彼の冥福を心よりお祈りする次第である。

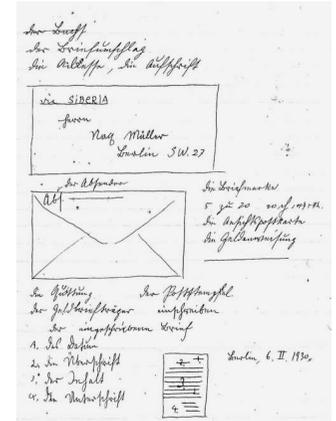
## 二

《カルシユ先生の授業》といっても、なにぶん、このとき宮田にとって、七十年以上も前に書き留めたものからの推測である。

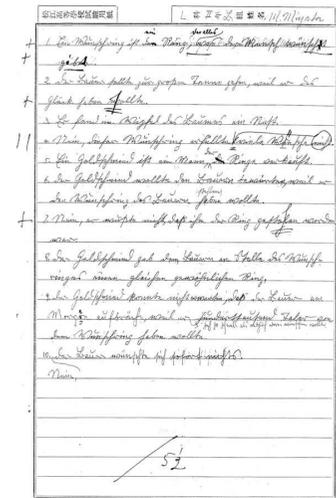
当時ドイツ語は先生四人がかりの授業からなっていた。うち三人の先生については定期的に学期試験があったが、カルシユの分は別枠で、特に時間を定めて試験を受けた記憶がない。毎週が実地訓練の連続で、終始マイペースで先生に向かい合っていればよかった。

宮田にとっては、このノートは個人的な断片的なメモにすぎず、公開が恥ずかしいとのことである。したがって、先生が熱心に話してくれた当時の様子が、記録された語彙の累積の向うに浮かんで来るが、これを正確に再現することは、至難の業である。それゆえ、教壇の周囲に、その日の話のテーマをおぼろげにさぐり求めるくらいが関の山であると、謙遜して語ってくれた。

ノートのありのままを紹介すると一九三〇年 昭和五年）四月早々の木曜日から開講だったことが判る。最初は、神話やドイツ古代の農耕社会の話、さらに挨拶の仕方と都市生活の話が、先生の



「手紙の書き方」に関する1931年当時の宮田青年の授業のノート



宮田青年に課せられた課題の添削結果

に進行した様子とともに、それを写し採ったメモから窺われる。よく黒板にチョークで図解して、説明してくれたのが今更のごとく思い出されるといふ。このノートへの転写から、ありし日の先生の板書の後姿が偲ばれる。宮田の感慨深いことばであった。これほどカルシュの絵図を使った講義の仕方に関心をもって聞いた宮田が、松江近郊の風景画をカルシュが密かに残していたことを筆者からの話で初めて知って、とても驚いたとのことであった。

ノートによれば、手紙の書式の丁寧な解説のあとで、ローレライに話題が変わっている。これは気分転換で肩の凝りをほぐす授業であった。これだけでなく、次に出て来る軍歌、シューベルトの菩提樹、さらにゲーテの野バラもすべて同様に写し取った。どの歌の場合にも一行一節ずつ黒板に向かってチョークを走らせつつ、あのやわらかい低音のハミングで確かめるように歌詞を書き進む後姿が目には浮かぶという。その後、皆で節廻しを辿りつつ歌い做い覚えたのだった。

ところで最初の三曲が毎時間続いたが、これが一寸異常であることに気がつき、思いを巡らしてみると、これには実は訳があった。そこから第三学年の、卒業までの残り少ない最後の授業が始まっていたからである。その前年の一九三一年 昭和六年）は十一月初めから約一ヶ月間同盟休校という授業放棄の異常事態が起こっていた。そのことの顛末と反省、評価はさし置いて、先生も我々生徒も、疲労困憊の態で、父兄や町の方々にもいろいろと心配をかけたようだ。その騒動がとにかく曲りなりにも結末を迎えた十二月の初めのこと、この三曲が集中的にノートに残されている。書き留めた時期を背景に、これらの歌曲を眺めていると、今まで気付かずにいたことに、今さらながら心打たれる。

ほかでもない、これら三曲の裏からにじみ出て来るカルシュの深く温かい無言の教育愛とも言うべき優しさである。その時は、クラスの誰もが、そんなことに恐らく気付かず過ぎ去って来たと思う。ほぼ一ヶ月振りに教室に戻って来た生徒達は、自身ではそれに気付かずとも、先生の目からは、一月前の生徒とはやはりどこかちがって見えたに相違ない。顔つきからだけでも、どことなく以前とは違って荒んで見えたのであろう。それを目ざとく感じ取った先生の温かい思いやりの心から出た、咄嗟の処置であったろうと思われる。この三曲連続の歌の時間を間に置いたおかげで、正月明けからは平常心で大学進学準備に専念できたのだと思う。

この度の筆者の呼びかけで、手許に眠っていたこのノートをとり出

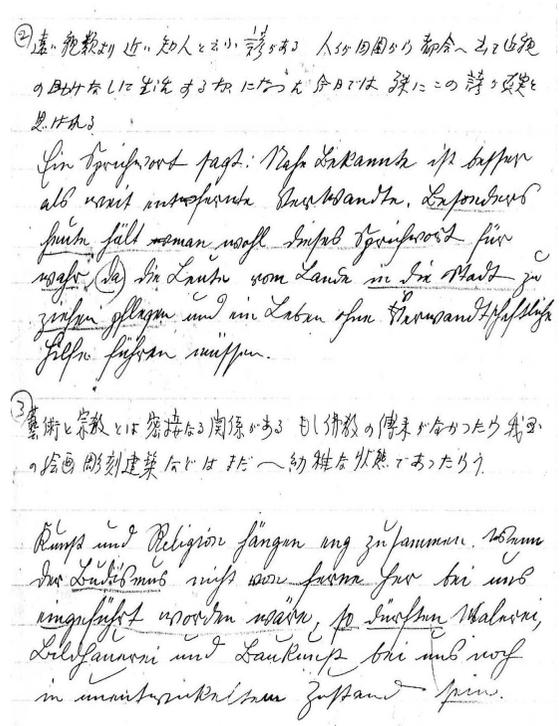


生徒の質問に答えるカルシュ博士

し、これらの記録に再会したのはまさに奇縁であったと宮田が繰り返し、笑顔で語っていた。ローレライや菩提樹は和訳の歌詞で、すでに耳に馴染みの歌であったが生のドイツ語で歌う感動はまた新鮮であった。とりわけ生徒を喜ばせたのは『兵隊の歌』であった。明治以来の聞き訓れ、歌い馴れた日本の軍歌の概念には当てはまらない歌で、その刺激は強烈であった。こんな軍歌があったのかと深く心が揺さぶられる思いがした。戦線の悲惨のひとかけらもなく、ただサラッと唱い流した所があるが、それもあとに続く楽隊の囃し詞の繰返しで消し去ってしまうアッケラカン振りであった。これは恐らく電信兵として第一次大戦に従軍した際に持ち帰った先生の唯一の戦場土産だったのかもしれない。この歌は卒業後も折にふれては口ずさんで当時を思いやる愛唱歌の一つとなり、今でも時々話題になる懐しい歌である、宮田・岡崎・白石がともに語ってくれた。因みに、この軍歌は、カルシュが再来日したときに、みんなで声を揃えて歌ったという。

三

受験期の様子が語られている。一九三二年（昭和七年）正月明けから三月初めにかけては和文独訳の連続であった。これはおそらく教頭でドイツ語主任の高島教授あたりの要望によるものであったろう。近づく帝大受験に備えての入試問題集によった特訓であった。一時帰国していたカルシュが九月に帰任した頃からそろそろ始まっていた。それが十一月の一ヶ月間の空白をうけて、年明けと共に急に厳しくなったものである。ストライキによる授業放棄の後であったからである。この経緯については、九期文甲の細田吉蔵らが『奮のふもとに』で詳述している。ところで、ドイツ語の問題には一寸首をかじげのような侷屈たる文章が少なくなかった。さぞ先生も色々苦労したことと思う。もちろん他の同僚の支



大学入試のための和文独訳

えがあったには違いないが、それにしても大変だったと推測される。

授業は先ず問題文を生徒の誰かに板書させて、それを先生が生徒と一緒に翻訳するという手順で進化した。しかしこれが実際の大学入試にどれほど役立ったのかは何とも言えない。

それよりも、第二学年からは日常的に生徒の各々に、毎週短い自由作文をドイツ語に翻訳する宿題を課していた。それを

次週の時間の始めに試験用紙を配布して清書して提出させた。

そのあとで前週提出した分に、先生が丁寧に添削を施したものが、生徒の一人一人に返却された。そして、必要に応じて個人的批評を貰った。生徒にとって型にはまった問題の翻訳よりは、この方がどれだけ楽しく、しかもドイツ語が実際に身についたか分からない。

発見当時の宮田の次のような言葉を思い出す。

卒業以来約七十年の空白ですっかり忘れてしまったが、たまたまこのノートに挟み込まれて残ったものが見つかった。懐かしい先生の手蹟の昔を今に伝えてくれている。いささか面映ゆいが、これも併せて御目にかける決心をした。これをノートの紋切型の入試問題集の独訳と比べて見て思うに、入試問題集の方は目先の功利一点張りで無味乾燥である。先生もあまり気が進まなかったのではなかったかと思う。それはともかく、これらの問題文集による翻訳の授業よりは、生徒たちが銘々勝手な自作の文章を翻訳して差出した稚拙な自訳の方を、どんなにか先生は楽しんだのではないかと思っている。たまに『ト』などの評価を頂戴すると嬉しかったものだ。その他、このノートの断片記録から窺われるように、平常の講義の話題はまことに多彩であり、例えば南ドイツの方言の話など、他では聞けない話題を記憶している」

本節の内容は二〇〇〇年（平成十二年）十一月十日付けで送られた九期文乙の宮田正信による筆者宛の書簡と電話での会話の内容によるものである。宮田が二〇〇三年（平成十五年）の四月二十五日に逝去したことを大阪の同窓会より、間接的に知らされた。宮田が今頃天国で、眼鏡の縁に手をやりながら、生前から慕っていたカルシュと在りし日の思い出を語り合っている姿が目には浮かぶようである。これまでにカルシュ博士顕彰に多大の情報を寄せて協力してくれた筆者にとっては特別の存在であった宮田・岡崎・白石の三氏のご冥福を心より祈りながら、この話を閉じることにする。

## カルシュと大山

—

フリッツは日本の生活に少し慣れた頃、高島と近隣を汽車で旅行した。間近に大山を眼にした時の衝撃的な印象は、彼のその後の生活に重要な意味をもってくる。その場面は『メヒテルトの証言をもとに描いたものである。このことはカルシュの日本との深い関わりを描く、『湖畔の夕映え』の全体を貫く重要な主題でもある。

………

米子を経て溝口から榎水高原に向かおうとした。いい天気の日だった。見上げると青空が澄んで、筋雲がたなびいていた。

高島はフリッツと二人きりで自分の得意なドイツ語が使える。心が何となくうきうきする。フリッツもゆったりとした気持ちでいろいろ日本のことをたずねることができる。

フリッツは途中、歩きながら何の気なしにふと東の空を振り返った。このときにくっきりと浮かぶ大山の西の側面の美しい姿が目に入った。この景色にフリッツの眼は釘づけになった。同時に彼の身体中に電撃のようなものが走った。しばらく、身動きができなかった。この光景は西から見た雄姿であり、出雲富士と言われるように美しい。そのとき眼に映った均整のとれた姿は、まさに彼が五、六歳の頃、夢にみたあの姿そのものであった。

「遠い昔見たことのある景色だ。これこそ、私のふるさとだ」

と彼は思わず叫んだ。

一緒の高島はその意味が理解できなかった。

この話をメヒテルトは幼い頃何度も聞かされたという一見あり得ない、不可思議な体験といえよう。

実は、彼の生まれ故郷にはこのような風景は全く存在しない。地形からいっても明らかである。

しかし、清水が絶えず湧き出ることの榊水高原から見える優美な姿こそ、彼の記憶にある、何度も夢に見た自分のふるさとであったのであろう。彼は、運命や、仏教という輪廻や前世をよく話題にしたという。



中海の向こうに見える雄姿大山

フリッツ・カルシュは幼少の頃、まだ見たことのなかった大山の夢を何度も見たと語っていた。人の世の不思議を感じる言葉である。

カルシュ博士

足下に目を移すと素晴らしい景色が広がっている。

北からみた大山の姿は険しい地肌を見せるいわば男性的な姿である。東に廻ると茅の穂なみが広がるさわやかな高原である。

彼は後に、好んで大山をパステル画に描いている。その絵が筆者の手許にある。

しばらくして、我に返ったフリッツは大山を仰ぎながら、高島と連れだってその中腹に向かったのであろう。

以下は、もちろん想像であるが、こんな会話が聞こえてくるようである。

わたしは、遠い昔、ここに住んでいたことがあるのです」

「いや、住んでいたような記憶があるのです」

「何を考えているのですか？ カルシュ先生」

「いや、ちょっと……。むかしのことです。それも、自分の生まれる前のことです」

「なにやら、宗教的ですか」

と高島がいぶかしげに言った。

この衝撃的な印象は、カルシュ博士の人生の中でも重要な意味をもっている。そんな情景が、百年の歳月を経て、今カルシュを想う人々の周りによみがえる。



松江の農地より大山を望む

静かですね」

何という落ち着き」

何というやすらぎ」

宿が立ち並ぶ坂道の奥に大山寺がある。奈良時代に開かれた山岳宗教の中心地である。現在の本堂は昭和初期のもので、火災後に再建されたものである。この近くには大山寺とともに修験の霊場となった老杉に囲まれた大神山神社がある。澄んだ空気が心身を浄めてくれる。

## 二

カルシュ博士は当時の松江高校英語講師のギルソンおよび後の鳥取大学教授で、一貫して英語教育に尽力した田総武光（六期文甲）と大山で過ごしている。以下では田総の残した手記を借用しよう。

田総が淞高（松江高校）に入学した当時の外国人講師は、ドイツ語講師のカルシュと英語講師のミーズの二人であった。彼が二年生に進級して間もなく、町で外国人に出会った。おそろおそろ、彼に話しかけると、新任の英語講師のギルソンであることが分かった。当時奥谷町には、外人講師のために、欧風の白亜の官舎が、まるで双子のように、行儀良く二軒並んで建てられていた。ギルソンはその一軒に入居したばかりであった。この頃、田総は近くの井原家に下宿していたので、片言の英語で会話をするのが楽しみで、よく先生の所に話しに行ったとのことである。ギルソンも日本語が分からないので田総と行動を共にするのを喜んでいたし、頼りにしていたという。そのうち、一人暮らしの不便さから、田総の下宿している井原家の離れに引越して来たので、ギルソンは六畳の間に、田総は三畳の間に住む

カルシュ博士

ことになった。こうして二人は親子のように行動を共にすることになったとのことである。

ところで、拙著『湖畔の夕映え』では、生徒の名がたくさん出てくると、直接授業で田総がカルシュとは接触が少なかったことから、十三期理乙生の遠藤の物語と合体した描写にしてあるが、実は以下の実話を元にしたものである。

夏休みになると、友人と隠岐観光や大山登山など方々一緒に歩きまわった。隠岐では、西郷の近くで、珪藻土の山肌に無数の穴居があって、その一つに、壁画のあるのを見た。どういつ訳か今でもその壁画がはっきりと記憶に残っているという話である。

両者の体験は類似しているので、『湖畔の夕映え』では一緒に描いてあるが、この部分は繰り返しているが田総の手記によるところが大きい。

残念ながらギルソンは僅か一年で松江を去り、モントリオールに渡り、その後は消息が絶えたという。

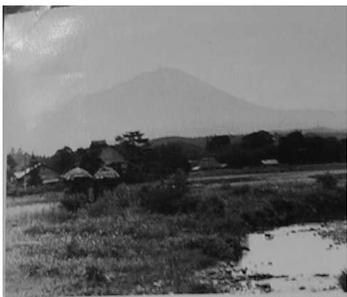
方、一  
ルシカ  
ユは、  
夏休  
みず  
間と  
大



1926年春の大山とその周辺



1929年4月当時の大山 スコットによる



1930年頃の大山と麓の様子



大山寺付近の家 1930年頃



カルシュの宿舎近くギルソン英語講師と田総武光（八期文甲）

に家を借りて過ごすことがあった。田総がギルソンと一緒に大山登山をした時に、カルシュの在所に立ち寄ったことがあった。彼は浴衣を着て下駄ばきで庭で迎えてくれた。椅子にかけて長々と話が続いた。カルシ

ユは納得すると、必ずイエス、イエスと二回繰り返して相槌をうつのが癖であったという。今でも、そのイエス、イエスが彼の耳に聞こえて来るようである。数少ない和服姿のカルシュと過ごした大山での当時の夏休みの雰囲気伝わってくるようだ。その時の様子がメヒテルトから入手したこの写真から推測できる。聞くところによれば、山下佐平夫妻とも、何度か一緒に過ごしたという。事実、山下夫妻が一九二五年（大正十五年）に大山滞在中のカルシュ夫妻を訪問した記録が残っている。また、彼が九期文乙のクラス担任であったことは『湖畔の夕映え』にも描いた。



山下佐平夫妻とともに(1925年)

カルシュと大山の関係には特別なものがある。大山の神秘性は彼の日本との関係の伏線であり、彼自身の生活と学問の新たな源とも言うべきもの

である。これから受けた影響と人間観はメヒテルトやフリーデルンに受け継がれた。

カルシュにとつての山河や神社仏閣の雰囲気は彼の自然観、人間観、歴史観に、それに思索に大きな影響を及ぼしている。それゆえ、彼は神社仏閣と自然の多くを絵に描いている。しかし、そうしたなかでも彼が大山とその付近を特別に考えていたことは、家族の証言から明らかで、実際に子供の頃何度もその夢に見たことを家族に語っていたという。

## 軽井沢

—

夏には避暑をかねて、軽井沢にはドイツ人だけでなく、青い目の人々がたくさん集まっていた。気候もエンメラに合うので、この時期を楽しみにしていた。カルシュ博士は、ここで思索をしたという。

毎年夏には軽井沢にカルシュ一家は別荘を借用した。一九三三年（昭和八年）から一九三九年（昭和十四年）まで通称ハンダヤマの別荘で過ごした。現在は道路になっている。夏の間そこに住んでいたドイツ人は軽井沢のこのあたりを「ラン族の小さな森（Kunnenwäldchen）」と呼んでいた。おそらく文明から取り残されたという意味で古い民俗名の匈奴（Kune）という言葉を使ったと思われる。というのは、そこは第一次世界大戦の間、多くのドイツ人があたかも虜囚市民（Zivillgefangene）のようにして住んでいたからだろう。ともかく三笠ホテルのすぐ近くの小さな森であった。後述するが、駐日大使のオットの勧めで外交官として日本に戻った年には、今上陛下が皇后陛下と初めてご対面のあった場所からすぐ近くの別荘で夏を過ごした。その後は幸福の谷（Happy Valley）と呼ばれる場所に住むことになった。

以下は、『湖畔の夕映え』の夏休みの一節を描いた部分である。

……………

一九四〇年（昭和十五年）の夏は、後に皇太子殿下が美智子さまと出会ったテニスのすぐ近くに住

カルシュ博士

むことになった。旧テニス通りにある別荘の庭のシダやコケが美しい。石畳の道が続く『幸福の谷』は外国人が集まるところだ。

そして、やがてこの居住区の別荘一九二四番で過ごすことになった。散歩に行く時はフリッツはいつも画用紙を携えていく。ここは家族みんなのお気に入りの別荘であった。

近くに、半身が赤いアカゲラが訪ねてくる。

「うわー可愛い」

野鳥の観察で時を忘れる。メヒテルトは森が大好きだ。

ブルーベリーや克蘭ベリーやラズベリーがあちこちに見られる。木立の中の散歩道に珍しい草花を摘む。そこで戯れる昆虫の動きをみるのは子供には何よりの楽しみだ。

『赤ずきんちゃん』の話の思い出。ここは、少女にとってメルヘンの世界だ。

フリッツとエンメラの出会ったマルブルクの東は『赤ずきんちゃん』のふるさとだ。そこには赤い帽子をかぶった女の子がたくさんいるとフリッツから何度も聞かされている。

三笠通りから大通りを進むとカラマツ林の外人墓地が見える。そこから少し歩くと雲場池が見えてく

る。白鳥が羽を休める。チャイコフスキーの白鳥の湖を連想させる。事実、みんながスワン・レイクと呼んでいた。この周囲は水が澄んでいる。



軽井沢の別荘 1935年頃



軽井沢フン族の森 1935年頃

メヒテルトはジークフリートとオデットを思い浮かべる。一度も見たことのないバレエだが、エンメラの膝に抱かれて、何度も物語を聞き、その曲も何度も聴いたことがある。いつのまにか、オデットと自分を重ねている。

## 二

アメリカ・テネシー州チャタヌーガのヒクソン・バイク通りのメヒテルトの住居を訪問したとき、大きなアルバムに整理されていた画集を彼女が居間に運んでくれた。子供のためにも絵を描いた。その影響もあって全部合わせると百枚ほどになる。見事だ。

軽井沢で描いた浅間山の噴火時の絵が残っている。フリッツは山の絵を好んで描いた。

カルシュ博士

家族三人で北の方角にとどきき足を延ばす。鬱蒼とした緑の繁る森だ。木の間より漏れる光の中をハイキングする。ドイツ人が好きな山歩きのヴァンデルングだ。水筒持参で途中の吊り橋をわたる。そこに、一羽の白鳥が飛んでくる。

冷たい湧き水が見える。ここでフリッツは一休みする。冷気で気持ち静まる。

ここは一番落ち着くところだ。

静かだ。風の音が聞こえる」

旧碓氷峠の見晴らし台に登った。この日没は美しい。六道湖の夕日と異なる別の美しさを想う。

美しい。何という美しい夕映えか」

メヒテルトの顔が夕日に染まる。フリッツは遠く故郷の友を想った。

エレーナの自慢は、軽井沢や野尻湖の話だった。

きれいな湖で遊ぶの。涼しいところで、アメリカ人が沢山いるの」

芙蓉の葉に似た波静かな高原の湖、その西に位置する黒姫山の斜面には七月頃はラベンダーが咲き揃い、やがて風にそよぐ色とりどりのコスモスが見られる。



浅間山の噴火 フリッツ・カルシュ自筆絵画



1940年 溶岩フィールドにて橋本チヨ子、メヒテルト、ピアノ教師マルゾフ夫人

は妻である。メヒテルトの記憶によれば、一九三三年には一四六三番にシンチンゲルと住ので、この家をカルシウムシンチンゲルハウスと呼んでいたという。翌年から一九三九年までは幸福の谷Happy Valleyの別荘に住んだ。最終的には戦後の強制送還まで、街中の一三二八番の三階建に家族が住んだ。万平ホテルに近いところであった。バーバラ・シンチンゲルとは、一緒に遊んだ犬を通じて親しくなった。この当時メヒテルトは、東京のシテイバンクで働き家計を支えていた。

一九二七年の写真には、フリッツが妙義山付近の地蔵川のホテルで後に大阪大学の教授となったポーナ夫妻と食事を共にしている様子が残されている。



1927年ポーナ夫妻とともに

溶岩の平原を散策した。これは後述する「軽石」の逸話に通じるものでもある。軽井沢の周囲を走る草津電車から多くの風景写真を残している。小瀬温泉は単純温泉で国鉄軽井沢駅から白糸の滝に通じる白糸ハイランドウェイの途

ウッドマン夫の普通校に入れ育てながら、時いた。

当時の彼らの戦後、エレイが連絡を取り合子どもの頃の友ものだ。そんなくれた。

三

軽井沢は、明治以来、外国人の、とくにドイツ人が避暑地として、利用することにより、世の中に知られるようになった。このことは周知のことである。フリッツは、来日以前にすでに、和歌山高等商業学校の講師であったロベルト・シンチンゲル夫妻とは連絡があったようである。リザ

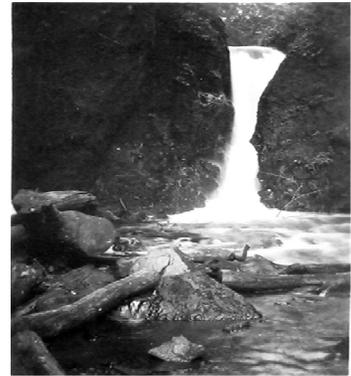


舗装前の大通り

妻は子供達を師範付属校ではなく、北堀で、出雲弁を話すその辺の子供と一緒に、外国人の多いリゾートにでかけて生活が彷彿するのどかな光景である。ナノの消息を知り、アメリカでメヒテルトだったが、やがて途絶えてしまったという。情がいつまでもとは、必ずしもいかないうことを、メヒテルトが悲しそうに語って



1927年 軽井沢駅と人力車



メヒテルトが洗髪した小瀬の滝

中、小瀬川沿いにある。ここで髪を洗ってエンメラからリンスして貰ったことをよく記憶している。メヒテルトは一九四〇年に父と浅間山の噴火によってできた離山に登った。この時、メヒテルトのピアノ教師であった白ロシアから亡命してきたマルゾフ夫人が同行した。家族地ともども楽しいひとときであった。

何千年も前にできた溶岩ドームの山で、山全体が火山台地となっている。雲場池に近い離山の標高は二二五八メートルで、浅間山の寄生火山のようにも見えるが正しくは浅間山の形成よりも古いという。

## 生徒の思い

### 一

生徒から見たカルシュとの親交とその影響の具体的根拠はなんといっても、調査時に元氣であった人の『奎の言葉』である。また、『雷のふもとに』(伊制松江高等学校校史)の『懋師列伝』と『忘れ難き人々』のなかに描かれていた『田舎の大学 酒井勝郎』、カルシュ先生『酒井勝郎』、カルシュ先生『ギルソン先生 田総武光』、六十二年前のカルシュ先生『木村登』なども根拠となる。そこには、ドイツ語を全く知らない生徒に僅かな手がかりをもとに教える才能やショーペンハウエル、マルクスなどの解説の授業の様子が見られる。また、高橋敬視先生『勝部真長』には、日本の当時の代表的哲学者の一人の高橋敬視教授に、カルシュが師のハルトマンを紹介し、その翻訳のために彼自身が協力したとの記述などが見られる。

カルシュの帰国後については、カルシュ先生と田島君『奥野良臣』に、直接の師弟関係にない生徒との交流が書かれ、松高を思い出す座談会『岡崎、白石、高田、増田、松田、宮田、森山』では、生徒へのカルシュの絶大な影響がにじみ出ている。また、彼の薫陶を受けて成長した『タクチン生産の功績者 奥野良臣君 青山博』の記事は、如何に彼の授業が旧生徒を当時のドイツ先進科学やヨーロッパ合理主義へ眼を向けさせたかを雄弁に物語るものである。その他、旧生徒のカルシュの手記については枚挙に暇がない。例えば大阪支部同窓会報『濳友』で『カルシュ先生を迎えて』、老博士はるばるドイツから、『カルシュ先生を悼み』、カルシュ先生の授業 などがあり、カルシュのことが繰り返し、語られていることは否定しがたい教育的意味があると思っている。同じような教師の身である筆者からみても、

教育に対する重要な問いかけを投げかけてくれる。

Brief zu Frau Karsch) はドイツ語で書かれたエンメラ夫人あての旧生徒によるカルシュ逝去時の慰めの手紙である。また、東京松高会報には、カルシュ先生の訪日について、およびカルシュの招待を計画しながら不慮の事故で自ら完遂できなかった田村のための、追悼田村清三郎君、暉峻凌三、やこれらを書いた新聞記事がある。私信を含めてたくさんさんの書簡と関連写真もあり、旧生徒から個人的に如何に慕われていたかを知ることができる。

カルシュと生徒とのエピソードには、野外授業での生徒とのやりとり、一時帰国時の歓送会、雨の日の生徒との心の交流、下宿での生徒とのやりとり、自宅での生徒との交流、哲学書の話などが伝わっている。これらはカルシュの人柄を知る上で、とても重要なエピソードである。そのうちの、幾つかを紹介しよう。

## 二

**軽石** そもそも、カルシュのエピソードが初めて日経新聞の文化面に採り上げられてから、『湖畔の夕映え』に詳細を述べるに至るまで、カルシュを話題にするときにはいつでもこの話が出てくる。これは、人の問いかけを決してはぐらかさず、真面目に対応するカルシュの誠実さを如実に示すものである。

カルシュが着任した頃の話である。生徒の希望があつて、野外にみんなで散歩に出たことに始まる。放課後になって、先生と五、六人のグループで自転車でサイクリングだ。行った先で、何かを拾って

来ては、質問して先生に会話のチャンスを求める。それに対して、カルシュはいちいち、面倒がらずに笑顔で生徒の質問に答える。

出雲浦の千酌<sup>ちくく</sup>まで来た。浜で拾った珍しい小石を見て、チャンスとばかり、ちよつと、先生に聞いてみようかと思つた生徒がいた。その日に教わつたドイツ語の練習にもなるからだ。

何の石か?」ドイツ語で聞くと、『ムスシユタイン』という返事だ。しかし、こんな単語は誰にもわからない。

そこで、『ムスシユタイン?』という的はずれな質問をおさるおさる、誰やらが出した。

先生が言うには、『ムスシユタイン』は英語で『パミスストーン』

今度は、『パミスストーン』の単語がわからず、みんな目を白黒させている。

けれども、『パミスストーン?』とは何?』とまではとても聞くわけにいかない。わからなくて英語の単語で説明して貰って、まだわからないからだ。

拾ってきた生徒はもちろん、みんなもこの石が『何の石』なのか初めから知らないのだ。だから、聞いたのだ。

『赤学生の質問じゃあるまいし……。これ以上は続けられない。でも、会話をつづけたい。何とかしたい』

その成り行きを生徒達が不安げに見ている。すると、先生は紙と鉛筆をだして、筆談で説明しようとした。

まず、エルデ（地球）の内部から、溶けた熱い岩が表に噴き出ると話した。ヴォルカノ（火山）のこ  
とだ。これは中学校で教わって試してみんなが知っていた。

その時ふき出した溶けた岩に水が触れて、*びゅつ*と……急に冷えて。固まる」と説明した。こ  
れでみんなが納得した。軽石だということが分かったのだ。

その石、水に浮くかどうか勢い込んで英語で聞いた者が  
いた。これが、後に『*食崎の鐘*』で知られる、あの永井隆  
博士の若き日の姿である。

そのとおり。みんな分かりましたね！」

先生も嬉しそうに顔をほころばせた。とにかく英語、ド  
イツ語それに日本語のごちゃ混ぜのこの会話で、「一件落着  
き」ときた。

今までは、えらい違いで、面倒がらず、はぐらかさず  
に、答えてくれるのを見て、先生の前後を生徒が取り囲み  
歩くようになった。先生が「まず」と支えるという風にも  
んなが自然に傍に近づいていった。

その帰り道にみんなで食べる駄菓子を買った。こ  
こで、カルシユ先生の口から

「いくらするか？」とうっかりドイツ語が出てしまった。



松江高等学校卒業時の職員一同最前列左二番目がカルシユ博士  
1928年第六期生卒業アルバムより 澤田の提供)

続いて、値段が何ペニツヒなのか」とドイツ通貨の名が出た。

すると機転の利いた生徒が「*フュンフ* 銭」とドイツ語で値段を言う。先生が五銭玉を盆に置いて、  
にこやかに店のお婆さんに会釈する。そんな形の集団散歩であった。こんなことが繰り返され、先生と  
生徒との距離が一層近くなった。

如何に生徒からカルシユが慕われていたかを、酒井によるこのエピソードから知ることができる。

### 三

カルシユ先生と「緒」 次は一九三一年（昭和六年）に、カルシユが一時的にドイツ帰国する時に  
催された校内の集会の様子で、『湖畔の夕映え』の一節をなす物語である。この調査で大きな役割を演  
じた白石・をユーモラスに描いている部分でもある。

九期文乙の生徒が催した送別会が済んで、会場である座敷の外の縁側で撮影した写真は、同小説の裏  
表紙に載せたものである。前列左より二番目が白石、三番目はクラス担任の心理学が専門で後に東京音  
楽学校に転任した山下教授、四番目はカルシユ、後列左より二番目に岡崎、三番目に宮田、後列右より三  
人目に鹿野らの顔が見える。

この時の想い出を白石が次のように語っている。

九期文乙の生徒が第二学年の年度末の早春、カルシユの一時帰国時にクラス一同の相談の結果、先生  
の送別会の開催を決めた。準備はクラスと学校事務局・各教師との連絡役である高等小使の役にあった

朝日重雄と白石・の二人ですべてを担当した。会はとても和やかで日本語とドイツ語が入りまじった賑やかなものであった。昼食だったか、早い夕食だったか、食べものが何であったかはすべて忘れた。しかし、カルシュと膝をつき合わせての会食は初めてのことであった。カルシュも本当に喜んでくれた。このときも微笑をたたえ、日本語なしでの会話をつづけた。最後に白石がドイツ語で閉会の挨拶をして拍手を受けて会は終わった。その時カルシュが白石に微笑みながら握手を求め、短いドイツ語で何か言ってくれた。しかし、この言葉が白石には聞きとることできず、またこれを先生に聞き返す、とっさのドイツ語の作文ができず、今日にいたるまでその意味がわからずにいることが残念で仕方がない。閉会の辞が白石に決まった時に日本語で、原稿はすぐ書いたが、ドイツ語に直すときに、俺が助けたる」と言った者が一人あらわれた。これが鹿野明である。



1931年春一時帰国時にあたってのカルシュ先生送別会。山下先生とともに撮影。後列左から2番目が岡崎、3番目が宮田、前列左から2番目が白石、後列3番目が鹿野である（白石の提供）

教室の椅子席はアイウエオ順のため鹿野、白石と《》で三年間つづいて並んでいた。それで早くから仲良しの一組であった。この鹿野が原稿を読みながら、一心にドイツ語の辞書をひき、一年生の時苦しんだ文法の教科書を引き出して、意見を聞きながら書き上げてくれた苦心の作であった。彼は一九八八年（昭和六十三年）に他界しているが、この送別会は自分達にとっては大事な学友が残してくれた大切な思い出であった。

以上が一九三二年（昭和六年）の三月から十月にかけて、カルシュのドイツ帰国の際、学校の集会所で山下学級主任も同席して送別会を催したときの話である。今と違って、料理などお粗末なものであったが、先生を囲んでの心楽しい集いであったことが小説には描かれている。

カルシュの旅行日程が三月二十日の神戸港出帆であった。船はハンブルグーアメリカラインのドイツ国籍のヘルクーゼン号で、五月初めジェノヴァ着であった。陸路ミラノ經由、アルプス越えでドイツ入国であった。三月二十日はすでに学年末休暇に入り、学校は入試の最中であった。

大阪の自宅に帰省していた宮田は先生の出帆に間に合うように神戸港停泊中の貨物船宛に、心もとないドイツ語で、旅行中の安全と無事と再来日を願って書状を発送したとのことである。はたしてカルシュの手許に届いたかどうかは分らぬままであったとのことである。

それはともかく、ジェノヴァまで一ヶ月半近くもかけての船旅で御苦労なことであった。ドイツからは一度絵葉書の便りがクラス宛に届いた。永らく教室の掲示板に押ピンで止めてあったが、いつの間になくなった。

#### 四

《学園祭の模擬店》有難うさん という模擬店の名前に託してカルシュが語られている。奥野良臣大阪大学名誉教授が手記を寄せてくれた。彼によれば、カルシュの口癖は何かして貰うと ありがとうさん》であったという。松江高校だけでなく他校でも見られる学園祭が年に一度あった。記念祭と呼んでいた。勉強よりもこちらに全力を傾倒する生徒も少なくないくらい、この行事には張り切るものであ

った。

ある年の学園祭の折、十四期理乙のクラス三十名の出し物の一つとして模擬店が一軒急造された。飲食店を提供したりして「杵ち」のメッチェンなど人々を歓待するのであるが、生徒は学園祭の模擬店で店の名前を

「有難うさん」  
とした。先生の口癖を真似て麗々しく大きな店名として張り出した訳である。カルシユの人氣が高かった一つのエピソードである。

カルシユ博士

微生物学に大きな業績を残し日本のジエンナーと呼ばれる十四期理乙の奥野は古い昔のことではあるが、鮮明に覚えているとのことだ。実際、学術情報が



模擬店の前での記念写真(卒業アルバムより)1935年



14期生の寄せ書き 教職員の名前も見える  
1937年 奥野の提供

とくにドイツ語の論文が重要な先端的役割を果たしていた時代に、カルシユから教えられたドイツ語が彼のマラリアに関する世界的研究成果に大きな影響を与えたことを自ら筆者に感慨深げに語ってくれたことが印象深かった。

それに、「ドイツ語を教わったことは勿論のことであるが、その他重要な人生哲学の一端を教えられ、私の後の仕事に重大な影響を与えた自分の大恩人でもある」とも語っていた。

別れ際に、「今天国に居られる先生に、私共の模擬店名「有難うさん」の写真に大きな熨斗を付けて差し上げたい」

そう、語ってくれた。そして、当時の資料や学園祭の写真を筆者に手渡してくれた。それを見て、今もあまり変わっていないことを感じたものであった。

ところで、この頃は今でいう未成年の飲酒はどうであったか聞くのを忘れたが、キリンビールのテナの模擬店はなかなかモダンであったようだ。すし、ライスカレー、煮物、うどん、しるこ、紅茶、ミルク、ケーキ、コーヒーなどを一〇〜二〇銭(？)で売っていたようで、現在の大学祭の模擬店とそっくりだ。

このころは先生に対する思いだけでなく、生徒同士の絆もとても大事にしていた。当時の寄せ書きが残っている。こうした体験が今に至るまでの親密な交際の基礎となっている。

とにかく、学校教育全体が、生徒を自然な形で専門の途に誘導していったし、それが画一的誘導でなく個性に合ったものであったという。思い切ったエネルギーの燃焼の仕方を、またひとの優しさと思いやりを授けてくれたカルシユを今も折にふれて思い出すという。同様のことを酒井も自ら教鞭を執っ

た島根大学で自分の学生に語っている。

五

《マルクスの逸話》 社会主義の風潮が高校生にも及んでいた一九三一年（昭和六年）、生徒達が理不尽に思えた学校側からの生徒の処分に、精一杯抗議した授業放棄は、その当事者でもあった細田吉蔵元運輸大臣が生で語り、記録も残している。いつの世でも若者の純真な心と行動は感動を与える。それにこの時のカルシュと生徒達の心の交流は何とも美しく印象深いものがある。

同盟休校が十一月に終わって、一九三二年（昭和七年）の早春の卒業前に二階の教室で、カルシュが当時日本では高校生、大学生たちが大きな関心をもって聞いたカルル・マルクスの逸話について、生徒の質問に答えているところである。彼の信条から言えば、当然マルクスに反対の立場であった。

この授業は九期文乙クラス一同の心に深く刻まれて残っていると当時の《高等小使》の白石が語ってくれた。



カルシュ博士によるマルクスに関する講義風景  
白石の提供

話は前後するが、これとは別に、宮田が 兎つかった講義録》の中で詳しく述べている。このことは、当時、他の先生の授業の仕方も同様であったろうが、単なる紋切り型ではなく、カルシュの授業が臨機応変に生徒の関心に沿って行われたことを象徴的に表しているようだ。

景の写真はその一コマで、彼の背後の黒板の右が問題文で、ノート不明であるが、一九三二年（昭和七年）一月末か二月初めであろう。学友の中村雄光（義明）筆蹟ということである。

ッ気もないただの翻訳の作業が続く中で、つい時のはずみで先生も思う。九期文乙の岡崎・宮田・白石が相槌を打ちながら筆者に語っ

を去っている。美しく書いていたという。少しでも日本の心を知るために和服も好

服をいつまでも大事にしていたという。流に触れたというメヒテルトの思い出に基づいて『湖畔の夕映え』では、十期文乙の矢崎憲正が実際に目撃したことを後になって本人である。



自宅の庭で 和服姿のフリット妻エンメラ

《雨の夜のできごと》 雨の日の夕方、何やら外で大声がする。松江高等学校の生徒が官舎の窓に向  
かって叫んでいる。

先生！カルシュ先生！

俺は、カルシュ先生が好きだ

この雨の中、アスファルトの上におすわりして、ずぶぬれだ。

ファテイ、なーに？」

メヒテルトが何のことか訳がわからず、お父さんに尋ねた。

うん、学校の生徒だよ

どうして？」

どうやら、生徒は泥酔に近い。

そんなことしていると風邪引くぞ。家に帰ろうや

とフリッツお気に入りの蛇の目傘をさしかけてやさしく説得した。

何かつらいことがあったのかい？」

すると生徒が

カルシュ博士

俺は大好きな先生のために歌うんだ

何か友達とあったらしい。

わかった。わかった。ありがとう

でも、もう帰ろうや

ドイツ万歳！

突如ドイツ国歌を歌い出した。

ありがとう。原田君

生徒の肩を抱いて家に招き入れた。

エンメラの入れたコーヒーを飲んで体が温まったようだ。

さあ、帰ろうな。君が見えなくなって皆も心配しているよ

そう、説得して彼の下宿につれ帰った。

そんな、カルシュ先生だった。

矢崎は後に、広島高等裁判所長官を務めたが、彼が語ってくれたもう一つのエピソードがある。



和服姿のフリッツ・カルシュ

《広島にて》 フリッツが再来日したときのこと。

広島で 平和公園を少し歩いて平和記念資料館に入ろうとしたところで、人の影の石を見た。

原爆炸裂時の人影が壁に残っているのです」

と、かつての生徒である矢崎がそう説明した。

そして、悲痛な声で

「ほら二人で先生を訪ねた、あの時の、若槻が原爆で亡くなりました」

ぽつりと語った。

フリッツが大使館に勤務していたころ、ドイツに三年留学して帰った大蔵本省勤務の若槻が矢崎と訪ねてきた。

ドイツの体験をいかにも嬉しそうに語ってくれた。それを思い出した。

「今ごろ、日本の社会の中枢で活躍しているはずの若槻君が。どうして」



カルシュの広島訪問時に矢崎から受け取った写真

「はい、先生。その通りです。惜しい人材です」

何ということであろうか。そうだったのか。フリッツは顔を曇らせた。

《二チエの解説書》

この逸話は十三期文乙生の千代賢治ちしろけんじの思い出に基づくものである。

高校生は少年から青年になって、誰からも一人前として扱われる。入学式でも校長が、祝辞の中でそう言った。とにかく高校生になった千代賢治は嬉しくしようがない。

おれも、おとなだと思えば、饅頭屋に入って饅頭をたべるのも、映画館に入って映画を見るのも、停学覚悟だった今までとは違う。中学生にとって、高校の生活はめくるめく変化であった。

それにも増しての変化は経験したことのない外国人の先生から講義を受けることだった。

窓を指しながら繰り返す「グスイストアインフェンスタール」の言葉はカルシュ先生の第一声で、決まり文句であると先輩が言っていた。後で聞いて、何だと思った。驚きと安堵が一緒にきた。

先生は授業中は一切日本語を使わない。我々にはすべてドイツ語で話す建前を自分で守っていた。

三年生になって、ある日の終業後に、クラス仲間が高下駄の歯を鳴らしながら下宿へと向かっていた。

ふっと後に人の気配がした。気づくと日本語で声をかけられた。

先生が通勤用の自転車を押しながら追いついて来た。ニコニコしながら我々の列に入った。

直ぐ近くにいたのが千代だ。しかし、傍らの級友が黙っていると間が保てないので、何か言えよとばかりに促す。しかし、なにを言っているかわからず、往生している。

どうも、何か話さないと間が悪いと思い、

「ニーチェの『アラトウストラかく語りき』のいい解説書はありませんか？」

と思いつきを千代は言った。

学校の授業で習ったばかりのホヤホヤだ。

「ニーチェは十九世紀後半の偉大なる哲学者だ。キリスト教を鋭く攻撃し、超人と永劫回帰の思想による独自の形而上学を樹立した」というわけだ。

それを聞いて、先生は一瞬、驚いた感じだったが、我が意を得たりという調子で、原書を紹介してくれた。別れ道まで先生はドイツ語混りの日本語で情熱的に話をしてくれた。先生の話は全部は分からなかったが、一生懸命なので友人の心配顔がそこにあった。

「しかし、こりや、エライことになった」と後になって想い出してはそう言っていた。

ところで、おまえ、カルシユ先生の哲学の立場を聞いたことがあるか？」と真顔で聞かれて、

「うん。ちょっとだけ」と上の空で答えた。

しかし、ニーチェとは難しく出たもんだな」との冷やかしかしてであつた。

ともかく、千代には「ただ靴の踵の音高く大股で正しい姿勢で歩くその印象がカルシユ先生の全存在を示唆している」とように思われた。

実は、両親が高校生相手に下宿屋を営んでいた当時の小学生で、永く春日郵便局長であった前田俊明の家に、カルシユ自筆のニーチェの言葉が色紙に毛筆で残っている。一九三六年（昭和十一年）三月四日付けの書である。俳人の父貞明の遺品である。湖畔の夕映えで一部語ったことであるが、当時、前田宅に十三期理乙の石倉愧が下宿していた縁でカルシユが訪れた。その当時に、生徒たちを念頭に、前田貞明に託したものであつたという。



教官室でのカルシユ博士

汝の心から 葵雄の氣を失うことなかれ。

《奈高き大望》を汝の胸に抱き続けよ。

これが筆者によるその翻訳である。

九

《先生と生徒の情熱》生徒の手記をもとに、当時の様子を再現してみた。

久しぶりに早めに帰宅し、夕食後にぼんやり昔のことを思い出していた。毎日忙しくて、普段は決して思い出したことがなかったことが脳裏をかすめた。

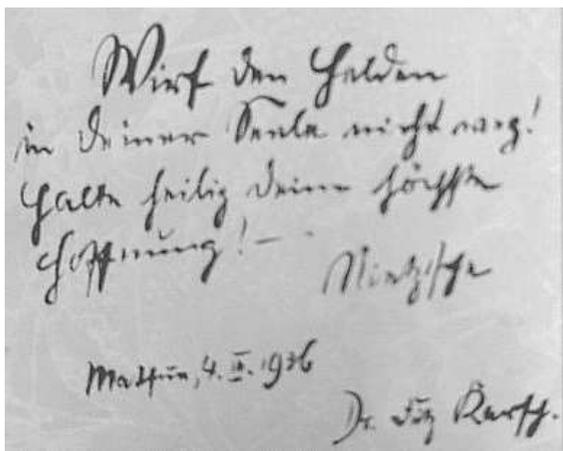
平成に世が変わった頃、久しぶりに岡崎、森山、白石らと会った時のことだ。

そのときに、ドイツ語担当の胡麻塩頭の小林教授をみんなで話題にした。

高校生の頃、よくわけの分からないことに対して、本格的な学問とは思えないような、単純なことを繰り返し行なったエネルギーは一体何だっただろうと社会人になってから、よく考えたものだ。

が、もしかしたら、あの一途で頑固な小林教授の行動のあたりにそのヒントがあるのかも知れない。

カルシュ博士



カルシュ博士自筆・毛筆によるニーチエの言葉  
松江在住の前田俊明所蔵

その訳ではだめだ」

順番に進められる我々のドイツ語の解釈が小林の主な授業内容だ。しかし、時には彼にも適当な日本語が見つかからない。

カーン」

身が教壇にあることを忘れ、長考することがよくある。

あとで念のため、カルシキさんに聞こう。カルシキさんがいて、我々は本当に助かる」というわけだ。

とにかく、小林先生はユニークな教授だったな」

ドイツ語の音読は快適だったが、訳すときの日本語がうるさかった」

「不的とか一性」は一切使わない」

そういえば、彼、彼女」もだめで、頑固に その人」と言い続けたな」

「わば、信念のひとだったな」

「出をよじ下る」、荷物を積み下ろす」などが

考えた末に出てくる訳語であったな」

そんな、訳語はな、君、愚にもつかない 悪訳」だ」

と嫌なものには吐き棄てるように、そう生徒にぶつけた。何せ迫力があつた。

それにしても、副保証人でよく面倒見て貰つたな」

と森山が言った。生徒の生活や学習の指導をしてくれる親父のような存在が副保証人だ。

いつものまとめ役の白石が補つた。

そういえば、森山、高田、岡崎らと先生のお宅に押しかけたな」

すると、愛想良く

よくきたな。さあやりましょう、酒を飲んだ人間に悪人はいないよ」

と小林が酒をすすめてくれた。これが普通だったから、驚きだった。

「しかし、あの姿はまさに、大人であつたな」

とアリストテレス哲学の好きな岡崎が最後に言った。

十

**乗客** ドイツから学生が日本に尋ねてきた。大学生だ。

ドイツ学術交流会から派遣されたと聞く。

今、ドイツから交換学生が東京に来ていて、その中の一人が松江に来るから、話に来ないか」

毎日ドイツ語を学んでいる十三期理乙の遠藤らへのお誘いがカルシュ先生からあつた。

「つか聞いたぞ」

何を？」

「こういうときは、奥さんに花束をもって行くんだ。本でもよんだことがある」

やじ馬根性もあつたが、習つたドイツ語を使うよい機会とばかり、遠藤らいつもの連中が先生のお宅に集まつた。

はじめまして」

日本の習慣だ。手みやげに近所で買ったお菓子をカルシュ夫人に手わたす。

花束のことは、すっかり忘れていた。



同僚 カルシュ、小松、小林、藤野、原田

「ハンスです。ミュンヘンからきました」

「よろしく」

一応、和気藹々である。

まずは、シチューのような、ソーセージとポテトのスープ。それにポテトフリッター。これは先生が自ら料理したのだ。次に、テーブルにはザウアークラウト、それにポテトを添えた、どこから手に入れたのかアイスバインが出てきた。冷えて脂肪が白く固まって氷のように見える肉料理だ。

だからアイスという名がつく。

ある時、ドイツのスーパーマーケットで筆者がそのような説明を食肉売場の店員から受けたことがある。調査に協力してくれた筆者の四十年來の友人のアンドレアス・シュティーフ (Andreas Stief) と一緒に買い物したときの話である。

さらにサラダが運ばれた。すごいごちそうだ。

先生の首頭で

「ワーム ヴォール！」

乾杯だ。ドイツから届いたモーゼルワインを飲み干した。

料理を口に運び舌鼓。ついにハンスの故郷のバイエルン料理の話になった。

「ヴァイス・ヴルスト 白ソーセージ」はすごいんだぞ。見たことあるか？」

と遠藤らにわざわざいった。

「うん、うん」

「ちょっと気の毒に思いながら、傍らでフリッツが頷きながら聞いている。」

「とてもおいしいんだ。でも、すぐに食べないとだめなんだぞ」

「作ってから二十四時間を越えると、本来の味は保たれないんだ」

と遠藤らに向かって得意気に滔々としやべる。そう言われても知らないし、何のことか分からない。こちらは高校生。年齢から言えば、こちらの方が上の者もいるのに、とにかく、そのドイツの学生は威張って、シャクにさわる。

「くそっ」

「ついに、ライダーって知ってるか？」

ときた。自慢顔に、彼は、ライダーで遊ぶ話を始めた。

「発進の時はどうするか知ってるか？」

「オートバイの後輪に、ドラムを着けて、それに綱を引っ張らせるんだ」と言う。



カルシュの家族と高校生

おまえら、人力で引っ張ると思ってたらう」

こんな田舎の松江では、グライダーを見たことはない。でも、月刊の航空雑誌には、グライダーで遊んでいる記事や写真が載っている。『そう思った遠藤は

日本では、自動車の一方の後輪にドラムを着けて、地面から浮かせて、それで発進させている。その方が安定感もあり、工作もし易いはずだ」

下手なドイツ語で、それを言うのだが、先方にはそれが理解できない。

ところで、奴めは自動車の車軸に差動装置のあることですら知らないらしいぞ」

俺は、中学一年の時に、模型を見たことがある。そんなことは雑誌にも出ていた」

と傍の友達も言った。この論争？を見かねて、というか、聞きかねてというか、カルシユ先生が中に入って

遠藤らの言うこと、もつともだ」と言って、ドイツの学生に説明した。

わかりました。ヘルドクター」で落着である。

先生が科学的な知識もあり、哲学にも詳しい、と聞いていたが、なるほどと思った。

「エー先生は科学にも詳しいんだ」

でも、専門の倫理学や哲学の知識にはなかなか触れる機会がないな」

休み時間に誰かが、

カルシユ先生と呼ぶよりも、ヘルドクター、と呼んだ方が喜ばれるゾ」

と言っていた。

でも、誰かがそう言っているのを聞いたことはないし、自ら言ったこともない。

## 文化の窓

—

カルシュからヨーロッパのことを聞くのが、楽しみであった。自由課題の宿題があっても試験がない気楽な授業であった。宮田正信もそう語っていた。それとは別に、酒井勝郎著の『カルシュ先生』から引用してみよう。

.....

ある日の授業のこと。西洋と東洋を比較した話になった。西洋人と東洋人の思考、理論の進め方の間に、大変な違いがある。そうカルシュ博士が率直に感想を洩らした。

西洋人の場合は、ある目標を立てて、用意周到に誤りなく理論を一步一步と積み重ねて、長い年月をかけて進めて、それに到達する。これを評してシュトゥーフエンヴァイゼ（段階的）と言おう。ところで東洋人の場合、伝説等によく見るが、途中の理論の段階を素通りして、いきなり結論に到達する。これをシュプリングスヴァイゼ（飛躍的）という。要するにこれは東洋人が瞑想的で直観力に勝れているということによるが、瞠目に値することで、西洋人の驚嘆するところである。

またある日生徒が先生の顔色を窺いながら要求した。

ビッテ シュプリッツヘンズイウンスフォンデアフィロソフィー

（どうか我々に哲学について話して下さい）

カルシュ博士

カルシュが哲学専攻の偉い人だと誰かが聞いての、この要求だったのだが、これがクラス全員のもので受け取った先生の顔には、喜色があつた。早速、黒板の文が書きかえられて、まず、次のように書いた。

フィロソフィー イスト ツー デンケン ヴァスダスレーベン イスト

（哲学は人生とは何ぞやと考えることである）

そして、これを読みあげて、説明した。これが哲学の入門のようだ。それから次に、

ヴァス イスト ダス レーベン？ 大生とは何ぞや？

と一歩進んだ。まさにシュトゥーフエンヴァイゼだ。この文も一語ずつ発音して説明し、少々具体的な例話もあつたので、みんなは了解した。そこで次に移った。

ヴァス イスト ダス ダーザイン？ 存在とは何ぞや？

こうなったら誰にもこの答はないわけで、哲学とは？という我々の質問に対してはこれで余す所がなかった。

先生はここで、

ダス イスト アレス（これですべてだ）

と言って、チョークを投げたというわけであった。

次の話はカルシュが来日した一九六八年（昭和四十三年）に綴った『濳友』九号の原稿より引用した

ものである。

酒井より一学年下の六期文乙で、実業界だけでなく学界でも活躍した奥（大橋）貴雄は次のように言っている。

カルシユ先生は、まことに人なつくく、親切な哲学者だった。毎日のように先生から三年の間、ドイツ語の授業を受けてきた。教科書としてとくにレクラム文庫の哲学書を採用した講義であったことを記憶している。現象学派に属するハルトマンの哲学が、その本に書かれていたのを思い起こす。

先生の教壇に立つ姿が目に浮かぶ。次いで、黒板にいろいろ書いてドイツ文学の興味深い説明が行われたことが思い出される。それに、通勤のときの自転車も思い出深い。何しろどこへも一緒の愛用の分身のようであった。先生の住居であった、花の咲き乱れる奥谷の官舎の姿などはいまも、まぶたの裏にありあ



校舎から 松江高校六期生（澤田弘夫の提供）



カルシユ父娘と生徒たち（校庭にて）  
背後の建物は学生寮

カルシユ博士

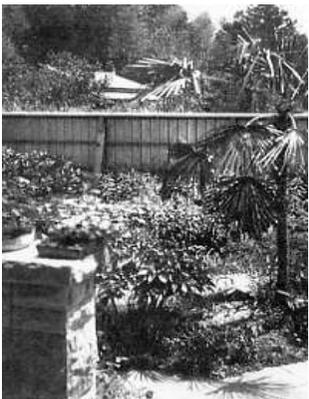
りと浮かんでくる。

とにかく、先生の諸々の言動が、高校生の間形成に影響を及ぼしたことは、間違いのないことである。《

という。それほど、生徒達に大きな精神的影響を及ぼしてきた。とにかく、現今の教育に携わる人に欠けている何かを教えてくれる大きな教育者であったことに相違ない。

二

ドイツ語の講義への思いを九期文乙の仲間が語っている。中学とは大違いの授業。それに外国人から直接教わる学科目のドイツ語には特別の想いがあったようだ。高校は自由の学園で特に文科では語学以外は合格点だけとっておけばよく、充分な余暇をもてる良い学校だったと感想を述べている。それゆえ彼らはドイツ語だけは前夜に必ず復習して予習もしたとのことである。



奥谷町官舎の庭 1927年頃

座談会では

「心に勉強したよ」

の声が聞かれた。なかには、

ちつとも ……」

もいたようだ。

藤野、高島の音読、カルシユの会話と歌はとくに思い出深い。しかし、藤野の文法は一時間に二十頁のスピード講義で、ついでいくのに楽ではなかったとのことである。

ABCの発音さえもできない我々に、何と高島、小林、藤野、高橋の四人の先生とカルシユ先生らによって、毎日三時間ペースで鍛えられたドイツ語は大変なものだった」

おにかく、ドイツ語だけは熱心にやったよ」と繰り返した。

その間 デンケン ウント レーベン 思考と人生』でドイツ的な生き方を学ぶ毎日であったようだ。文法のテストについて、今ではドイツでも使わない『ゲゲ文字』で直して返してくれた藤野の情熱には胸うつものがあった。

白石が言う。

ドイツ語が大事だとはよく知っていたが「学期はいつも落第点ばかり、しかも放課後はランニングの猛練習で疲れる。その上に夜はストームや活動写真を見に行く『活見』に費やして明らかに勉強不足

カルシユ博士

だった」

彼の言葉があたりによく響く。

二、三学期は大慌てで友達に試験の『マ』をかけてもらって、ギリギリの及第点に辿りついたのが実情であった。ただ高島のドイツ語の時間は劣等生なりに面白く楽しかった」

高田が語る。

何といってもカルシユ先生だ。授業前の点呼で 『サヒ、アダチ、イシワラ、イジユミ、イジユイン……』を思い出すね」

辻が言いにくかったようで 『ヂ』と発音したのではないかな」というように、みんなで相槌をうち、当時を思い出した。

下の写真は九期生が卒業直前の一九三二年（昭和七年）二月末、授業のあと教卓の上でカルシユが書いたものである。自署の下のラテン語の文章はドイツの古い学生歌だ。これを指さしつつ意味を説明した先生のフンフンという鼻声が耳底から蘇ってくる。みんなにはそんな思い出がある。これは Wilhelm Meyer-Fröster のアルトハイデルベルクの第二幕第九場で学生が合唱する歓喜の歌で、ガウデアームスの歌詞である。宮田がにこやかに、眼鏡の縁を抑えながら筆者に語ってくれた。



学内でのひととき 1935年頃  
高台の学生寮からみた構内

次は九期生が一年生の時の一九二九年（昭和四年）、秋恒例の弁論大会の思い出である。

「そういえば、ドイツ語は高田がよくできたな」

白石がしみじみと言う。

「あいつの勉強ときたら全く驚きだったな」

「俺たちが一年生の時の学内弁論大会は、まったくまげたものだったよ」

岡崎がっられてそう言った。

「ドイツ語で演説したよな」

宮田がまた眼鏡の縁を押さえながらゆっくりと語る。

「そう言えば、あいつときたら、新聞の社説に出た『階級闘争の弊害』を翻訳してたな」

そして、一応できたものを小林先生に見せたんだ」

「そしたら『無茶な奴だな。おまえ。しかし、やるじゃないか』といわれたと、奴がちよつと自慢げに言ってたよ」

「真っ赤っか、だったな。全面的に訂正されていた」

カルシュ博士

でも、嬉しそだったぜ」

とにかく全部暗記して、高田は恒例の大会で

「*ラルシユ*、*フォン*、*クラッセンキャンプ*」と翻訳の題名で演壇に立った。

クラス全員、彼の度胸に驚き、同時にその実力に感心した。

「大した心臓だったな」

「いまさらの如く三人は、今は亡き彼を想った。」

「彼が学校中の聴衆を相手に声高らかに語るのを、*カルシユ*先生が微笑みながら聴いていた。ときどき

「ウン、ウン」

と二度頷く。

演説が終わった。満場が拍手喝采だ。すると、*カルシユ*先生が壇上に進み出て

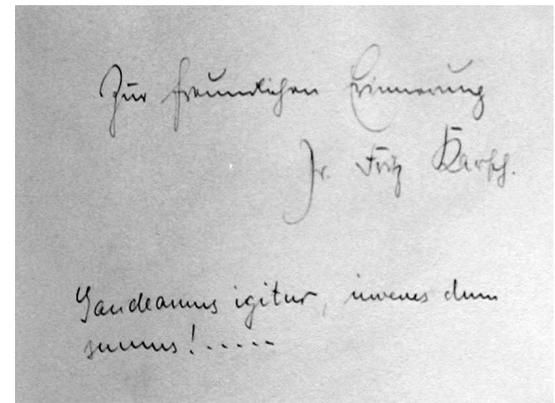
「*シェーネ*、*レーデ*、*ゲマハト*、土手に話せたね」

「と言いながら、喜色満面に浮かべて高田と握手をした。

「いま彼が元気ならなあ！」



1927年12月4日に行われた  
松江高校弁論大会



カルシュ自筆のラテン語文の一節  
松江高校九期文乙卒業記念アルバムより（宮田の

やっぱり、あいつは政治家に向いていたのだなあ！」

彼は戦後に衆議院議員として活躍した。

「二年生のくせにドイツ語で演説するんだから、驚いた奴だよ」

「そんなこともあったな」

しみじみと人生の原点を想う三人であった。

どれもこれも、みんな大事な宝だ。

でも、あいつはもうこの世にいないんだな」

同盟休校のあとのカルシュ先生の授業を想い出す中で、友のありし日の姿を思い浮かべた。

同級生の宮田正信がカルシュの肉筆による Zur

Erinnerung 思い出によせて」を題としたアルバムの表紙の写真を示し、白石・とともに高田富之の  
ことや当時の高校生活を語ってくれた。このアルバムには思い出がぎっしり詰まっている。

#### 四

カルシュ博士

カルシュを通して、生徒と外国との接触について見てみよう。

カルシュ先生と云えば、大柄の福々しい、中年の外国人を思い浮かべる。遠藤捨雄の兄は、松江高校の第一期生で、よく騒いだ連中の一人だった。ドイツ人の先生が嫌いというからには、プラーゲ先生のことであろうか。彼をわざと怒らしたりして、授業の進行を遅らせた話を聞いていた。ソナナわけで、一体どんなドイツ人が現れるのか、大いに興味をもって、最初の授業を待ち受けていた。

ドアを開けて入って来たのが、他の先生と同様に、広い袖に朱色の長い紐のついた、黒い大きいガウンを着た大男であった。ニコニコしながら、大股で、窓の所まで歩いて、

ダス イスト アイン フェンスター」

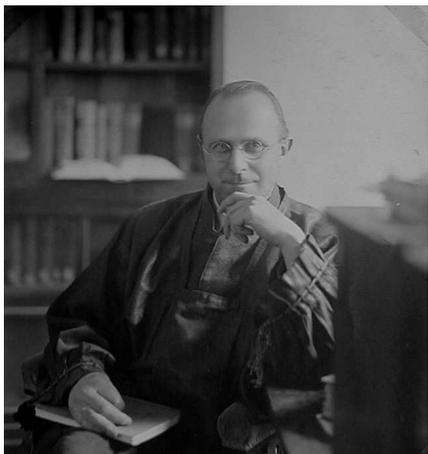
と言ったのが、授業の始まりだったことを思い出す。大正初めの欧州大戦では、大尉で従軍したという噂を聞いて、さもありなと思った程の体格の良い人であった。

奥谷の家へ遊びに来ないかと言われたのか、勝手に押し掛けたのかは忘れたが、とにかく数人の者が、時々、先生の家に押しかけたものだ。そんなことがあった前日のこと、

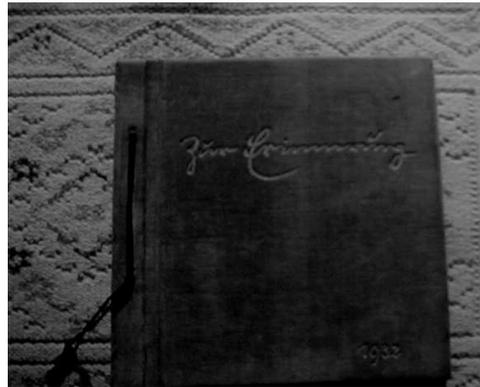
今日は遠藤君たちが来るよ」

と父フリッツが言ったのを、脇で聞いていた娘のメヒテルトが

《エンド——エンドマメ——豌豆——遠藤、妙な名前だな》



教務室でのカルシュ博士



カルシュ自筆ほ表題が刻まれている  
九期文乙 宮田正信の提供

と思ったとのことである。後述するが、このことをメヒテルトが五十年も経って再会した時に思い出したのだ。

また、ある時には、カメラの趣味を通じた親密さが先生と遠藤の間にあったので、ドイツからの交換学生の中の一人が松江に来たときにカルシュが自宅に誘ってくれた。よい機会とばかり、何時もの連中の何人かが先生の家に集まった。先方は大学生、こちらは高校生。その学生は威張りたがって、シャクにさわる。何かと自分の知識をひけらかして自慢する。不自由なドイツ語で、負けずに言うのだが、如何せん、ドイツ語では太刀打ちできない。先方にはこのことが理解できない。こんな時にも、先生は公平でドイツの学生に説明したことがある。そんな先生はみんなに慕われた。これについては前にも述べた。

遠藤は一九四四年（昭和十九年）に戦地から戻って、陸軍航空燃料工場に配属させられ、ここで、先の大戦でドイツがやったという木材の糖化を日本でも行うことになった。どの文献を見ても、二つの方法が数行載っているだけだった。基礎実験が終わって、テストプラントを行うための鉛一トンが既に底をついたのを思い出す。こんな中で、

「カルシュ先生は、先の大戦では、どんな仕事をしていたのか」

と仕事の合間に考えたりしたものだったと、京都の自宅で語ってくれた。

ここにも、カルシュ博士の生徒との師弟関係がよく窺える。

## 五

カルシュ博士

六期理乙の増田義哉が九十四歳の高齢にありながら、博多の駅前で食事をしながら筆者に諸々の事柄を語ってくれた。

彼とカルシュとの初対面は、一九二六年（大正十五年）四月松江高校に入学して間もなく、初めて外国人講師の講義を受ける様になったときである。ドイツ語は、その時まで、一度も聞いたことがなく、その発音、抑揚、文字等すべてが全く新鮮で、印象深いものがあった。大学を卒業したばかりの若い日本人のドイツ語講師からドイツ語を初めて習った時のことである。いきなりドイツ文字で黒板に書いたので、全く解らなかつた。

そこで、

「ローマ字で書いて下さい」

と頼んだところが

「何言ってるんだい」

と叱られた後だけに、カルシュが、髭文字とは異なるローマ字でドイツ語の講義を始めたのには、皆が驚いて、彼の優しさをしみじみ感じたものだ。先生は偉丈夫であったが、やさしい口調で、丁寧に解かり易く、ゆっくりとした講義をしてくれた。凹んだ眼で髭剃り跡の青い顔が印象的で、背の高い先生の前の机が、妙に小さく見えた。如何にして、難しいドイツ語を、初心者に解からせるか、苦心していた。我々の要求を容れて、よくローレライの歌を、独特の美声で何度も歌ってくれたのも忘れることができない。

ところがその様な先生に対して、理由は思い出せないが、ある時、突然授業のボイコット事件が起こ

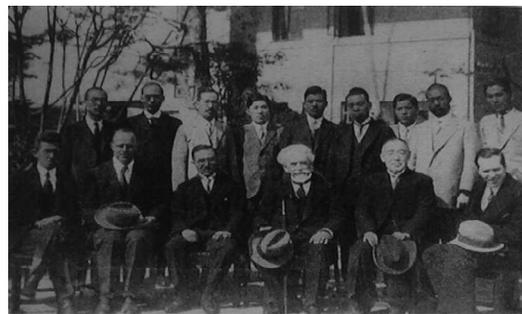
った。

しかしその時先生は、少しも慌てず騒がず、高島主任教授を呼んで来て、無事に事件を解決した。温厚で真面目な先生に一時的にせよ大変な迷惑をかけたことを、今にして深く反省している。

その後、松江高校を卒業して、一九三二年（昭和六年）九州帝大医学部三年生の時、カルシュに、偶然に会うことになった。それは日本眼科学会百周年記念誌第二巻二二八頁に、写真と共に記載されている通りである。当時、世界的に有名なドイツの眼科学者でカルシュ夫人の伯父のアクセンフェルト教授が日本眼科学総会に招待されて、日本各地で巡回講演した折に、九州帝大医学部にも寄る機会があったからである。

その時カルシュ博士は、松江から岡山に出て、アクセンフェルト教授一行に合流して一緒に福岡に来た。増田は、九州帝大の眼科講堂の後方から、カルシュを懐かしく眺めたが、その時親しく話することは時間の都合があつてできなかった。その時の模様が記念誌に次の如く記載されている。

　　明くる四月二十三日の夜、九大庄司教授は、日原医学部長、今井助教授、熊本の高安ら数氏と、アクセンフェルト父子とカルシュを博多駅に迎えた。宿舎は福岡唯一の共進亭であつた。二十四日は午前中、病理学の中山教授が考古学の権威でもあつたので、太宰府、



1930年4月20日岡山医科大学にて 前列左より  
2番目がカルシュ博士、4番目がアクセンフェルト教授  
日本眼科学会百周年記念誌第二巻より

都府楼、観世音寺などの史蹟を案内した。昼食後、日原学部長の案内で、松浦総長を訪れ、眼科教室の中庭で医局員全員と記念撮影を行った》

残念なことには、九州帝大眼科医局での写真が見当たらず、岡山大学眼科医局での写真を借用した。ちなみにこの話は二〇〇二年（平成十三年）五月二十九日九十三歳六ヶ月のときの書簡と直接に博多で増田と対面したときの会話を元にしてまとめたものである。

## 自然と神々

一

一九三九年（昭和十四年）、契約任期が満ちて帰国することになった。フリッツは松江に来た動機とこの地の印象を日本を去る前に回想的に次のように語っている。

松江で過ごした歳月と同僚の先生や生徒達との触れ合いは、何にも替えがたい、素晴らしいものであった。「このなかで、たぐい稀れな美しい風景に数多く接することができた」

彼がこの地で経験したものは、価値の多様性、神々との調和、そして、それらを具現する日本固有の風習と風光の美しさである。

松江はドイツと異なり湿気の強い土地柄である。ドイツ人にはやや馴染めない気候であった。街並みは、ドイツやその近隣とは趣の全く異なる柔らかな雰囲気のたたずまいである。千鳥破風の松江城には何度も登城し、写真も残した。夏には蚊柱がお堀端に、霞のようにたつのが珍しかった。冬はドイツとは趣を異にする足にまとわりつく湿った雪の風情に心を奪われた。春には美しく咲く桜の微笑みに誘われ、秋は目の覚めるような紅葉に惹かれて近隣の山々を訪ねては、感受性の高い高校生らとともに季節の変化を心ゆくまで楽しんだ。

それに彼は幾度となく枕木山や朝日山の頂上に一人佇んでは夕日に映える陸と海とを瞰望した。

「この出雲の国の老木鬱蒼たる神社仏閣の美しさ：海―入江―島嶼…さては遙かに淡く輝く隠岐

カルシュ博士

の国の山々を配して青く透き通った日本海の美しさ。それはもう、何にも例えようのない美しいものなのです」

当時の松江高校の純真で高潔な生徒たちに、語りかけたことをカルシュは思い出していた。

「こんな風光明媚な地で勉強できる諸君は幸せである」

山と海とのかくもみごとに融合している自然を他に見たことがない。それは松島、天ノ橋立、宮島のような日本の名所奇勝のことをいっているのではなく、自分の眼前に彷彿するのは、例えば、大山と三瓶山との間の景色のあまりにも知られなさ過ぎる美しさなのです」

ドイツの友達に一度でよいからその絶景を見せてやりたい。そう思ったことが何度となくあったのです」

それが彼の日本の自然の美しさに対する認識であった。

写真は枕木山から見た、離れて浮かぶ江島と大根島である。カルシュはこの光景をバステル画として残している。

ドイツには、美しいところがないのですか？」

という生徒の質問に、

「やとんでもない。それは、それは美しい国です。でも、日本の美しさとは違うのです」と言い、



枕木山から展望した江島(左)と大根島(右)  
弓ヶ浜の向こうに大山が見える

「この美しさは実際もっと有名になるだけの値打ちがある、世界に誇るべき美しさである」と強調した。

次頁の上段の写真は朝日山から望んだ光景で、中段はそこから眺めた出雲の海岸である。この海岸は出入りが多く西は日御崎、東は地蔵崎まで続き、この美しさの拡がりやカルシユも娘のメヒテルトも心に留めている。そして、下段は日御碕の思い出深い灯台である。カルシユは一九六九年（昭和四十四年）に出雲大社を参拝した折に、立ち寄る希望を抱いていたが、体力のこともあって断念した。

「この風光こそ神々と緩やかな関係で日常の生活に結びついた日本人の美的感覚の二面である」さらに、

「神教にこだわる欧米の文化の窮屈さに比べたらなんとも無節操に見えるが、実は、礼儀正しく、慎みやかで、おらかな精神性を重んじている」との想いである。

前任のドイツ人講師のプラードが

多神教は非文明を意味している」と言ったのとは対照的であった。

カルシユが、松江にやってきたのは、国内に定職がなかったことと後に東京大学の哲学科教授になった親友の長屋喜一からの誘いがあったからであった。このことはすでに述べた。

二、三年で帰るはずが十四年間もどまり、松江は第二の故郷になった。

第一次大戦で目の当たりした悲惨な世界を胸に、自らの学問の方向を自然科学から宗教哲学に変え、生活の糧を求めて、日本に渡ってきたカルシユにとって、ハーンの著書で知った東洋の神秘と、ヨーロ

ッパには存在しない価値の多様性をこの地で実際に経験したことは極めて重要なことであった。

彼が人智学を通して得た知識から真の哲学的認識に至るまでに、どれほどこれらから大きな影響を受けたかは推測（はか）り知れない。というのは彼の残した古代から当時までの人の認識の推移との関連が膨大な未整理の書類に見出せるからである。

生徒との対話では、自分の学問的立場をふまえて西洋と東洋の文化の洞察的比較を出雲地方のそれを通して行っている。日本での体験は松江の街や近隣にも及び、それらの変貌をも目撃してきた。新しく出来たきれいな橋を渡ったり、美しい街路を見たりすると、十四年前の松江の面影はもう認められないとその感慨を述べている。しかし、新しい物を喜び受け入れながらも、伝統的な物に対していつも敬虔

であり、祖先から伝わった歴史的な遺産をも重んずるといふのは、国民の品格が深遠である証拠だと、断言したこともあった。

そして、この出雲地方には仮象の世界、それに近



朝日山からの日本海の眺望 眼下は恵雲漁港



朝日山より出雲海岸を展望する



づく一体化の精神の高まりと静かな調和の世界があることを知った。ヨーロッパで欠けているのは、この点であると、恩師ハルトマンだけでなく、シュタイナーと同様の視点から指摘した。それゆえに、青木繁の描いた強烈な仮像の世界に彼自身が引き付けられることになったのだ。た。

ところで、彼と大山との関係は特別なもので大山の神秘性は彼の思想とは決して無縁ではなかったし、日本での生活と自分の学問の源泉とも言うべきものであった。これから受けた影響と大きな人間観が生徒や娘たちにも受け継いでもらうことができた。

近隣の佐太神社や出雲大社、神魂神社、そして神々と共生する人々には特別の印象があった。興味を抱いた神話にも、自然のなかで古来の諸々の信仰の伝統のみならず、整理統合されてきた神々の全体の調和を見だし、やすらぎと美のエネルギーを見ながら、心の平安をこの地に見いだすことができた。神社の構えの内側は聖なる域であり、鳥居に佇む鳥が自由に羽ばたき、神々と人々を結ぶ。そんな上古の信仰や、近くの神社とその雰囲気、彼の 杳然観・人間観・歴史観」に、また自らの思索に直接的な影響を及ぼしたようである。

ドイツは繁栄を手にした、世界の強国であり、学問も芸術も世界をリードする国である。しかしそれは、人の幸福とか安らぎや充足感とは別のものであるとの感慨であった。

さらに秋に田圃道を歩いて農夫達が精出して働くさまを例に挙げ、日本の人々の勤勉さにドイツの人も学ばなければならないこととして触れているのは彼の謙虚な人生観を反映したものである。

## 友との別れ

一

祖国のドイツに帰国する日がいよいよ近づいてきた。日本で買集めた珍しい物の荷造りや帰国の準備が終わって、生徒からの送別会もあった。

日本を去るに当たって、正確を期するために、ドイツ語で来し方行く末、日本各地の風景や人柄の印象を自宅の書斎でしたためた。これで、日本ともお別れだ。子どもの教育も考えねばならない。松江を去るのは何とも寂しい気がする。子供達も近所の仲良しとお別れの小さなパーティを開いて、名残を惜しんだ。

同僚からの歓送会が催された。苦楽を共にした彼らと語り合った。このとき、何度も登った思い出深い千鳥城を象った掛け物が同僚から別れの記念に贈られた。その裏面に最も親しく交わった教職員の自筆の署名がなされている。高島喜市 独語)、小林松次郎 独語)、加藤恂二郎 法学・経済・独語)、山下佐平 心理・論理・独語)、原田和二郎 独語)、藤野義夫 独語)、高橋敬視 哲学・独語)、松原武夫 物理)ら同僚の名前がはつきりと読みとれ



ドイツ帰国に際して、同僚よりの寄せ書き 1939年春



山頂から 遠藤捨雄の提供

る。この時期には、加藤と山下はすでに退職しており、このためにおそらくわざわざ出向いてきたのであろう。

なお、後々までつきあいのあった松原はこの年の六月に退職している。カルシュが来日したときには、NHKのインタビュ―にも応じたし、メヒテルトが一九九〇年（平成二年）再来日の折りにも、高齢であったが面会を果たしている。松原の肉声がカルシュ父娘の声と共に筆者の手許に保存されている。

ところで、竹内紀代子がカルシュ一家の帰国の際に、名残を惜しみ、見送りに松江駅に出かけた。彼女は買って貰ったばかりのお気に入りのお気を入りの和服を着てでかけた。

すると、ドイツ語講師に赴任したばかりの大学卒業間もないハンス・シュヴァアルベ夫妻が、その和服がとても似合うのを見て、何とか譲ってくれるようにせがまれたことを語ってくれた。紀代子はとても困惑したが、結局は色々言い訳をして、譲り渡すことはなかったとのことである。

カルシュ博士

父フリッツの後任のシュヴァアルベ夫妻の話を書者から聞いたメヒテルトがふと、帰国間際のことを思い出した。一九三五年（昭和十年）以来ずっと飼っていた小熊に似た犬でベールヒェン（小ぐまの意味）を夫妻に譲ったことであった。大好きな犬との別れがつかかった。



貴国時 松江駅での見送り（1939年春）

写真に見られる松江駅での見送りでは、中央の幼児がフリーデルンで母エンメラの腕に抱かれている。この時二歳であった。この写真に写っている人については一部不明であるが、いずれ明らかにできればと思っている。右から藤野教授・小林トシ子・藤野の娘・高島キヨ子・？・カルシュ・高島夫人・メヒテルト・フリーデルン・エンメラ・中村 大笹（トキエ・短期間雇われていたが結核のため辞めた女性・高橋寛丈英語講師の夫人・それに、北堀町の掛け物屋の主人の井上である。カルシュ夫妻はお得意さんで、彼の店から沢山の品を購入してドイツにもち帰ったという。

## 大使館勤務

一

カルシュ博士



フリージャーより借用 横浜の自宅の前でのエンメラ

フリッツは、大使館付陸軍武官時代のオット(Eugen Ott)と親交があった。オットは友人であったフリッツと一緒に働けることを望んでいたようだ。フリッツは軍の内部にあって幸いにもナチスからは比較的毒されない職責にあった。カルシュ一家はこのころメヒテルトの教育の問題もあって、一九三九年(昭和十四年)の春に松江高校を離任し、アメリカ経由でドイツに戻り、予備役に入った。それから半年余の後、ポーランドの侵攻戦争が終わった頃、彼はベルリン防衛軍の司令官の許へ出頭命令を受けた。当時、駐日ドイツ大使に就任していたオットの要請もあって、彼は家族とともに日本に赴任する旨を言い渡された。そして、



横浜山手の住居の一室

東京のドイツ大使館付副武官

として、外交通過許可証をもって、ロシアと満州を經由して東京に赴任した。これより、すなわち一九四〇年(昭和十五年)から終戦までドイツ大使館に勤務することになった。当時の大使館は国会議事堂から道路を横切った位置にあり、空襲を受け一九四五年(昭和二十年)四月後半に焼失した。家族は同年五月前半に世田谷から軽井沢に疎開した。そして八月にラジオ放送を通じて昭和天皇の降伏宣言(玉音放送)を聞いたとのことであった。

東京着任にあたって横浜山手町にアメリカ人のフリージャー(Kraiger)から住居を借用した。横浜での生活は松江での生活とは異っていた。フリッツは毎日、ドイツ大使館に通勤した。ここでは、東条



クリスマスの飾り付け  
横浜の住居で

内閣時代の軍司令部の高官とも職務上しばしば接触していたようだ。彼は家族には一切その話をしなかったが、東京―ベルリン間の通信の暗号化とその解読を行っていたようだ。すなわち、軍事的諜報活動が任務であった。メヒテルトは当時の写真を幾つか保存していた。すべては枢軸国の間



ドイツ大使館付副武官として

の出来事で、もちろん家族はだれもそれに関与することはできなかった。横浜には一九四〇年(昭和十五年)春から一九四四年(昭和十九年)九月まで居住した。

その間にカルシュはゾルゲ事件に遭遇した。そしてオット大使は責任上更迭された。メヒテルト自身

は、東京ドイツ学園に通学し、ここで初めて公の教育を受けることができた。筆者も一九六九年（昭和四十四年）から一年間、後に大森に移った同じ東京ドイツ学園で日本人のための夕方コース（ Abendkurs ）でドイツ語を学習した。この学校は現在は横浜にある。横浜の借家は一九四五年（昭和二十年）春の大空襲で破壊された。そのころは、フリッツのかつての生徒であった十三期文乙の暉峻凌三の幹旋で東京世田谷区成城に大きな家を借用し、すでに半年近く住んでいた。暉峻凌三はカルシュと深い親交があつて、家族はベルリンに住んだこともあつたという。この住居は鮎澤巖の所有であつた。彼は、ハーバード、コロンビア両大学で社会学と国際労働法を学び、一九三三年（昭和八年）までILO本部の職員として、約十五年間勤務、その間ILO東京支局長を務めた。英語に堪能な知米人で平和主義者であつたので、戦後はGHQに重用され、占領期の対日労働政策の立案と施行に重要な役割を果たした。一九四五年（昭和二十年）に労働組合法の原案審議のために労務法制審議委員会事務局長として、GHQとの折衝にあつた。後に、中労委事務局長や中労委中立委員などを歴任した。

晩年は世界連邦建設同盟理事長として国連の強化に取り組んだ。彼は戦前にジュネーブの国際連盟日本代表であり、戦時中、彼は東京を離れ疎開していたので、フリッツがこの家を引き受けた。この家は和洋折衷の大きな家で、後部にテニス場があつた。

## 二

一九四五年（昭和二十年）五月に軽井沢の古い三階立ての別荘に前述のように移動疎開した。この家は当時、すでに老朽化して倒壊の危険に晒されていた。一九六八年（昭和四十三年）に、来日したときにはもはや存在しなかつたとメヒテルトが語ってくれた。この別荘から後にカルシュ夫妻と次女が帰



「軽井沢の最後の住居」  
フリッツ自筆のパステル画

国することになった。

ここ軽井沢で、東郷茂徳や来栖三郎とカルシュとの交流について、一部メヒテルトが証言している。駐独、駐ソ大使などを経て、開戦直前に東条内閣に外相として入閣し、開戦と終戦時の二度にわたり外務大臣を務めた東郷茂徳の妻はドイツ人エディット・オーデスで、娘の東郷イセとはメヒテルトと一緒に遊んだ仲であつたし、その思い出は尽きないという。当時、何とか対米戦争回避をと、野村吉三郎、来栖三郎両大使を支えていたのが東郷であつたという。

《ハル・ノート》の最後通牒から、意に反しての戦争突入は心苦しく、単独辞職も考えたが、結局思い留まり、開戦の日を迎えた。真珠湾攻撃が大使館員の不手際により、結果的に奇襲攻撃のそしりを受けることになり、一層苦悩を深めた。戦局が悪化し、東条内閣から小磯内閣になつても、徒らに時間を浪費するのみで解決策がなかった。この時期に貴族院議員になつていた東郷は、一九四五年（昭和二十年）三月に議会が閉会になると、空襲を避けて、軽井沢に疎開していた。このころにカルシュ家との付き合いがあつた。そして、自分の胸中をフリッツに語つたということがある。

Recall my father talking about the fact that Kurusu-san was sent on a supposed peace-mission to Washington while back in Tokyo the military leaders were planning the attack on Pearl Harbor.》

これがメヒテルトの生の言葉である。なお、来栖三郎の娘とも、この地で交流があつた旨を筆者に



皇太子時代の今上陛下とスウェーデン大使夫人との歓談（1953年）

語ってくれた。

このころこれらの人々と共通の友人であるゲルツ Marie-Anne (Gertrud) スウェーデン大使夫妻との交流があったとのことである。なお、戦後のことになるが、ゲルツ夫人と当時の明仁皇太子殿下（今上陛下）との写真がメヒテルトの手許に残っている。

メヒテルトがホルトン (Holton) とフロリダに住んでいた頃、ゲルツ夫人は二週間ほどそこに滞在した。その時、戦前からつき合っていたエリザベス・バイニング夫人との仲立ちから皇太子殿下と会って親しく語り合ったことをメヒテルトに話しながら、この写真を手渡したという。バイニング (Elisabeth Gray Vinning) 夫人は当時の皇太子殿下のかの有名な家庭教師であった人である。因みにゲルツ夫人には三人の子供があり、末娘は、戦中日本の奨学金を受けて学び、日本文化に詳しい、後の駐日ドイツ大使 (1966-1971) のフランツ・クラップフ (Franz Krampf) と結婚した。

三

太平洋戦争の開戦間際に、全権大使としてアメリカに着任した来栖三郎に当時の外務官僚の寺崎英成は「糸ズベルト大統領から直接昭和天皇に親書を渡すこと。天皇の口添えには軍部も反対できないはず」との提案をした。この時の寺崎英成と米国人妻グエン (Gwen Harold) の子「マリユ」の話はメヒテルトが一部知っているとのことであった。公的には開戦の当事者が、実は意に反した決定をせざるを得

なかった歴史がある。カルシュ博士周辺だけでも、善意の人々、平和主義者を巨大な歴史の力学がいかにかに苦しめたかを知ることができる。開戦と終戦という多難なときに外相を務め、平和を追求した東郷が戦犯として、拘禁中に病没したことは理不尽な気がするとのことであった。

ところで、小説『湖畔の夕映え』には間に合わず書けなかったが、十三期文乙生の暉峻凌三は、フリッツが最も愛した生徒のうちの一人であった。彼は東京帝国大学を卒業し、後に帝京大学教授として教育に尽力した。

彼の母の暉峻夫人は教養深いひとであったという。

ドイツ戦線でベルリンが陥落し、さらに五月になって、ドイツの降伏が報道された。

このとき、ドイツ人とのつき合いを避けるべく記事が新聞に載った。日本との連携が破れたからだ。

「ドイツも信用できない」

「何だ、イタリアと同じだ」

「ドイツ人などと付き合うものか」

そんなとき、暉峻の母が訪ねてきた。

「こんにちは、カルシュさん」

「ようこそ、暉峻さん」

エンメラが答えた。

すると、ライラックの花束をエンメラに手渡して

「メルリンはいまごろ、ライラックがともきれいでしたわね」

何とも思いやりのある短い美しい言葉であった。

ドイツの敗戦を期に、日本人との交際が急速に薄れたこの時期の暉峻夫人の優しさとその言葉を後年、メヒテルトが涙とともに語ってくれた。

フリッツは外交官であったので、戦後の日本では軽井沢での日常必需品、家具、敷物、本、日本美術品、個人所有物は、所有を許可されていた。しかし、他の裕福なドイツ人は家を失い財産は接収されたし、ドイツ人はこの時期に殆どこの地に残っていなかった。

## 戦後

一

一九四〇年（昭和十五年）から一九四七年（昭和二十二年）までの七年間は日本、ドイツはもとよりカルシュ一家にとっても、混乱の時期であった。フリッツは外交官であったので、戦後のカルシュ一家はドイツ強制送還までの期間を軽井沢で暮らしていたが、インフレーションのためにすべての金銭の蓄えを事実上失い、生活は困窮した。それでも、メヒテルトの稼ぎで二年間の生活をしのいだ。

メヒテルトは、国際戦争犯罪裁判 (International War Crime Trials) の 谷本語—ドイツ語—英語の通訳を務めた。その後、ニューヨークシティ銀行の東京支店で働いた。しかし、ドイツの将来に対する不安から両親との帰国を希望せず、アメリカ領事館にビザを申請した。ビザが下りたころは両親が帰国準備中であった。

この時期に米軍関係のアメリカ市民のホルトンから結婚の申し込みがあった。当時両親はメヒテルトを単身で放置することを望まなかったため、メヒテルトに結婚を勧めた。しかし、この結婚は失敗であった。なお前夫の実名の掲載許可を得ていなかったため、『湖畔の夕映え』ではジムという仮名を用いた。

一九四七年（昭和二十二年）八月十四日の帰国前夜にお

段増し加はる友情

お別れに降し只恋の

思ひ出のみ

は一歩上草。は移福と祈りつ

一九四七・八二四

軽井沢。ぼんやり  
老 日 鈴 江

親しくなった人との別れ

1947年8月14日

別れのパーティを催した。そのときの友人の吉田鈴江の訪問記録が残っている。敗戦後難民としてマールブルクへ帰るまでの様子を見てみよう。

……

日本もドイツも敗れた。何もかも失ったの帰国であった。軽井沢から横浜港へ、あの暑い真っ盛りに移動し、そこからアメリカの船で出発しナホトカに着いた。そして、そこからはシベリア鉄道であった。一九三七年（昭和十二年）に生まれたフリーデルンは十歳になっていた。学校で教育を受けることもなく、まさに戦争の犠牲者であった。

「これから、ドイツへ帰るんだよ」

「マティ、お姉ちゃんは？」

「おしごとがあるの」

昨日知人を交えてお別れの会をささやかに催した。あらためて戦争が何もかも奪ったことを思った。でも、みんなが元気なら」

「わたしはホルトンと結婚するわ」

「……」

「いまの仕事をやめてアメリカに渡ります」

わたしは連合国のために働いたわ。そしてシティバンクでもいわば、アメリカの兵隊のためにはたらいてきたわ。きっと、わたしの未来はアメリカにあるの。そんな気がするわ」

「アメリカにはいつ？」

「ビザが下りたらよ」

「マヒテルト、お父さんが日本にきたのは間違っていたのかな。こんなになるとは」

わたしには、松江がふるさとよ。ハイムマートよ。誰が何と言おうと、あの奥谷の官舎がわたしの家だったわ。思い出の一杯詰まった土地。何度もお城に登ったわね」

「いろいろなところに行ったね」

「エナちゃんはどうしたかな」

「戦時中アメリカに強制送還されたそうよ」

「近所のふみちゃんは？」

「話は尽きない。」

フリッツはまた夢をみた。あの大山の姿であった。夏に過ごした大山であった。生徒の顔が浮かんで消えた。遠い昔の出来事が夢のなかに現れては消えた。

「いや私は、何も失ってはいないんだ」

突然口を開いた。

今はすべてを失ったようだ。そう見えなくもない。でも、こんなに美しい体験を胸にして帰国するのだ」

「そうよ。お父さん」

「松江は戦災に遭わずにすんだらうか」

「そうね。どうしたかしら」

「エンメラが心配そうに言った。」

「二人の子供も授かって、いま故国に凱旋するのだ」

「フリッツはそう自分に言い聞かせた。」

## 二

一家は強制送還時になっても、ソ連の影響下に置かれたドレスデンを最終的な居住先としては選ぶとできなかった。

結果的に、一人になったメヒテルトは、ドイツ国籍を失った。後で知ったこととはいえ、筆者にその顛末を寂しそうに語っていた。

フリッツは、エンメラとの思い出の地、そして自分の生涯を決定する喜一との運命の出会いの地であり、自分の学問を育んだハルトマンとの出会いの地でもあるマールブルクを選んだ。

ここでは、カルシュ夫妻が戦前から信奉していた自由ヴァルドルフ学校の復興も予定されていた。シユタイナーの思想を基にした、戦時中には禁止されていた学校であった。

ブレーメンに着いた。ハンザ同盟の伝統を今に引き継ぐ千二百年の歴史をもつ古都である。

十九世紀はじめに整備された港湾に船が着いた。長い旅であった。屈曲した堀とヴェーゼル川に挟まれたその辺りが市街地である。広場には剣と楯をもつ街の守護神で中世の騎士ローラン像が立っている。

聖ペトリ大寺院が十五世紀のゴシック様式の市庁舎の隣にそびえている。その西門にはグリム童話の「ブレーメンの音楽隊」の像が立っている。

フリーデルンが一番下のロバの足に触れた。

「わー、つめたい」

四頭の動物を順に眺めて、ひとり無邪気によるこんでいる。

かつては煉瓦造りの美しい建物で満ちていたこの地は引揚者で溢れていた。いわば難民キャンプだ。もはやかつてのドイツ人の誇りはなかった。着の身着のままの惨めな生活であった。しばらくは、ここで暮らすことになった。

やがて、連合軍の指示とフリッツらの希望に沿って、カルシュ家一行はこの古都を離れ、ドイツ四大学街のひとつのマールブルクに向かった。

戦災にあって荒廃した街並みではあった。が、もともとドイツメルヘンのゆりかごとよばれるほどの美しい街である。

小高い丘にはお城が聳え、遠くからの眺めはしばし時の流れを忘れさせてくれる。  
そんな落ち着きのある街である。

「ここが私達が出会った街だよ、フリーデルン」  
きれいなまちね。グリム童話のふるさとね」

このヘッセン州は昔話や伝説の豊富な民話のふるさとである。

彼等は戦災を免れたアパートに入居した。アメリカのフォード財団の援助により、戦争で中断された若者の教育が始まっていた。その教育にフリッツが携わることがすでに決まっていた。これで家族の生計を維持することができる。



強制帰国後のカルシュ家が住んだ家

最初は例に漏れず生活に困窮していたが、成人教育に携わりながら家族の生活を維持していた。ヘッセン州内では、フリッツは日本やアジアに関する講演からの収入を生計の補助としていた。その内容は戦前の日本の生活、習慣、文化を眼前に彷彿させるもので、実に名講義であったという。

カルシュ博士

# 写真や絵画から蘇る

# 九十年前の出雲の地

出雲は運命の糸で結ばれた、  
人生そのものであった。

## 松江の街

一

カルシュ一家が暮らした松江およびその周辺を撮った写真が種々残っている。実際には、アメリカのメヒテルト宅やドイツのフリーデルン宅にあるアルバムに一、五〇〇枚を越える珍しい写真が整理されている。背景は今とはずいぶん異なるようだが、松江在住の人々や関係者が写真の撮影場所を一部、特定してくれた。

宍道湖岸の湿地帯の一寒村が、山陰・出雲の中心地となったのは、約四百年前の慶長年間に堀尾吉晴がこの地に築城してからである。吉晴はこの地を、中国の松江に似た環境から松江と名付けたと伝えられ、出雲・隠岐二カ国の城府と定めた。それゆえ、何と言っても、松江のシンボルは明治初年に破壊されずに残った天守閣と石垣である。これと併せて、松江市のほぼ中央に位置し、松江市街を南北に連絡する大橋川にかかる松江大橋である。この橋は



松江の街の一角



松江の街並み

白潟橋（または「秀ラカラ橋」）といわれていたこともある欄干（擬宝珠がついたもう一つの街のシンボルである）。

松江高校の記念祭（学園祭）の時には、ここ街なかに生徒達が繰り出した。カルシュは家族らと共に幾度となく街を散歩した。当時の日本の風俗をカメラに収めている。和服姿は夫婦ともに好んで、何枚か写真を残している。前頁上の写真に見えるのは駄菓子屋のようである。店の前の旗は、『湖畔の夕映え』にでてくるアイスクリンの旗であろうか。下段写真にはバケツを両手に下げて舗装されていない道路を歩く婦人が見られる。通りに面して店の前であろうか。荷車がおいてある。このころの松江の人々の生活が窺える。

本頁上段は大橋川に沿った街並であろうか。当時の民家の特徴が見えるようである。下段には当時の



大橋と新大橋の間 和多見町の町並

大橋川沿いの町並み



裁判所に面した通りと女学生

女学生と乗合バスが映っている。幅の広いネクタイからすると近所の家政女学校の生徒であろう。人の影からして道路は東西に走っているようだ。大きな松の木の茂みは裁判所の敷地であろう。そしてその前がバスの停留所であった。とすればその北隣には、ネクタイがひも状の制服の松江高等女学校があった。この学校は一九五五年（昭和三十年）に焼失した。男性の姿が印象



松操高等女学校 中林佳子の提供

的である。どんな職業の人であろうか。

ところで、上記写真は戦中の松操高等女学校である。現在、福山在住の中林佳子が在学中、学徒動員による呉海軍工廠での奉仕労働後、帰路八月十六日に広島で被爆した。彼女の提供による写真である。彼女はメヒテルトと同年齢で遊び友達であった。影踏みや石蹴りの遊びを行ったという。筆者の調査に関する新聞報道を眼にして、直接連絡をくれた人々のうちの一人である。しかし、松江に基盤をもたない筆者にはこれらのすべてを正確に確認できないでいる。

二

道路沿いに店の軒先が並んでいる。メヒテルトが豆腐屋にお使いに行ったことをよく覚えていてという。現在の松江石橋町である。そこは『石橋』と読める親柱の立つ街道であったという。下の写真にそれを見ることが出来る。松江城南に望んで東西に走るこの街道は、当時城下町から美保関方面に向かう重要な幹線道路であった。石橋のあった場所から路地を入った先に、井戸と地蔵の祠がある。枯れずに残っている水脈も大切にしている。もともと、奥谷川は昔は幅が広く深く、フナが泳いでいた。その昔は、船が米を運ぶ通路



石橋と書かれた碑が見られる石橋町

であった。この川に石でふたをしたのがこの橋で、欄干と親柱があったが、道路整備と川の暗渠化で今のようになった。親柱と片側に残る低い欄干と土台が橋の名残である。これが、かつて江戸時代の様相をそのまま残し職人町として栄えた石橋町の命名の由来である。

松江で育って今もここに住むカルシュ博士を良く知る竹原敏夫島根大学名誉教授の説明である。質屋、床屋、造り酒屋、お茶屋、下駄屋、醤油屋に、大工・左官、桶屋、……が戦前は街道をにぎわしていた。

藩主のご用を勤めた醤油屋 森山)と結婚したドイツ人のエミ (Emi) がいて、再来日時に知己を得たメヒテルトは現在も文通により親しいつき合いがあるという。この一帯はやがて住宅街へ変貌していったし、今では、にぎやかな昔とはすっかり様変わりしてしまった。しかし、この辺りの良質の水脈を用いた造り酒屋や醤油屋など、いまでも、その名残りがみられる。

### 三

フーン現象に見舞われた一九三二年 昭和六年) 五月十六日のこと、不運にも松江市街が大火に襲われた。この日の午後、末次本町松江大橋北詰の旅館から出火し、向島町まで延焼し、約十三軒、六二八戸を焼き尽くした。末次大火と呼



1931年5月の 大火 東本町付近

ばれる。炎は強い西風にあおられ、一気に広まった。黒煙が西風にたなびいている様子のはっきりわかる。写真の場所は、強風で、宍道湖面が揺らぎ、飛び火の連鎖が起こり、辺り一帯は見渡す限りの焼け野原になった。旧鍛冶町の至る所に火が回り、逃げるだけが精一杯で人々は着の身着のまま川沿いに集まっていた。

被災後に、この一帯は区画整理され。町名を東本町に改名した。城下町松江は『武者隠し』と呼ばれるジグザグで幅が狭い道路からなっていたので、延焼を防ぐために兵隊が家を取り壊したという話が伝わっている。この火災では、煙火が立ち込めた。これほどの大火にもかかわらず、死者が出なかったのは不思議なくらいであった。前頁の写真は大橋川をはさんで、東本町を向かい側から撮影したものである。黒煙のすさまじさがよくわかる。

ついでに言うなら、江戸時代初めから、松江はそれまでに十三回の大火に見舞われた。この近年では、一九二七年 昭和二年) に白潟 灘町) で大火があった。また、一九三七年 昭和十二年) 四月十四日には土手町から外中原町まで武家屋敷、町家二五二戸が全焼した。



(1) 東方の寝仏山を望む 背後は樂山の森、和久羅山と樂山



(2) 北東市街地を望む 眼下に北堀町、水田の向こうに旧制松江高校



(3) 西方の田園と山々を望む 黒田町方面で水田が広がっている

## 松江城から

一

松江の東、中海の近くに聳える標高三三〇<sup>だて</sup>の嵩山がある。嵩山は高い山を意味する山だ。今では、当時の松江高校のキャンパスに高層建築が立ち並んで視界を遮っているが、昔は周囲一面が田圃で、民家が少し在る、そんな程度であった。当時、校舎の東側からは、正面に見えたので、学生には身近な存在であった。

因みに同じ漢字を当てる嵩山（すうざん）が中国河南省洛陽の東にある。中国五嶽の一つの名山である。同名で鎌倉末期から南北朝時代にかけて活躍した臨済宗の僧がいる。一度中国（元）に渡り、後に南禅寺、円覚寺に住した。

彼は五山文学の代表的人物であり、著書に『嵩山集』二巻を残している。

それゆえ、松江高校の生徒にとってはこの山は崇高な精神的シンボルでもあった。この一帯は、現在は県立自然公園で、山頂からのパノラマは絶景である。小泉八雲も登った山である。生徒たちにとっては運動に勉強に励んだところ、青春のすべてを包んでくれた高校生活の象徴であった。



(4) 南西の市街地を望む 眼下に内中原町、煙の向こうに月照寺と天倫寺



(5) 南方を望む 宍道湖と大橋川を挟む市街地 宍道湖と嫁ヶ島を望む



(6) 広く見渡せる田園地帯と山々

これに  
ついては、  
後述する。  
とくに、そ  
の頃の学  
生寮であ  
る自習寮  
の丘から  
の見晴ら  
しはよく、  
和久羅山  
や樂山と  
ともに、そ  
の麓でみ  
んな思い  
思いの学  
園生活を  
していた。  
フリッ  
ツにとっ

でも、日本での生徒との交わりの象徴であった。この地を愛した彼は周辺の景色や建物を描くために、画紙集とパステルをもってよく散歩に出かけた。とくに、宍道湖と中海を結ぶ大橋川の袂や近くの神社では何時間も我を忘れて描画に没頭したものだ。



松江城をバックに高校生達

一九三九年（昭和十四年）以前の松江および周辺について標高約六十メートルに位置する松江城の天守閣から、松江市街地東部を望むと、頭を南に向けて仰向けに横たわる人に見える連山が大きく目に入る。乙女が仰向けに寝た姿に見立てて、昔から寝佛と呼んでいた。写真(1)がその姿を現している。生徒はロマンを託してメツチエン山と呼んでいた。それは、松江の人々の心に生きる大切なものであった。特にふもとの松江高校の生徒の純真な想いは、憧れと一緒に横たわった乙女の色香を賛美した。乙女を意味するドイツ語を生徒が使っていたことにそれが現れていた。実際には顔の部分が和久羅山（標高約二六〇メートル）、首から下が嵩山（約三三〇メートル）で、山頂付近が豊かな胸に例えた連山であり、単独で言うときは、嵩山で呼び、旧制松江高校同窓会が一九九〇年（平成二年）に発行した校史の題には「齋のふもと」というような呼び名が使われている。

もちろん、この連山は松江だけでなく、周囲の人々にも親しまれている。たとえば、鳥取県境港の漁師からは中海をばさんで「キューピー山」との愛称で呼ばれている。

松江城からの撮影によれば、現在とは異なり辺りは人家も少なくすっきりしていた。写真(2)は北東

市街地を望み、眼下に北堀町、水田の向こうに旧制松江高校が見える。大きな建物は母衣小学校である。写真(3)の建物は前述の松操高等女学校で現在の自治研修所である。天守閣の西方の田園と山々を望み、黒田町方面に水田の広がりを見る。

写真(4)は宍道湖に臨む街と工場の様子であろうか。眼下に内中原町、煙の向こうに月照寺と天倫寺が見える。写真(5)は宍道湖と大橋川を挟む南北市街地である。

これらのパノラマ写真はすべて、一九三六年(昭和十一年)五月五日に神戸にて自らの教え子の十四期理乙生の馬場長夫よりカルシユが入手した写真である。

我が師のカルシユ博士に捧げる『旨を添えた記録がある。カルシユが本人から神戸で特別に入手した思い出で深い松江城から撮影した誇張貴重なものであった。馬場は名古屋帝大の医学部を卒業し南方戦線に従軍、戦後は和歌山市で逝去した。

残念ながら、その詳細を説明できないが、松江の人々の協力でいつか詳細を解明できれば幸いである。そのためにも公共の手を借りカルシユ博士の残した遺産を一ヶ所に集め、検討することを改めて関係者に訴えたいと思っている。

## 二

カルシユは生徒達と連れだって、あるいはメヒテルとともに何度も松江城に登った。それとともに、人々の生活や街の様子を撮影した。

写真は松江城天守閣から見下ろした二の丸跡に近い広場であろう。最近まで松江郷土館があった場所である。ここでカルシユ博士ゆかりの資料をメヒテルトから借用することにより、二〇〇五年(平成十七年)四月に、松江市が企画した『松江を訪れた外国人たち』の展示会で、他の外国人とともに公式に紹介された。かねてから各方面にお願いしていたことであった。

ところで、これにさきがけて約束されていた、日独ベルリンセンターと日独協会の出版物『日独交流の懸け橋を築いた人々』のなかでは、森鷗外らとともに、三十人の功労者のうちの一人としてカルシユ博士が同年公式に取り上げられた。

次いで、城の石垣の様子が残っている。松江城の裏手にあたる北側と西側は内堀に面して石垣がなく、切岸になっている。軍事的・経済的事情があったのであろう。

さらに、次に載せた写真が松江城の櫓より見たお堀端の様子である。その向かいに見えるのは元勸業銀行で、後にこれが山陰放送局になった。現在はセンチユリービルが建っている。



松江城 二の丸跡広場



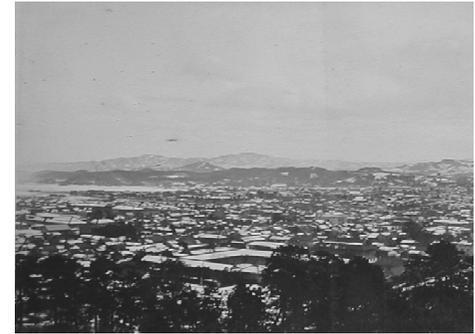
松江城 石垣跡

中段の写真は松江城から南東の城下の眺めである。ハーンが中学生と松江城から夕日を眺めたことの想いを胸に、フリッツ自身が何度も登城したときの一枚であろう。

下部は、当時としては珍しい航空写真で場所も特定できる。宍道湖―大橋川と京橋川の様子で埋め立てる前の末次湖岸である。松江―城崎間一六〇キロメートルに定期航空路が一九三三年（昭和八年）七月に開設されたことによる撮影であろう。この当時水上飛行機を使い、大いに話題となったが、一九三七年（昭和十二年）に廃止された。



松江城の櫓より見た大手前堀場と街並み



松江城から南東の城下の眺望



松江上空からの航空写真  
市街中心部 大橋川と宍道湖

## 山頂から

宍道湖と中海を抱えるように荒海の日本海に面して東西に広がる島根半島は、カルシュが日本の美しさに大きく感動したところである。彼は日本での印象の中で、枕木山や朝日山からの眺望だけでなく、出雲大社や日御神社とともに出雲三太社と佐陀川の左岸の佐太神社について触れたように、自然の美しさと神々の荘厳で静寂な佇まいが人々の心に働きかけるのを学問を通じた人生観と自然観だけでなく、自らの感性からも確信できる清らかで心休まる絶好の場所でもあった。

松江市に隣接する鹿島町の南端にあり、出雲風土記に記されている神々の宿る神名火山の朝日山の山頂からの眺めは絶景である。眼下に宍道湖、東は中海、大山、西に出雲平野を、それに北東には隠岐島を望むこともできる。

朝日山から望んだ日御碕から地蔵崎までの出雲の海岸は出入りが多く美しさの拡がりにはカルシュが折に触れて繰り返し語っていた光景であった。朝日山の山頂までは手すりを頼りに石段を登ると金宝山朝日寺に到着する。この寺は神龜年間、行基が十二面観音菩薩を安置した真言宗の霊場であり、神仏混淆の霊場としても広く信仰されてきたと伝えられている。朝日寺に参拝し、周囲を散策すると弘法大師の立像も見える。カルシュは、来日後の間もない頃からこの辺りの風景に感動し、家族ともどもこの絶景を味わいたいと思っていたが、エンメラは度重なる流産の悲哀にあって気落ちしていたし、メヒテルトの体調も今ひとつ思わしくなかったのだ、なかなか行動をとるにできなかつたようだ。そんなこともあって、カルシュはドイツ語で心おきなく話せる同僚の高島喜市教授を誘って



1935年11月28日 朝日山の頂上から見た松江の南西の風景 右手は三瓶山



1934年秋 枕木山上の華蔵寺

出掛けたという。

これとは別に枕木山の印象がメヒテルトから語られた。一九九〇年 平成二年に彼女が単身で再び来日した時に、父フリッツの追悼の意味もあって、旧制松江高校のかつての教え子らと一緒に枕木山に登ったときの忘れがたい思い出についてである。

松江の北東に位置する風光明媚な枕木山は陰陽道では、松江城の鬼門にあたる。この頂上を目指してメヒテルトら一行は左手に石壁を見ながら、ゆっくりと石畳を登った。頂上には華蔵寺けぞうじがあつて、そこでしばし休憩をとった。その近くにある大人の背丈ほどの雨ざらしの石像を改めて目をこらして見つけた。上の写真がその石像の一九三四年 昭和九年 当時のカルシュの撮影になるものであるが、遠い昔に自分と一緒に眺めながら父はこれをつめた。上の写真がその石像の一九三四年 昭和九年 当時のカルシュの撮影になるものであるが、遠い昔に自分と一緒に眺めながら父はこれを「Hotokesan」と呼んでいた。実際は、運慶の作とも伝えられる石造りの不動明王像（仁王像）で、仏法守護神として崖の上に鎮座し 大きさは日本でも有数のものであるという。それはさておき、カルシュは幾度となく枕木山頂上に立って、平和でのどかな印象深い陸と海の風景に見入ったことがあつた。その印象を松江高校離任時に生徒達にはつきりと語っているし、また自分の家族にも繰り返し語っていた。事実、松江を訪れたドイツの友人を必ずこの地に案内した。それがいつわりのない彼の日本の静寂で荘厳な自然の美しさと静寂さに対する認識であつた。その証として残したものの一つが同年秋に中海の畔の本庄村を枕木山から俯瞰したときカルシュが撮影した写真である。

## 樂山公園

旧制松江高校に近い松江市北部の西川津町に樂山がある。山と云うよりは丘のようなので樂山公園とも云われている。二代藩主の松平綱隆が江戸時代初期の寛文年間に、小高い丘をなす山を庭園に改造した。

別荘地として茶屋を設けたことから始まり、七代藩主の治郷の茶会もここで開かれた。弁天池を中心に自然林を通る散策路が整備されている。綱隆はこの地に天満宮や稲荷神社などを設け、境内は神域として管理していたが、祭りには一般の人々に開放した。

ここには、小泉八雲ゆかりの推恵神社すいけいがあり、お祭りは参道に茶屋、そば、甘酒などの店と人々で賑わったという。また、芝居小屋も設置されて役者が来演した。かつては、この地は松江高校の運動場としても使われていたという。現在の公園は市民のいこいの場である。

弁天池と呼ばれる池に群生する睡蓮は、自然に増えたもので、池の総面積の八割にわたって占めている。まわりをめぐる遊歩道は、落ち着いた雰囲気、初夏には次々と咲く花が池を覆いつくす。その様子を眺めては、カルシュは一人で楽しんだという。とくに、睡蓮のたたずまいを見て、自然に巨匠クロード・モネの絵画を思い浮かべたことである。というのは、宇宙の諸要素と眼前で常に移り変わる諸現象の関係を身近に感じることができからであった。それは描かれた睡蓮の世界が画風とともに、関心



1928年頃 樂山上の寺院

## 水辺

宍道湖は地殻変動による陥没湖であり、水質からいって汽水湖である。東西に長い矩形で、湖岸は単調である。生物の種類が中海とは異なり、シジミがたくさんとれる。

カルシュも幾度となくハーンが称えた宍道湖の精妙な色彩と夕陽が織りなす動静入り混じった芸術を眼にしており、ぼんどこ隠岐国賀海岸、和歌山雑賀崎、ばんどこ番所の鼻や軽井沢で見た夕日の美しさと共に、拙著『湖畔の夕映え』のモチーフになっている。

水面に映る雲が震えながらちぎれて、再び元に戻る様相を眺め、



中海の大海崎近辺でのそりこ舟



道路拡張工事以前の宍道湖と須衛都久神社

ユは生徒達に囲まれて、時にはやや哲学的な会話という。しかし、よもやま話がほとんどで、ドイツふうした気楽なおしゃべりが生徒の心の弾みを誘う。さくはしやぎながら散策を楽しんだことが、当  
伝えられている。



1928年頃 楽山の頂上付近



1928年頃 北に向かって楽山と嵩山付近

カルシュは自らが折に触れて収集している浮世絵に見られるような、東洋的な感覚が反映しているからであつたらう。  
思った。夜明けの開花と小雨に煙る睡蓮の様子は東洋的心情とモネの感性の共通性を理解できるカルシュの哲学者としての称賛の姿であつたという。  
ここは松江高校に近いこともあって、カルシをしたこともあつたと語の練習も兼ねていた。い、そして時にはややう時の生徒によって語り

のある世界の一部を描いて、全体を表わす浮世絵に見られるような、東洋的な感覚が反映しているからであつたらう。

自らを八雲と命名したハーンの松江における存在と自分自身の存在を重ねては、何度もその想いを巡らしたに違いない。

カルシュは一九二八年（昭和三年）当時、前頁のような、今では見られない風情のある美しい水辺の様子に感動しながら撮った大海崎近隣と宍道湖沿岸の貴重な写真を残している。

宍道湖上には、伝説でも有名な嫁ヶ島がある。左上段写真は岸辺からの眺めが夕日とともにそれ自身美しい絵画を構成している。下段の写真は拙著『忘れえぬ偉人』の表紙に用いた。この地は風光の意味から、カルシュ博士のお気に入りの場所、来日後、間もない頃から自ら描いたパステル画や水彩画を残している。現在は湖岸道路が張り出している、嫁ヶ島は当時よりも近く見える。嫁ヶ島残照は宍道湖のシンボルでもあるが、当時はもっと風情があったろう。この見事な写真の構図がそのことを物語っている。



1927年 中海から見た宍道湖

湖については、現在、『宍道湖七珍』と呼ばれているシジミ、スズキ、アマサギ、シラウオ、モロゲエビ、鯉、ウナギはメヒテルトの少女時代の忘れたい思い出でもある。これらの珍しいもの

を獲得する漁師の姿を彼女は何度も眼にしたという。

その中で枕蚊帳のような、本書の題目になった『西ツ手網』はことに印象深いと筆者に語っていた。これについては後述する。

本頁の写真は、干拓前の円城寺下の宍道湖畔にあった頃の袖師ヶ浦の地蔵である。現在のものとはやや様子が違っ

ている。この地蔵は、水難供養のために建てられたものであるが、彼自身の宗教的関心が強く、夭折した子供の護りとしての意味もあったのであろう。一九三五年（昭和十年）に、長男ゴットフリートを生後七日で亡くしたことに関連して特別な想いがあったに違いない。事実、カルシュ博士が加賀浦の『賽の河原』伝説に心惹かれ、そこを訪れたし、子供を護る地蔵に見入ったことは不思議なことではない。綺麗に化粧した長男の死装束の写真を見せて貰ったことがある。現在、彼の遺骨はマールブルクの墓地に両親とともに眠っている。

袖師ヶ浦の地蔵は最初は江戸時代初期に建てられたことが知られている。一九九三年（平成五年）に西に約百二十メートル移動して現在の場所に据えられた。地蔵は造り替えられて三代目となる。今でも、子で亡くした親がお参りにくるといふ。カルシュ博士の残した写真はこの辺りの原風景を今に伝えるもので、



1927年頃の袖師ヶ浦の地蔵



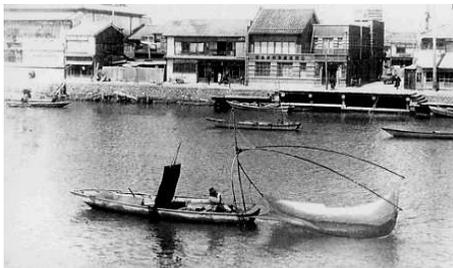
1927年頃の袖師ヶ浦の地蔵

是非とも後世に残して置きたいものである。

二

左上の写真は大橋川での白魚やアマサギの漁の様子であろうか。当時は、宍道湖と中海を結ぶ松江の中心部を流れる大橋川は、連絡汽船や漁船が行き交っていた。漁のための小舟の様子と沿岸の漁の拠点となった興味深い人家の写真を別に残している。

カルシュ博士



四ツ手網漁の様子



昭和初期の大橋川の四ツ手網漁の様子

写真の右端に見える建物は往時のトラヤビルである。本書の題目になった十字に組んだ竹の先の四ツ手網を使った昔からの漁法が窺える。大橋川や宍道湖で使われていた四ツ手網漁はこの地では幻の漁網と呼ばれ、すでに一九六〇年代ごろに絶えてしまった、古き良き時代の水辺の風物誌である。この四ツ手網は平田市園町の県立宍道湖自然館ゴビウスに保存されている。網目は縦横一桁弱、広げると約四・五倍四方になる。その四隅を結び、船尾に固定した。白魚が網に入るとこれを引き上げた。下の写真は春の大橋川での漁の様子であろう。たくさん舟がでて白魚を獲っている。船を止め、網を魚やエビの通り道に浸して掬い獲る。写真は中海から宍道湖

へ上がって来るところを待ち伏せする白魚漁で、帆に見えるものは風よけである。川辺では定置網を用いたのである。冬場から春先にかけては白魚を四ツ手網で獲った。定置網とは異なり、網を数分おきに何回となく引き揚げ、網の中の魚を掬う重労働の漁法である。秋には、同じ宍道湖七珍の一つのモロゲエビも獲った。夜の漁では揺れる松明の光が描き出す芸術的で格別の風情が醸し出されたという。船

尾に下げた明かりが川面に映える様子は松江ならではの風物であった。カルシュが松江に滞在した大正末期から戦後にかけて最盛期であったが能率があがらない漁法のため衰退し、今では昔の語りぐさになってしまった。

白魚いとしやすくはれる 白魚いとしや  
四ツ手の網にわたしあなたにすくはれる



宍道湖 漁師が使っていた漁のためのザル

米子出身の詩人で感傷的詩風で知られる生田春月が詠った水辺の風物が、宍道湖周辺で絶えて久しい。写真は名産をとらえる漁師が使うザルであろうか。宍道湖での漁の準備であろうか。宍道湖の干拓は当時はまだ行われておらず、松江の南北を結ぶ松江大橋は木製であった。この旧松江大橋については、後述する。

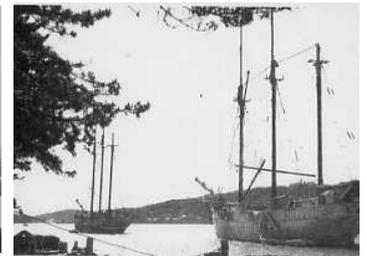
大橋川には中州がいくつかあり、そこで農作業にあたる人々の船が大橋川を行き交う。川を往き来する帆掛け船が往時を語る。その様子が右下の二枚の写真である。カルシュはこの様子をパステル画にも描いている。また左のように、川に沿って美しい眺めをカメラに収めている。なお、次頁下の写真は河畔から大橋川を望んだ写真である。朝酌町の五本の川が合流する地のすぐ沿岸の森にある多賀神社と河畔は神々を目の当たりにする庶民のための素朴な世界である。

カルシュ博士

川沿いの森にある多賀神社 朝酌下社)は手間天神社とも呼ばれる。右写真の間から大山が見える筈であるが、撮影当時は天候が優



大橋川を行き交う帆船



大橋川を行き交う帆船



大橋川から松江大橋を望む



大橋川流域 朝酌方面を望む山の端が多賀神社



大橋川流域 合流箇所天付近



大橋川下流の福富付近 川の中央に塩楯島が浮かぶ



大橋川下流矢田の渡し付近 間は大山？



大橋川下流の矢田の渡し付近 塩楯島



多賀神社 塩楯島と手間古墳の様子

れず、残念ながら見る事ができなかったようだ。右前方に小さく見えるはずの神社が多賀神社である。また、矢田の渡し付近の様子がわかる。小舟が人と荷を運ぶこの矢田の渡し場は、出雲風土記によれば千六百年前から開けていた。大橋川北岸からみた手間古墳とそして左手には塩楯島がある。この古墳は東部出雲の地で最大の前方後円墳である。そして、多賀神社裏には、魚見塚古墳がある。

そこには、神社の鳥居が見える。神在月には、全国から出雲に参集した八百万の神々が、国元に戻る際の祭事である神等去出の妨げにならないように、境内へ人の出入りを禁じるために、参道二ヶ所に注連縄を張る。神々は鹿島町の佐太神社を経て夜半から翌朝にかけてここに集い、直会をしてから国元に

帰っていく。翌朝にこれが終わると、すぐに注連縄を外すことによって、多賀神社の神在祭は終了する。神社での神事を特に行うこともなく、神々は自然に当社に集まり、自然に去っていく。この間人々は、神社への出入りを遠慮する。

ところで、本来の神々の参集の場所はこの神社ではなく、神社境内地の北側の魚見塚古墳であるという。ここ高台から大橋川を見下し恵比須神の漁の様子を見渡すからだという。神社に程近い東津田町に住む高齢の三島昌は子供の頃、神社周辺を遊び場に使っていた。大橋川沿いを撮影したカルシュに関心をもつ筆者を二〇〇三年（平成十五年）に、子息と一緒に思い出とともに案内してくれた。写真に映ったこれらの地については彼らと一緒ににおよそを確認することができた。

この調査の当時は、松江の人でもカルシュの名前を知る人は全くと言って良いほどいなかった。しかし、カルシュ博士の日本の美や安らぎの環境を知る上で重要な意味をもつ枕木山や宍道湖畔について、写真の現場と足跡を追って自らの目で確かめることは筆者にとって困難ながらも大きな励みになった。

昭和の初め、この地に住んだカルシュが何を感じ、自身の学問をどう発展させたかについては彼自ら残した文章や表現を基に二〇〇五年（平成十七年）元旦の一面全面記事として島根日日新聞に掲載されたことがある。

物質文明にまだ毒されていない純朴さを目の当たりにし、皆が幸せに生きるための意味と知恵を『自然と神々』に求め、それを確認しながら心の内に熟成して自らの血肉とした彼の姿勢は新聞に書かれたとおりである。

#### 四

松江市には、六百七十本余りの橋があるという。それゆえの水の都であるのは当然といえよう。その中で南北両地区を結ぶ、人々の歴史の歩みをずっと眺めてきた松江大橋はその代表である。この橋は江戸時代初期に最初に創られた。バスや車が行き交う現在の橋は長さ百三十二メートル、幅十二メートルであり、一九三七年（昭和十二年）に完成したもので、記録によれば十七代目である。そのときの橋がカルシュ博士によって語られている。また、それ以前の橋がアルバムにも象徴的に記録されている。

一九七二年（昭和四十七年）の『西七水害』では松江市街地二万戸以上が浸水した。これを機会に、一九七九年（昭和五十四年）、斐伊川・神戸川（ひいがわ・ごうべがわ）の治水のために斐伊川水系下流の大橋川では、松江大橋

付近の川幅を拡げた堤防を造ろうとした。このため、端を北に四メートル、南に五メートル延長する必要があった。市民の要望を条件にして、一九八一年（昭和五十六年）には現状の姿のまま、すなわち、御影石の欄干、青銅の擬宝珠（ぎぼしゅ）、中央に張り出す展望所、春日灯籠などとともに、松江の歴史を見つめてきた橋を同じ材料によって、同じ形に架け替えするとの結論が得られた。しかし、計画は中止になった。その後今世紀に入って再びその改修事業が動き出した。

ところで、上記の写真は仮橋に下駄音のリズムを響かせながら、佇む生徒の姿を映したものである。青年は指差



松江大橋の木製仮橋に佇む高校生

しながら宍道湖の夕日に映えるその美しさを称賛<sup>た</sup>えているのだろうか。木橋の上の学帽と羽織・袴の生徒二人の姿は一幅の絵になっている。昭和初期、フリッツ・カルシュが生徒とともに大切にしていたこの写真は、当時架け替えが進む松江大橋の仮橋であろう。生徒たちが、厚歯の高下駄を履き、木橋を歩くとカラカラ鳴り響いたという。筆者が高校生の頃に、夏の講習授業のための通学時に、下駄を履いて奏でる音の快感を味わったことを思い出した。それは、一八九〇年（明治二十三年）、松江に入って間もない時期にハーンに印象づけた『松江の音』に通じるものであったろうか。大橋川北詰の旅館に投宿したハーンを思いながら、建設中の十五代目の松江大橋とその時の仮橋を目にしたのである。しかし、十六代目の橋の構造と色彩は残念ながら松江の風土に不似合であったとのことである。しかし、たくさんの橋脚に支えられた仮橋の姿と下駄の響きの調和は人々に安らぎをもたらしたとのことである。江戸時代初期から今に至るまで、橋北、橋南地区を結んだ松江大橋は何と言っても水の都松江の動かし難いシンボルであったからである。

## 鉄道

一

JRの前身の旧国鉄時代の松江駅は一九〇八年（明治四十一年）十一月、米子―松江間の開通に伴い開業した。開業は近代化幕開けのシンボルであった。この様子を映す写真が幾つか残っている。左の写真はカルシュがJRの前身の国鉄松江駅に蒸気機関車が止まっている様子を一九二七年（昭和二年）三月十日に映したものである。この頃はまだ長女メヒテルトは誕生していなかった。なお、現在のJR松江駅は一九七八年（昭和五十二年）に電化高架化されたときに作られた。

写真の蒸気機関車は、調査当時の東京秋葉原の交通博物館によれば、正面の姿からいって8620型式で、昭和初期を全盛期とした旅客列車の牽引用であろう。筆者がSLに乗って通学していた高校生の頃、窓を開けていると鼻の穴が煤で真っ黒になった。それが高校時代の中頃になって電化されたことをふと思い出した。



1927年 旧国鉄松江駅

世の中は車社会化し、鉄道の利用が減少したが、それでも鉄道はエネルギー効率からいって優れている。いずれにせよ、山陰鉄道の開業によって、島根の近代化が幕を開けた。その後、ここに旧制松江高等学校が創設され、この地に幾多の高校生が全国から集まって、カルシュとともに過ごせたのもこの鉄道のお陰であろう。

これとは別に、出雲地方の基幹交通のひとつの一畑鉄道の創業は一九二二年（明治四十五年）である。この年に生まれカルシユの薫陶を受けたのが、松江名誉市民の細田吉蔵元衆議院議員である。カルシユ顕彰のために、何度か会って彼の松江高校時代の活動の昔話を聞いたことがある。当時、東京在住の旧制高校同窓会のメンバーが定期的に東洋経済ビルで毎月第二木曜日（『木会転じて耳目会』に時世を語る会合をもっていた。筆者も何度か招待されたことがある。彼の願いは恩師カルシユにゆかりの深いドレスデンとマールブルクと松江市との姉妹都市提携であり、小生に当時の島根県知事や松江市長らに紹介状をしたためてくれた。



1928年4月5日一畑薬師入口駅電  
鉄開通祝賀

この鉄道は宍道湖北岸沿いを走る歴史ある鉄道である。一九一四年（大正三年）出雲今市（現在の出雲市駅）―雲州平田間で開業し、翌年七月に社名を一畑電気鉄道会社に改称した。その翌年二月雲州平田―一畑間をも開業した。  
直流一五〇〇ボルトでの電化に伴い、写真には、一九二七年（昭和二年）十月に運輸業務を開始した時の出雲今市―一畑間の様子が記録されている。ここに掲げた写真は北松江―平田間を走る電機関車が開通したころの貴重なものである。  
小境灘―北松江間が開通した翌年の写真であろう。上写真は一畑薬師入口駅、次頁右上は平田車庫の様子である。

カルシユ博士

他にもたくさん写真を残しており、北松江（現在の松江しんじ湖温泉）―小境灘（現在の一畑口）間の電車が開通した一九二八年（昭和三年）四月五日



1928年一畑電気鉄道社の電車  
平田車庫

したことが知られている。



一畑電鉄工事の様子 1928年  
終点を意図した仮停車場の様子



一畑電鉄開通後の様子

の様もカルシユの記録によるものである。それに加えて、開通直前の駅や線路の工事の様子や駅構内入り口プラットフォームの様子が克明に記録されている写真も残している。

一畑電鉄には、この旨を伝え、写真の提供を申し出た記憶があるが、あまり関心をもつての対応が得られなかった。運転台後方から撮った写真や新聞を通じてカルシユが開通式に参加



1928年 終点付近  
工事の様子を撮影



1928年 一畑電気鉄道社電車

当時、ミュンヘンとならんで裕福であったカルシュの生誕

の地であるドレスデンでも電車は比較的珍しく、モダンであった。日本でも大正末期から昭和初期にかけて、関東、関西で一般鉄道の電化が進み、電気鉄道の開業が相次いだ。



1928年4月5日 浜佐田近辺で列車からの撮影

しく、浮世絵を連想する。向こうに見える景色は宍道湖であろう。松江近くの工事の様子から開業までを順にカメラに収める行動には、彼がもつ科学的な興味が窺える。

その頃のことであるから、この地はいわば、電化路線時代に先駆けた日本の先進地帯でもあった。上記の写真の浜佐田の付近の橋の様子は何とも美

しく、浮世絵を連想する。向こうに見える景色は宍道湖であろう。松江近くの工事の様子から開業までを順にカメラに収める行動には、彼がもつ科学的な興味が窺える。

## 祈願

出雲市小境町の二畑薬師は補然（ほねん）和尚によって開基されて、すでに千百年を越える月日を経た古い歴史をもつ。日本海の赤浦より薬師如来をすくい上げてこの地に祀ったとの伝説がある。

ここに二畑薬師で無病息災を祈願するためのお参りは、問われる人の因縁、生き方、自分自身の認識と人生に対する態度がシユタイナーを信奉するカルシュ夫妻の信条にどこか通じるものがあったのであろう。

は新鮮な印象であったという。後になって、父からの娘へのそういう話があったという。

二畑薬師へのカルシュ参詣の写真には一九二七年（昭和二年）六月十九日の記述がなされている。

この時期の訪問は、メヒテルト誕生に関連している諸事重要な一歩である。というのはいずれ



1927年6月19日 休憩所



1927年6月19日 二畑薬師

以前に母エンメラが神戸のドイツ人産婦人科医師ヘルテルの診断と手術を受けたからである。このことは、メヒテルトが後にエンメラから直接聞いたことであり、筆者がメヒテルトからまた直接

聞いたことでもある。



1927年6月19日 一畑薬師

カトリックの夫妻の信仰心とは別に、カルシュ夫妻の異境の宗教心に対する心持ちの寛容さがこの行動を自然に思わせるが、子供の欲しかった夫婦の願いが友人の勧めもあってここを訪問させた。当事者であるメヒテルトがこのようなことを筆者に向かつて、こやかに語ってくれた。実際、この年のクリスマスMASの時期に、子を待ち望むエンメラの写真が解説つきで何枚も残っている。

ところで、最初の写真は薬師にお参りを済ませた夫妻が休みをとり、お茶を楽しんだ店である。彼女は多田夫人の影響もあって、日本風のたたずまいが好きで、お茶を良くたしなみ、日本の調度を集め、和服をこよなく愛した。

実際に戦後十五年ほど経ってから夫妻が住んでいたドイツのマルブルクに教え子が訪ねたときもお茶でもてなしてくれたとの記録がある。それに、カルシュを尊敬してやまなかった酒井勝郎（五期理乙生）や増田義哉（六期理乙生）らも同様のことを筆者に語ってくれた。

## 田園

カルシュ一家が暮らした昭和期の松江と周辺は、今とはずいぶん異なっていた。その頃は、松江市内にも桑畑が多く見られた。当時小学生であった前田俊明が語ってくれた。両親が当時の松江高校生相手の下宿を提供していた。ある時、生徒の石倉愧を訪ねて下宿を訪れた大柄なカルシュを遠くからこわごわ見ていたときの様子を、手記にしてそれを筆者に寄せてくれた。

これとは別に、現在の小泉八雲記念館の近くに松本昭少年が住んでいた。年寄りのお百姓さんが彼の父親と話をしていた。それを好奇心旺盛な小学生の昭が小耳にはさんだとのことである。

ためしてくれと野菜の種をわたされましてね、こげな菜っ葉ができました。

なんでもこれはセロリというとのことだ」

先生は、根もとを折って葉っぱを離して、塩と胡椒をかけてバリバリ食べられますで」

「しかし、こげなくさいもの、わしらよう食べませんわ……」

父は、ていねいに洗ってこさせてから食べてみた。

「うん、たしかに……おいしくないわ」

「あちらさんは洗わんとそのままで……と聞いとるが」



大正 14 年 10 月 松江南、旧大名通り



農家の様子



大橋川沿いの田園地帯

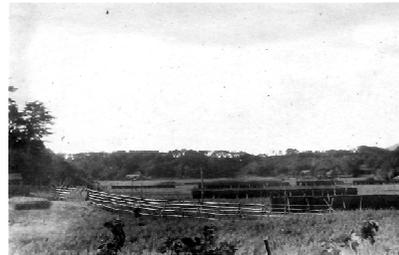
あんだ、こりや下肥まいて育てたでしようが  
そらそうですが、雨が洗っちゃいますけん」  
このお百姓さん、レタス、西瓜、トマト、いちごなどを売り込みに来たのだ。  
トマトは、あちらさんでは煮て食べるようです  
「しかし、そりやケチャップとかいうものにしたもんだろう」



桑の葉の収穫



大根の収穫と干し大根



1926 年 9 月 米の収穫の様子



米の収穫 1926 年 9 月

わしら生でしか食べませんがのう」

メロンを栽培しているとのこと。何やら、ぶつぶつ言っている。

設備はないので、どうもね。まくわ瓜とメロンの交配種をいろいろ作って見たがね」

カルシユ先生はなんと？」

それが、どうもね」

どうやら、合格点をもらえなかったようだ。

カルシユは田園を散歩しながらいろいろと人の生き方を考えていたに相違ない。それゆえ、講義の中や日本を離れるにあたって、生徒にわざわざ、次のようなことを言っている。

皆さんは秋に田圃道を歩いて農夫達が精出して働くさまを注意深く見たことがありますか？」

「いえ、そんなには」

「こんなによく働く勤勉な人々を私は自分の国で見たことがないのです」

「そうかなあ」

「見てるうちに、やがて彼等の姿に尊敬の念が起こるようになったのです」

「……」

「これもすべて、つき合いのなかで日本と人々をよく知ることができたからなのです」

その感動を写真撮影するだけでなく。パステル画にも描いている。

独特の農村の風景は、もちろん様子は異なるが、カルシユの生まれ故郷のブラゼヴィッツの田園を思い出させるだけでなく、自然に寄り添って日常生活をおくる素朴な農家の人々に、限りない愛着をもつて接する行動を促した。

カルシユ博士

## 神社仏閣

—

フリッツは初めて見る神社と仏閣に並々ならぬ興味を抱いた。というのも、その多くは、厳かな様相を呈する場所に座するこれまでに見たくない建物であったからである。次頁左上の写真は昭和初期の佐陀川の左岸、朝日山の麓に鎮座する佐太神社の様子である。延喜式にも記されており、現在は出雲大社、日御碕神社とともに出雲の三大社と称されている。それらは自然の美しさと神々の住む荘厳さがこの辺りに足を踏み入れる人の心を清らかにしてくれるようであり、経験と学問を通した、カルシユの人生観を垣間見ることができると心懸う場所であった。

まず、この佐多神社に参詣した。この神社は大社造りの桧皮葺である社殿が三棟並列の特徴的な神社である。神在月の神々の宿泊所でもある。フリッツは、何故神々がこの地を集まるのか、いや集まらなければならぬのか、有力な神々が何故この地で祀られているのか、そんなことを考えたに違いない。その理由に、神代の伝説以上の様々な日本の歴史の成り立ちが神々の相互関係と行動に投影されている《ことが挙げられるからである。

そう言っているカルシユの声が聞こえるようだ。

一神教が日本では成立し得なかったどころか、伊勢神宮と並び称される出雲大社をはじめこの日本には八百万の神々が今もなお健在であることの不思議さはなんとも理解が難しい。しかし、その現実を見れば、底流には日本独自の文化である意見や信条の対立する者への寛容さ<sup>〆</sup>が存在したからであろう。おそらく神々はお互に対立抗争して滅亡した有力部族の代表としてその歴史をも映している。そんなことを繰り返して、繰り返して、カルシュは考えた。

絶対的な善も悪もなく、生きとし生けるものに、固有の基準があるのだ」

「二つの価値だけを押し付けることに、争いの原因があるのだ」

それゆえ、この日本では、人の精神や行動に近い神々と人々の共存が可能なのだ」

「ここはヨーロッパとは異なる原則が動いている世界なのだ」

この神社の宮司は大伴氏の後裔といわれている。出雲介として下向した祖が神門郡朝山郷に築城した。以来朝山氏と称するに至って、神主職を継承してきた。

風土記によれば狭田国の東端に位し、神名火山の朝日山の下に、弁タノカミノヤシロと呼ぶ佐太大社が鎮座していた。一九七三年（昭和四十八年）、神名火山の下といってもよい鹿島町大字佐陀本郷宇志谷奥の山中から、銅剣六口と銅鐸二口とが重層して出土した。これは古代祭祀を考える上に重要であ



1927年頃 佐太神社



神魂神社の入口の階段

った。現在は本殿が正殿・北殿・南殿の三殿に分かれており、この三殿で祭神の合計は十二座で、きわめて複雑である。しかし、風土記に「佐陀神社」とあり、さらに延喜式に「佐陀神社」とあり、いずれも一座である。

ところが歴史変遷の過程でこの祭神名が変転し、三本殿に分かれた。一社は熊野大神と大己貴命、次の一社は佐田大神、他の一社は瓊々杵尊・伊弉冉尊・天照大神の三神であるという。少なくとも南北朝期にはこの三殿並立の形ができていた。出雲国においては、正二位の熊野・杵築両大神のうち、首位の熊野大社は衰微し、次位の杵築大社は、歴大な社領を形成した。一方、一六五五年（永萬元年）の「禰祇官諸社年貢注文」の出雲国の條に「佐陀社」とあり、このころは

実質的にニノ宮の地位に達していた。そして、中・近世における両部習合の解消後、明治期には郷社に引き続いて県社に列せられ、一九二五年（大正十四年）に至り、国幣小社になった。

佐太神社では古来陰暦八月、御座替神事とともに、杵築大社と一緒に「お忌みさん」の名で知られる神事が代表的な祭儀である。



1928年 熊野大社

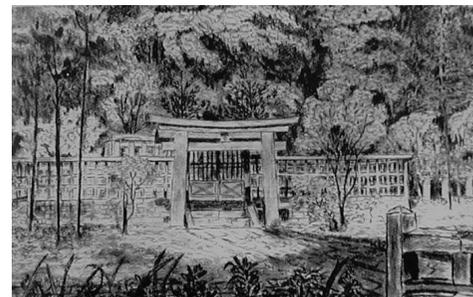
奥谷で暮らしたカルシユは松平家の菩提寺である月照寺を自らパステル画として描いている。墓地そのものがヨーロッパキリスト教の世界とは全く趣が異なり、死して自然に帰る日本人の思想が彼にやすらぎを与えたに違いない。松江城の周囲の丘陵を散歩すると、ドイツでは全くみられない様相の廟門、鳥居、玉垣、石灯籠を備えた月照寺に辿り着く。月照寺の門前にある雷電の頭彰碑は、子供の頃から相撲が好きだった筆者にとってもその由来ともども興味深い。

松平治郷まつらぎの偉大な安らぎの心を使い、自ら撮った写真をもとに家でカルシユはパステル画を描いたという。



1927年5月15日 玄武と灯籠

彼は奇妙な伝説のある玄武の碑をエンメラとともに目にしたことがある。松江には玄武が夜な夜な街中を徘徊した伝説があるが、研究協力のために中国長沙市の中南大学を訪れた際に、近隣で良く似た玄武を見たのを思い出した。松江は文化面でやはり中国の故地と密接な関係をもっていたことが



カルシユ自筆絵画 松平家菩提寺月照寺

容易に推測された。

旧制松江高校（現島根大学）の西側に位置する普田庵は生徒たちと何度か訪れた。それにこの地は至る所に古墳がある。

無秩序の中にみられる調和、赤くなる秩序』をカルシユは見つめ、いつも感じ入っていた。

塩見縄手の東側の堀川の辺りを散歩すると普門院が見える。もともと堀尾吉晴が松江城と一緒に創建したものであるが、松平綱近が現在地に移したものである。この辺りはカルシユが繰り返し返して訪れ、その雰囲気浸ったところであり、生徒とともに後々まで思い出を語ったところである。

一九二六年（大正十五年）七月カルシユ夫妻と多田夫妻が美保関から当時の江角、すなわち恵曇漁港までの旅にでた。美保関は、島根半島の最東端に位置する岬の小さな漁村である。この近くには、美保関遊歩道、関の五本松、美保神社、仏谷寺などがひしめいている。また、史跡でもある権現山洞窟住居跡、サルガ鼻洞窟住居跡などが見られる。

七福神の恵比寿としての事代主命と農業・商業・漁業の守り

神としても知られている

三穂津姫命を祀る半島内の美保神社は全国三千余の恵比寿神社の総本社にあたる。美保神社の本殿は「美保造り」と呼ばれる大社造の社殿を二つ繋いだ独特の形で神聖な雰囲気醸し出している。境内の船庫には、神事に使われる諸手船一隻が並んでいる。

宝物館には出雲琴など古い楽器が收藏されている。四月の青柴

カルシユ博士



1926年 美保神社



1926年 美保神社近辺で

垣神事と十二月の諸手船神事は、出雲の国譲り神話の代表的神事である。

美保神社の境内入り口には、イカの一夜干しなど、漁師の町ならではの特別な眺めである。

断崖からなる海岸からは日本海を一望できる。岬のすぐ近くの海上に浮かぶ鳥居の見える美保神社の祭神でもある御前島は、漁民の信仰を集める恵比寿さまとして事代主命が魚釣りを楽しんだ所だという。

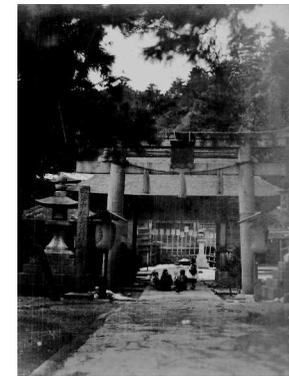
この岬の最東端の地蔵崎に石造りの美保関灯台（海抜八十三メートル）が建っている。古くから隠岐への交通の拠点で、一九〇八年（明治三十一年）にフランス人技師の設計になる灯台であることをカルシユが知り、先人の功に改めて感銘したとのことである。技術の進歩で無人化された今日も、海の道標として重要な役割を担っている。二〇〇七年（平成十九年）には山陰最古の灯台として国の有形文化財に指定された。

美保関漁港の西、標高約一〇〇メートルの丘陵に整備され、初夏にはつつじが一面に咲き乱れる関の五本松公園がある。かつて船が航行の目印にしたという五本の松のうちの一本が民謡「関の五本松節」の由来になった。展望台からは、北方水平線に浮かぶ隠岐の島が望めるし、大山を眺めてはその雄大さを味わうことができる。

ここ美保関は、江戸時代に北前船の西廻り航路の寄港地として栄え、美保神社から仏谷寺までの約二



1926年 美保関 宿屋の前の通り  
リッターズハウセンとともに



1926年 リッターズハウセンと  
ともに訪れた美保神社

五〇坪の青石畳通りは多くの人々で賑わった。当時の面影を残す町並みと青石畳の道が、落ち着いた雰囲気を醸し出してくれる。雨の日にはほんのりと石が青色に変化する。前頁右下の写真。その様子が前ページの写真である。それが青石畳の名の由来といわれて、独特の雰囲気に包まれ、通りに沿って今もたたく印象的な老舗など当時の風情を楽しめる。なお、近くの仏谷寺はかつて後醍醐天皇が隠岐に配流された時の宿泊所であり、国の重要文化財の薬師如来坐像などの仏像が安置されている。

カルシュ博士

美保関の辺りは海岸線が断崖となっており、日本海の雄大な眺めを一望できる。天気の良い日には、はるか沖に浮かぶ隠岐の島も望むことができ、その景色をカルシュ博士は楽しんだ。

古くから隠岐への



1926年 美保関港の風景



島根半島 雲津（くもつ）海岸付近



交通の拠点で、美保関の灯台の建つ日本海に面した東端の地蔵崎から西の七類港しちるいに至る海岸線の約八はち分ぶんの範囲を美保の北浦と呼んでいる。とにかくこの辺りの海岸の様子は海のないドレスデン生まれのカルシュにとってはなんとも美しい珍しい景色であった。

二

美保の北浦は大山・隠岐国立公園に含まれる景勝の地であるとともに、山陰屈指の良き釣り場として人気が高い。美保湾側とは対照的に岬、湾、絶壁、洞窟、岩礁など荒々しい様相をみせている。その代表的景観は東端に近い早見鼻付近で、出雲赤壁や海水浸蝕による洞窟などである。赤壁は天に向かってそそりたつ赤褐色の絶壁で、その雄大な美しさは、目を見張るものがある。カルシュは印象に残った海岸の写真だけでなく、人々の生業の様子を数多く記録している。たとえば、漁に出ようとしている漁師の様子や絹糸の紡ぎを行う老婆の様子である。

一方この地は遠浅で、砂浜の海岸は美しく澄み、海水浴で賑わう場所としても有名でカルシュ親子三人で海水浴や貝拾いを楽しんだ写真が残っている。海の蒼さが何ともすばらしい海岸であったとこのことをメヒテルトが語ってくれた。

ところで、カルシュは自転車に乗って、というよりはこれを担いでこの辺りの詳しい《探検》をした。本庄から手角、中山峠を越えて、日本海沿いの出雲浦部落を通じて西へ行く。この辺は集落を通過することに、上下の坂道があり、とりわけ難所である。北浦、千酌、笠浦にでる。日本海の荒波の浸蝕によ



1930年頃 北浦の漁村



1930年頃 北浦近辺の風景



1930年頃 絹糸を紡ぐ主婦



1930年頃 北浦の漁業従事者

りできあがった海岸線は、到るところ岬と湾で絶壁や岩礁である。漁港で賑わう野井、瀬崎と難路を急ぎ、走り抜けて野波の部落へ入る……」のくだりが『湖畔の夕映え』にある。

この時に、偶然に出会った五期理乙生の酒井勝郎がカルシュの後を心配になって悪路の坂道とともに



1929年頃 家族揃って海水浴

難所を追ったことがある。しかし、日本の荒波の浸食により、できあがった岬と湾の海岸線、それに絶壁や岩礁で形造られている。その景観はドイツでは見られない全くの絶景であったし、それに漁港の賑わいも眼を見張るばかりの珍しいものであった。

このできごとは、カルシュの身体の頑健さと何でも見ようとする好奇心の旺盛さを物語る、酒井勝郎とカルシュとの間のエピソードとして伝わっている。

なお、写真に写った巡礼者の姿は、日本海に面した海岸に見られる神社巡りには多くの難所を敢えて通り抜け心身を鍛え神仏と共に生きようとする先人の心を見る思いである。



1930年頃 北浦の巡礼者

## 加賀浦

一

カルシュ博士

つぎのカルシュ博士ゆかりの地は、ハーンの手にも描かれている難所といわれる加賀の潜戸の近辺と加賀浦の民家である。ボートに乗ってこの辺りを回遊したカルシュは、この地の伝説も承知で、興味を抱いて訪れたに違いない。親より先に亡くなった子供の霊が小石を積み上げる『賽の河原』の伝説を興味深く聞いたのであろう。長男ゴットフリートを亡くしたカルシュにとっては、人々の死者に対する後々までの供養の心が印象的だったという。



潜戸の「賽の河原」



加賀浦の民家

カルシュは、ドイツの赤い平板の瓦とは全く趣の異なる、加賀浦の民家の屋根の様子に感銘したのであろうか。何枚か屋根の写真を残している。

ハーンに加賀の滞在箇所は不思議なくらいほとんど知られていないが、彼が逗留した宿が記録とともに残っている。これを記したのはカルシュその人であり、極めて信憑性が高い。奇しくもハーン没後百年にあたる二〇〇四年（平成十六年）に筆者が写真の整理中に偶然にそれを発見した。

現在の島根町加賀はかつては大いに栄えた港町である。ハーンゆかりの石堀横の階段だけは当時のままであるが、現在は敷地の様子が全く異なり、登り詰めると草で覆われた空き地が広がっているだけである。ここに、ハーンが滞在した二階建ての『楼』があった。

地元の人によれば、明治の頃までは、この地は北前船などの寄港地として賑わい、船宿などが数十軒あったという。船頭らが酒を飲み、楼の女衆の三味線と小唄が次の仕事への彼らの英気を養ったという。

ハーンは、加賀の潜戸見物の際に、昏口も障子も窓も、およそ宿屋の開いているところはみな、私を見に集まった人々で真っ黒にふさがってしまったことを知った。皆黙ってにこにこして見ている（ハーン著 平川訳）。……を記している。



ハーンが滞在した時期（逗留）いた加賀浦の民家

これは有名なくだりであり、したがって少なくともどこかに投宿しているはずである。ここが書にあるその場所かどうかは断定はできないが、ほぼ間違いなくと解したのは筆者とドイツ学術交流会 DAAD（東京事務所でのアンネ ゲラート Anne Gerlert）博士による読みにくいドイツ人の筆跡の解読と二〇〇四年（平成十六年）七月一日のメヒテルト自身の記憶と状況証拠についての国際電話による。このことが日本経済新聞にハーンの関連記事とともに紹介された。その後の調査により、今はずでに存在しない往時の建物と石碑と階段が判明した。写真の建物はその後二階建てに改築され、離れ座敷も建て増しされ、《香妻楼》の看板が掲げられたという。

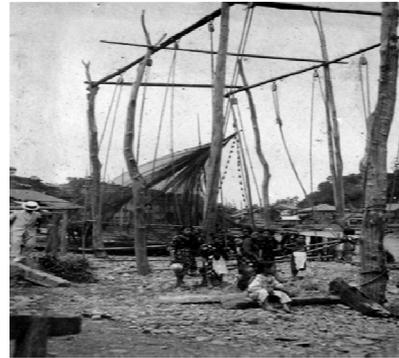
メヒテルトの証言と筆者の提供した写真をもとにして、読売新聞社松江支社の調査で分かったことは、おかみの「キワさん」が粹な人で、安来節や博多節が十八番であったということやこの宿の女衆が二階から顔をのぞかせていたとのことなどである。そのキワさんの話では、ハーンは泊まる度に半紙に何かを書き残した。押し入れの隅に束にして保存していたが、残念ながら焼却処分してしまった。そういうことである。

フリッツ・カルシュが、アルバムに《ハーン逗留の地》と書き添えたこと、メヒテルトの父との旅行や対話の思い出や状況が一致していることからいって、ハーンが利用した宿であることは間違いない。港町が賑わいを失ってもキワさんが宿を守り続けてきたが、十数年前に取り壊され、残念ながらその形はずでに無くなってしまった。



潜戸 昼食時の海女たち

潜戸西入口 ポーナ夫妻とともに



1928年4月2日 加賀浦付近の島で



1928年4月2日 加賀浦の子供たち

なお、このあたりの岩場でカルシュ夫妻が昼食の休憩時に海女たちの様子を興味深く観察したり、網を干すための木組みを撮影している。そして、珍しい着物姿の子供たちから好奇心で見られた「奔人」のエンメラが向かって右端に移っている。

## 弓ヶ浜

一

カルシュ博士

大砂州である弓ヶ浜半島の北端に位置し、<sup>ほうき</sup>伯耆富士の<sup>だいせん</sup>大山を背景にした境港市は、西は中海に面する漁港である。白砂<sup>はくしゃ</sup>青松<sup>せいしょう</sup>の海岸線を有する風光明媚な土地で、本来、出雲と一体化していた土地であったが、県の配置の変更によって島根から行政上分離した。従軍経験のあったカルシュにとってはおそらく、江戸時代の日本の防衛体制に興味があったに違いないし、<sup>こゝ</sup>こゝを何度か訪れている。境港台場は、幕末の一八六三年（文久三年）に築かれた鳥取藩台場八箇所の一つで、<sup>文久山砲台</sup>《とも呼ばれる史跡として貴重な存在である。幕末の攘夷



1927年6月 境港にて



927年6月 境港にて

思想を基盤とし、同年六月、大坂天保山の砲台から英船を砲撃した鳥取藩の方針により、藩内の重要港湾に台場が急造された。因幡では浦留・浜坂・加路の三ヶ所、伯耆では橋津・由良・赤崎・淀江、そしてここ境港の八ヶ所である。

その中でも規模が最も大きく、当時、八基の砲座を有する重装備の台場がここ境港であった。この使命は明治維新とともに終わり一八九七年（明治三十年）に公園となった。台場の隅に建つ灯台は一八九五年（明治二十八年）に開設された山陰最初の灯台で一九三四年（昭和九年）に廃されるまで、港の入口を守った交通遺跡である。この地をカルシュは一九二七年（昭和二年）六月十一日に訪れている。なお、東中央部の慰霊塔は、同年八月の連合艦隊大演習の衝突事故に遭難した駆逐艦<sup>あはし</sup>葦と<sup>あまのい</sup>蔵の殉職者たちのために、翌年になって地元の人たちにより建立された。

二

境港市渡町に指定文化財の庄司家母屋・茶座敷及び庭園がある。ここの当主とカルシュの交流が伝えられている。旧制松江高校出身の十期文甲生の庄司保親である。彼はドイツ語をカルシュから直接教わった生徒ではないが、二年先輩の田総とともにカルシュとは親交があった。カルシュ来日時には歓迎会にも出席している。江戸後期の富豪の代表的な屋敷構えを残している。一八三二年（天保三年）大火に類焼したが、母屋は翌年再建された。建築様式は入母屋右勝手造りで、同家には藩主の休息所としての茶座敷がある。これは母屋の東に前庭を挟み、渡り廊下である廊橋を通じて南北に建てられており、茶室、

湯殿、雪隠を一棟に構成する。庭園は、東南の隅に三尊石を配し、左右に築山と刈込みを配し、前方を広く取って白砂を敷き詰め、川を象徴するとともに、内門の下を潜って玄関前の大海に注ぐ雄大な構想をもつ。また石橋を渡り築山の後を通って茶室に至る。

歓迎会の翌日には、カルシュはここで庄司保親から茶の湯に招かれた。枯山水にして回遊式庭園として特徴がある白砂の中に敷設された飛石の配置は、書院前の駕籠置石の大きさと相俟って、目を見張る出雲式庭園の様相の名園である。なお、書院正面にある自然石の立蹲踞は、自然が生み出した芸術品である。また渡廊下二帯には、中国の西湖ゆかりのトクサが群生し、書院表座敷の雨切りに那智黒の石を鱗状に並べてある。

仏像の三尊仏のように、中央に大きな石を、その左右に小ぶりの石を組む方法で日本庭園の石組の基本パターンである。

## 大根島

一

大根島は中海に噴出した火山島で、島には火山活動でできた二箇所トンネルがある。最も著名なのは島の東端の遅江にある国の特別天然記念物の溶岩隧道「幽鬼洞」である。俗に風穴といわれ、全長九十三メートルで海底に達する。天井はうろこ状をなし、溶岩鍾乳もみられる。島の中央部にも天然記念物の「竜溪洞」がある。玄武岩

からなるこの島は現在は松江市と陸続きであるが、当時は中海に浮かぶ島であった。かつては松江から中海を経て美保関まで美



大根島への遠足 生徒とともに



大根島洞穴 生徒と一緒に



大根島への遠足の時

しい景色を眺めることができる汽船が行き来していた。一九六八年（昭和四十三年）に着工された中海干拓事業で松江市の大海崎と島を結ぶ堤防道路と中海水門の道路が開通し、現在は干拓堤防によって自動車で簡単に行けるが、当時は船でしかそこに渡ることができなかった。前頁の写真は、生徒と一緒に遠足に出かけたときのものである。

二

次は『そりこ舟』を浮かべた大根島の岸辺の様子である。そりこ舟はへさきの板が極端に反ってい



大橋川と中海の間の連絡汽船



大根島 柏木牡丹園



大根島の伝統的な挑戦人参畑



大根島 ザルと刈り取った海藻



大根島 そりこ舟



昭和初期 中海宍道湖北岸から南東方向浜佐陀付近？

たことからその名がある。左右に揺れながら水上を走り、人力により底引漁が可能であった。樫の巨木を素材にした丸木舟で、素材がなくなった現在では、そりこ舟は極めて少なくなり、今は記念保存品となっている。前述の前田俊明が子どもの頃を思い出して語ってくれた。

大根島の有名な柏木牡丹園はフリッツが好きな所でもあった。湖の中にあるこの島はヘルマン・ヘッセと藤野義夫ドイツ語教授との親交があったボーデン湖の中に浮かぶ、花の咲き乱れるマイナウ島を思い出させる。四十余年前のドイツ留学時の筆者の思い出である。

この地は朝鮮半島から近いこともあって、上代から朝鮮人参を栽培していたというが、藩政時代からであるともいわれている。ほとんどが畑地である。島は奈良時代には人家はなく、牧場で軍団の馬を育成していた。写真は大根島特産の人参畑だろうか。屋根をつけて生育を抑えて薬用物質を蓄積させると

いう。頭を傾げながら、前田俊明と松本昭が別々に語ってくれたことを思い出す。

## 隠岐

ここは後鳥羽上皇の縁の島である。自然の美しさがカルシユの心を捉えた景勝地である。その自然の美しさはカルシユを一層清らかで、純粹で優しい気持ちに誘ったものだ。隠岐神社は地祭神が北条氏とカルシユが松江を後にした一九三九年（昭和十四年）に七百年祭を期して火葬御塚の隣に造営された神社である。

牟突きと呼ばれる闘牛が後鳥羽上皇のころから隠岐島で行われている。

この地は、地質学的には第三紀に噴出によりできた火山島で玄武岩からなる。カルシユが、この地の風光の尋常でない美しさに感動すると共に背後の神々と自然の造形の力に驚くのは一通りのことではなかった。この国賀の地の夕陽は『湖畔の夕映え』のモチーフにもなっている。その一節は次のようである。

カルシユ父娘は、再訪問の折、二十年以上前に訪れた隠岐西ノ島の夕映えを想い出した。



隠岐港湾と停泊船 1930年頃

確か、島の外れの国賀海岸であつた。荒波に浸食され



隠岐島の牛突き 遠藤の提供

た奇岩断崖からなるこの上もない美しい海岸線は、時の流れをしばし忘れさせる程の眺めであつた。絶壁の上は対照的にのどかな草地の放牧地であつた。

夕方、そこにメヒテルトとともに立った。

そこから縞模様の海に映える赤と金色の入り混じった夕焼けを見た。

空に描かれた美麗な色彩の技を見て、フリッツはドレスデンで見も知らない人から授かったボタンが放つあの光を思った。



隠岐の奇岩であろうか？ 遠藤の提供

ここで、カメラや写真の現像を通して交流のあつた十三期理乙生の遠藤に再び触れてみる。

夏休みになると、遠藤はカメラをぶら下げては友人と隠岐観光や大山登山などをした。方々一緒に歩き廻っては写真を撮った。隠岐では、漁業と商業が盛んな港町西郷さいごうの近くを訪れた。この地方には資源として有名な珪藻土が産出する。この山肌にある無数の穴居と、その一つに壁画のあるのを印象深く見たという。

場所は正確にはわからないが友人と一緒に訪れた奇岩の様子をも撮影した。

カメラは高等学校の進学祝いに十二歳違いの兄が買ってくれた舶来品であつた。露出を測って、これでシャッター速度と絞りを合わせて撮るのは一寸した芸術であつた。その後がまた楽しい。現像液と定着液をつくり暗室で画像を浮かび上がらせる。これを見るのが学校の授業よりおもしろい。こんな話を本人から直接に聞いた。

## 松江の祭

一

日本に赴任してまもなく、元号は昭和に変わり、さらに昭和天皇の即位大典が催された。一九二八年（昭和三年）のことである。下の写真は御大典記念の宮行列で、鑿行列と一緒に進んだ時の様子である。殿町の山陰合同銀行北支店前または白潟本町の元山陰合同銀行本店前で撮影したものである。鑿行列は伝統的には、十一月三日の天長節（明治節）に太鼓を叩きながら山車を運ぶ行列であった。日の出を象徴する日本の国旗をもって、天皇の即位を祝っている。カルシュの持つ日の丸にはドレスデン以来の日本に対する気持ち凝縮されていた。そんな感慨をもっていった好奇心にあふれるドイツ人であった。



御大典行列

次頁の二枚の写真は祭りの途中の塩見縄手付近の様子であろうか。

松江の鑿と宮の行列には伸びやかな朗々たる祝い歌が入る。掛け声が「そーれ」で、チヨウサヤ、チヨウサヤの囃子で終わる。北堀町の石原幸雄らの手になる鑿宮保存会が、毎年参加する。最初と最

カルシュ博士

後に披露する祝い歌だ。

元来は、

左義長行事で太鼓をたたき歳徳神を担ぎ歩く

。宍練りの際に歌われた。鑿行列にこの名残をとどめている。

宮練りは、皇室の慶事や市制施行記念など限られた場合に行われたが、市制百周年記念の宮練りからは広く歌うようになった。行列後の歌を締めくくりとして太鼓を庫におさめ、直会を済ませて終わりとする。代々引き継いできた祭りを通じて、地域に連帯感が生まれる。

この話を聞いて、会津



昭和天皇の即位御大典記念の宮行列



昭和天皇の即位御大典記念の宮行列

左義長とは正月飾りや旧年に用いたものを焚き上げる正月十五日の夜の火祭り。歳徳神は陰陽道で、その年の福徳を司る女神である。

田島町の無形重要文化財の極めて大がかりで古式豊かな祭を思った。NHKでも採り上げていた。

昭和天皇御大典を祝う鑿と宮の行列や祭の写真はメヒテルトの厚意で読売新聞松江版の連載に著者を通じて提供された。同社が調査したところ、**鑿だらざ**という出雲弁で《おぼせ者》の集まりが、

現在は、鑿行列に欠かせない太鼓や銅拍子とともに横笛の担当しているとのことである。



鑿行列で練り歩く笛や鉦

く。現在、毎年十一月の文化の日に太鼓を叩きながら行われる。

歴史的には、一七三四年 享保十九年）五代藩主宣維が奥方を迎えた際に、領民たちが大きな鑿太鼓を作った祝いのために打ち鳴らしたのが始まりといわれている。鑿の直径は二尺。これを山車に二つ載せ、叩きながらその他十数台の山車が街中を練り歩



鑿行列の山車

カルシュ博士

二

カルシュには、何といっても祭りがとても珍しかった。これ程大がかりな祭は見たことがなかった。夢中でシャッターを切つて撮影した。概ね十二年に一度、五穀豊穣を願ったホーランエンヤ祭が行われ

る。このときは一九二七年 昭和二年）であった。この名で地元で親しまれている祭りは城山稲荷神社のご神体が阿太加夜神社に三日かけて移る神幸祭である。

古くから宮島の管絃祭、大阪天満の



鑿行列を引き回す山車



1927年 神幸祭エンヤホーラン



1927年 神幸祭エンヤホーラン

天神祭とならんで、日本三大船神事の一つで、松江市が誇る大きな祭りである。

藩祖松平直政公が入国して十年目の二六四八年（慶安元年）は天候不順で不作が予想された。このとき、城山稲荷神社の御神霊を阿太加夜神社に運び、豊作を祈願したのが起源で、最初は十年ごとに行われた。その後、一八〇八年（文化五年）の御神幸の折、暴風雨で座礁しかけた神輿船が馬瀉の漁師に助

けられ、阿太加夜神社に無事送り届けられたのならい、櫛伝馬船かいてんまふねが加わるようになった。豊作と民衆の幸福を祈願するこの船神事は、以来ほぼ卯年十二年ごとに船渡御ふねわたりのみこによる神幸祭として行われたという。

一九九七年（平成九年）五月二十三日～二十五日に、地域伝統芸能祭の中心イベントとして渡御祭わたりのみこ、中ちゆうぶつ日祭にちさい、還御祭かえりごさいが催された。市内五地区から繰り出す鼻曳船を先頭に、清目船、櫛伝馬船かいてんまふねと呼ばれるおどり船、神楽船、神輿船、神能船、両神社氏子船など約百隻が連なり、延々一キロメートルに及ぶ船行列が進行した。その様子は金色の宝珠を中心に色鮮やかな旗、幟をなびかせて、さながら豪華絢爛ば時代絵巻になった。宍道湖、大橋川、中海を彩り、古来伝承の歌舞伎衣装の踊り子や、囃子はやしの子供、そして櫛漕ぎの若い衆などが、ホーオオエンヤ、ホーランエーエ、ヨヤサノサ、エーララノラララと唄い踊る。その舞台となるのが櫛伝馬船かいてんまふねである。

船は、本来松江城内堀の乙部灘の船着場から漕ぎ出していたが、堀川の水深が浅くなり、一九五八年昭和三十三年）を最後に宍道湖岸からの船出に変わった。

主役となる五隻の櫛伝馬船かいてんまふねは長さ約十五メートル、幅約三メートル、約五十名の乗船人数の装飾された豪華船で、もとは網船を改造して使用していたが、現在は調達が困難で新造している。

# 心に残る思い出

迎えるにしの水途

フリッツには自分の過去の学歴、経歴に見合うような十分な活動の機会をドイツで与えられることはなかった。

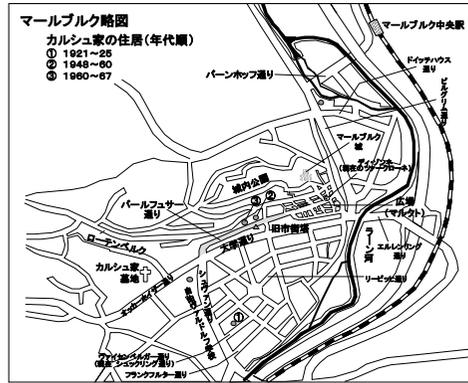
帰国時の年齢が五十四歳で、フォード財団の援助による成人学校での講師は最低限の生活の保証でしかなかった。最初に紹介された住居がともみすばらしいものであったことを娘たちが回顧していた。

フリーデルンの大学進学も学位取得のプロモーションもすべて、当時の指導教授による計らいのお陰であったと彼女自身が筆者に語ってくれた。彼女は、学生寮にも入る費用すら用意できなかったという。

下の写真が帰国後の二度目の家である。したがって、湖畔の夕映え」を書いた時点では、学生の最も普通の生活の仕方をもとに、真実を知らなかった筆者が想像で描いたものであった。しかし、その話を知った後でも、さほど事実からはずれていないので、親と同居の形を取らず、本文はそのままにしておいた。

地図はマールブルクでの新婚時代、帰国後、さらに現在のフリーデルンの住居と墓地の所在と母方の先祖といわれるエリザベートに因んだエリザベート教会の位置、さらにマールブルク大学、馴染みの深

カルシュ博士



マールブルクの概略地図

いガストシユテッテの位置が示されている。

二

一九六一年（昭和三十六年）には、フリッツは病気のため年金生活に入った。彼は、それから四年後に、古巣のキリスト教共同体に属するカッセルの養老院のアルベルト・コルベ・ハイムに移住し、ライフワークである人智学からみた東洋哲学史の

研究に専念しようとした。

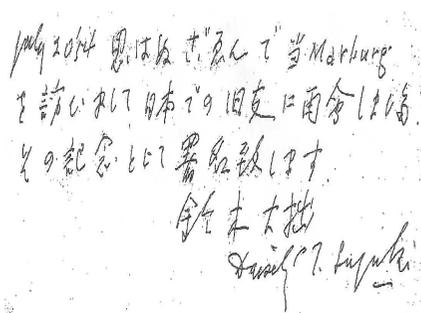
この時期には、フリッツは折にふれて日本に関する講演をしている。

また、宗教哲学者の鈴木大拙や微生物病学者の奥野良臣らの訪問記録が残っている。

フリーデルン・エンメラ・フリッツ



マールブルクにて  
フリーデルン、エンメラ、フリッツ



鈴木大拙によるドイツのカルシュ家の訪問記録

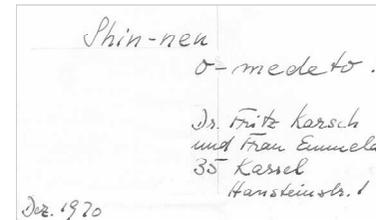


1960-67年までの住居 マールブルク

赤十字病院の前の石畳を過ぎると突き当たりにこの老人ホームがある。当時としては珍しい、完全介護の施設で、日本では最近になってやっとこのような住居が建てられている。夫婦が独立に部屋を確保し、共通の居間をもつ。我々の感覚から言うと贅沢な住まいであった。ドイツのこのような先見性は驚くべきことである。残念ながら、訪問の際、中を見せては貰えなかったし、住んでいた証拠を見せても貰うだけでその交渉に手こずった。



カッセルからの田島宛の年賀状



カッセルから江上宛の年賀状

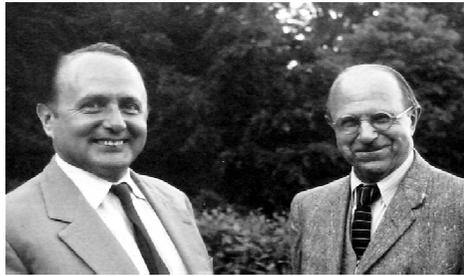


この葉書の表は 1967 年創立のカッセル老人ホームのアルベルト・コルベハイムの写真である。矢印は二階のカルシュ夫妻の住居

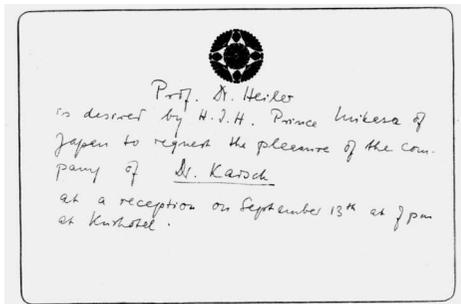
今でこそ、

ゴミの収集は分別があたり前であるが、スーパーマーケットでは買い物を廃止したり、瓶に余分な費用を払わせて、回収時にその分を返還していた。これによって回収を促進するなど、筆者がドイツに留学していた一九七四年（昭和四十九年）頃に、そうしたことが既

に行われていた。併せてその先見性は見習うべきものである。写真はメヒテルトがカッセルを訪問したとき家族とともに撮影したものを年賀状にしたものである。時には、盲人学校などで求めに応じて、知日ドイツ人として講演を行い、その収入を生活の補助としていた。講演の一部が音声で残っており、現在デジタル化して保存してある。なお、田島康弘（十四理甲二〇宛のカルシュ氏自筆の一九六九年（昭和四十四年）のそして江上正孝（十七期理乙宛の一九七〇年（昭和四十五年）の年賀状が残っている。



ハイラー博士とともに



三笠宮崇仁殿下によるパーティへの招待状

話はドイツ帰国後間もない頃に遡る。一九四七年（昭和二十二年）ヘッセン州で生活基盤をやっと整えたカルシュ博士はマールブルクでハイラー教授との旧交を回復した。筆者が宮内庁で調べた結果から、彼はポンの日本大使館と接触したり、ハイラー博士を通じて三笠宮崇仁殿下と親交があった様子が窺える。例えば、一九六〇年（昭和三十五年）九月十三日にマールブルクと同殿下のパーティに招待された事実が確認されている。日本週間（Japan Woche）への招待状はハイラー博士を通じて彼の手許に届いている。フリーデルンによればハイ

ラー博士は彼の学生時代からの友人で、当時はマールブルク大学神学教授であった。

#### 四

戦後の復興も一段落した一九五七年（昭和三十二年）五月に、かつての教え子の七期文乙生の梶川俊吉が日本から訪ねてくることになった。明日がその日である。本棚からフリッツがアルバムを取り出し、ページをめくった。現在も、ドイツではフィルムや撮影装置の代表的な会社であるアグファ社のカメラで撮った昔の松江の風景だ。周辺の地にも限らない愛着がある。

生徒の顔が見える。戦争で亡くなった生徒のことを風の便りで聞いた。

このころは日本円の外貨への交換が法的に自由にならないので、窮屈な旅行であったとのことだ。梶川がそう説明した。

このあたりは、フリーデルンの思い出を参考にしている。いまも大事に保存されているゲストブック（訪問記録）の文面からは、おそらく、次のような会話があったと想像される。

先生、二十七年ぶりの再会ですね」

そう、神のお恵みです。感謝しましょう」

旧知と再会したときには、フリッツは常にそういった。

彼は他の宗教に深い理解はあったが、個人的にはプロテスタントであった。

何とも素晴らしい石畳。何と美しい古城の緑。それにテラスからの眺め」

先生、松江の三十年前の昔が偲ばれますね」

このときに会った梶川がカルシュにマールブルクを案内されて古風な石畳やお伽話のような古城の緑に感嘆した。さらに山上の城からの眺めに心を打たれ、先生とともに当時の松江の城からの景色を思い出した。

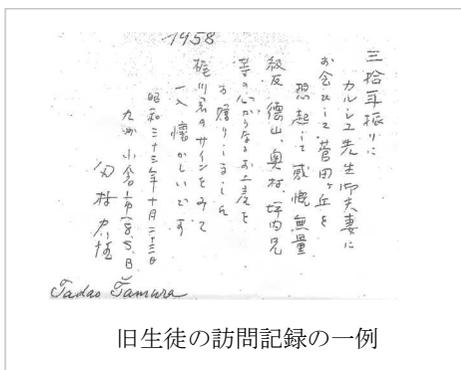
「日本は素晴らしいところだった」

それにも増して、想い出深い松江の生活だった。今更のごとく松江を懐かしく思い出した。二人でその思い出を、家で遅くまで語り合った。

先生、御世話になりました。先生のご健康をお祈りしています。さようなら。また、お邪魔します」

一晚、ここで過ごした彼が翌朝名残りを惜しみながら、暇を請うた。

翌年十月になると、かつての陸上名選手で、今は小倉市立病院副院長の八期理乙の田村忠雄が訪ずれた。



旧生徒の訪問記録の一例

先生、お久しぶり」涙ながらに再会を喜び合った。三十年振りにカルシユ夫妻に会って、先生、あの菅田ヶ丘を想い出します」

感涙にむせび目頭を押さえた。

例えば、高等学校の近くにある、松平不昧公が創らせた茅葺きの山荘茶室の菅田庵を訪ねたものだ。先生と一緒に前庭のつつじを眺め、大橋川を遠く見た。そして、あの見事な借景の奥深い風雅を賞でたものだった。

綴友三人からあずかった心からのお土産があります。どうぞお受け取りください」

「いや、どうもありがとう。田村さん、ほら、ここに梶川さんの署名もありますよ」

ゲストブックをエンメラから受け取って指し示した。

この時期にはずっと会うことの叶わなかった実姉のフリーデルを訪ね、一緒に語らう時間と費用の余裕をもつことができた。

カルシユ博士

## 日本への招待

—

一九六八年（昭和四十三年）、増田義哉らの発案から田村清三郎らが中心になって同窓会が募金を呼びかけ、カルシユ氏の日本への招待を実現した。十月五日に一畑ホテルでNHK松江放送局にインタビューを受けた時のカルシユ本人の声が磁気テープに残っている。日本語でのインタビューである。錦織きみえ、中村（石飛）フデ子、松原武夫旧制松江高校の元教授、メヒテルト、ヘルベルトの声もアナウンサーの声とともに聞くことができる。

カルシユ博士は松江市西川津町の思い出深い旧制松江高校の講堂（現島根大学講堂）で「回顧と展望」と題した講演をメヒテルトの通訳によって約三十分間行った。この後に、同窓会の全国総会が開かれた。講演のあとには記念写真撮影と乾杯があり、メヒテルトも「野バラ」を独唱した。なお、校章を染め抜いたはちまきを締めて同窓生が当時の学生歌「青春の歌」を高らかに合唱した。

博士は講演に先立って、この日午前中に松江赤十字病院を見学、また午後一時過ぎには、博士訪日の実現に奔走しながら、その実現を前に不慮の事故で亡くなった同窓会理事で県立図書館次長であった十三期文乙生の田村清三郎の墓参りをした。新聞の写真がその様子を物語っている。

メヒテルトとともに花束を供え、彼の冥福を祈った。なお、かつての教官室（現事務室）や昔の姿を

。詳細は拙著「忘れえぬ偉人」を参照



1951年フリッツの実姉とともに

とどめる本館や中庭を散歩しては、ありし日を懐かしんだ。

このとき、佐藤内閣当時の自治大臣の赤澤正道が多忙の中、カルシ

ユ父娘らを歓迎してくれた彼はカルシユにとって、最初の教え子、四期文乙の生徒の一人である。ところで、赤澤がまだ高校生の時、理想を掲げて堂々と論を張り当時の政治家と渡り合ったという。鳥取県出身の政治家として党派にとられず活動したことが当時の新聞でも報道されている。カルシユ宛の赤澤自治相自筆のメモが残っている。



1968年10月5日NHKによるインタビュー



鳥根新聞による報道 1968年10月5日

カルシユ博士

カルシユ博士はゆかりの地松江を振出しに京都、大阪、岡山、広島、博多などを巡り、十四日の夜に長崎市に着いた。

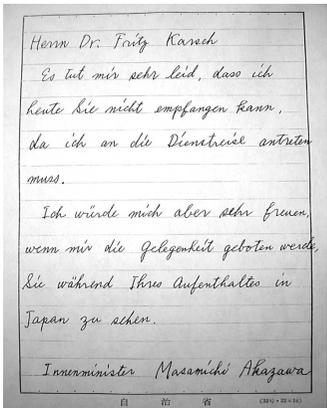
当時市内には医師で六期理乙の道祖尾久太郎ら十名余りの教え子があり、十五日には夕方になると全員が揃って、市内の料亭に繰り出した。郷土料理を楽しみ、話が弾む。尽きることのない思い出話に花が咲き、一同は時を忘れた。そして、このことは

『 著博士はるばるドイツから 教え子三千 うれしい招待 全国巡り長崎へ 』  
として新聞で報道された。

終戦直後の混乱期に日本を去ったカルシユには、当時の日本が見違えるばかりに復興した印象をもたらした。見るものの一つ一つが目を見張るようにすばらしい「そんな感嘆の言葉を何度も口にした。



赤澤正道氏らのカルシユ先生歓待の挨拶



赤澤自治相自筆のメモ

しかし世界ではじめて原爆の洗礼を受けた広島と長崎については顔を曇らせながらも、努めて明るく次のようにその感慨を

述べた。

現在でも、まだ生々しい傷あとが残っているものと思っていました」

が、そのような影はみじんも感じられません」

それにしても、驚くべき日本の復興力ですね」

おはいっても、今でも原爆による後遺症で、たくさんの人々がベッドに横たわったまま辛い毎日を送っているのを聞いております」

復興の様子の中に隠れてはいるが、これからも続く人々の苦しみに心を痛めております」

この時期の日本医事新報に、当時久留米大学教授で六期理乙生の増田義哉から心からの歓迎の言葉が寄せられている。

翌日、カルシユ父娘が福岡に帰ってくるので、増田は佐賀駅まで迎えに出た。

先生、お疲れさま。長崎は如何でしたか？」

汽車に同乗して博多まで戻る途中、増田の住む久留米市

に立ち寄った。大学病院に立ち寄ったあと、昼過ぎに神代の渡し跡に辿り着いた。歴史の重みを感じ



松江高校での講演時に撮影

1968年10月4日

じるこの地で少し休んだ。そこから、福岡空港までゆっくりとした道中であった。のどかな一日で、無事に先生を案内できてホッしているところであった。空港に着いた。搭乗手続きを済ませた。

「これで、私の役目が終わった」と思わず漏らした。

空港のゲートの中に消えるまで、カルシユ父娘は、振り返り、振り返り、手を振っていた。

いつの間にか増田の目は涙でかすんで、先生の姿もボンヤリとしか見えない。

先生もメヒテルトも空港ゲートに入る時、涙をためていたようだった。

増田さん。お世話になりました。皆さんによろしく」

この姿が増田の眼に焼きついて離れることがない。

増田は自分の懸案と責任を果たした満足感でいっぱいであった。筆者にもそう語ってくれた。

### 三

大阪でも、先生とメヒテルトを囲む楽しい歓迎の会が多数の教え子と、その関係者を交えて盛大に行なわれた

以下については、後にメヒテルトが一人で来日したときの話とこの時のことが混同している、と白石が再三再四、筆者に言っていたが、二つの実話をあえて寄せ集めて筆者が『湖畔の夕映え』にまとめた

もので、すべて承知の上で筆者が書いたものであることを追記しておく。次は、その当事者から直接聴取した事実を記述したものである。

白石さんですね」

はい、先生」

奥野さん、しばらく」

先生、ドイツではたいへん御世話になりました」

もとはと言えば、増田さんや奥野さんや加納さんのお陰です」

さあ、歓迎会だ、岡崎、君が司会だ」

と宮田がまず言った。

しばらくの間、懐かしの言葉がカルシュ父娘の周囲に乱れ飛んだ。

すると

先生に習った、食隊さんの歌」でいこう」の声が出した。

白石が歌い出した。

ヴェン イムフェル デブリッツ エンデイグ

ラナーテン、ヴァイネンディエトヒエン ウムイーレンソルダーテン 手榴弾が野原で炸裂する。兵隊さんを悼み涙を流す娘たち アイヴァールム？ どうして？ アイダールム アイブローズヴェ



1968年9月27日、靖国神社付近のレストランにて左からヘルベルト、フリッツ、メヒテルト



旧制松江同窓会での会食



出雲大社の参拝



朝日新聞 1968年10月5日



長崎新聞による報道 1968年10月15日

ーゲンデムチンデラツサブンデラツサ……」

岡崎も宮田も興奮して歌う。

古い歌だね。私は忘れた」

と一寸、先生がとぼけて見せた。忘れるはずがない。幾重にも思い出深い歌なのだ。メヒテルトも童心に返った。久方振りに先生に会いたいと思っていたかっつての同僚や生徒は、滞在先のホテルに泊って、一緒にゆっくり遅くまで話ぐできた。

#### 四

遠藤が手記を寄せてくれた。

カルシュ博士  
一九六八年（昭和四十三年）、兵庫県の会社に居たときだが、カルシュが日本に來ていることを同窓会から報せてきた。大阪で歓迎会をやると言つてきたが、そのために会社を休むわけにはゆかないし、残念に思つていたところ、うまい具合に大阪に出張を命じられた。先生の喜ぶ顔を想像しながら、姫路城の写真を買つて鞆に入れて出かけた。大阪での仕事が済んでから、滞在先のホテルに電話したら、ナント、歓迎会に出ていて留守であった。ホテルでは、その会場の名も、場所も知らないと言ふ。世話役の家に電話したが、やはりわからないということだ、スゴスゴと大阪を去つたことを思い出した。今ならば、歓迎会の幹事役に聞いてその後の東京でのホテルに土産を送るとか、間に合わなければドイツの自宅を聞いて送り届けるのが普通だろうが、未だ、郵便事情が良くなくて、思いつかずに、ガツカリするだけに終わつてしまつた。

しかしこのときに知つたのだが、一九三九年（昭和十四年）に先生が松江を引き上げて、ドイツに戻つたとき、日本にいるオット大使から、帛イツに居たら、戦争に引張られるぞ。日本に來い」と言われて、一家全部で日本に戻つたという。オット大使は親しい友人だつたと聞いている。娘さんも、今は立派な大人になつてゐるはずだ。後に、メヒテルトと文通するようになって、彼女が良く日本語を覚えていて、字も上手なのに感心したことがある。

カルシュやギルソンと一緒に大山で過ごした田総武光（たふさ たけみつ）も思い出を語つてゐる。カルシュの帰国後二十年以上も経過してゐた頃、カルシュの教え子で医師になつた卒業生のグループの発案で、カルシュを日本に約一ヶ月間招待した。このことはすでに述べた、

その折、アメリカ在住の長女のセイント・ゴア夫人（メヒテルト）も來日して、滞留中ずっと一緒に行動し、父の講演の通訳などをした。田総が淞高に在学中には、彼女はまだ二才か三才の可愛い子どもであつた。まさに夢のようであつた。久しぶりに先生に會つて、滞在先のホテル一畑に泊つてゆっくり話をするこができた。出雲大社に参拝した時一緒であつたし、彼女とも親しく話ぐできた。こんなに嬉しいことはなかつたことであつた。



同窓会員による記念写真 1968年



軽井澤に……

北欧の夏の森を偲びぬ

みすずかる 信濃の空にけるげると

みつめれど 浅間は見えす

昭和八年八月十七日 長屋

その昔 共に学びし この町に

また訪ね来て 共に語りぬ

帰国前夜に 四十数年前を回顧しつ

昭和四十二年九月七日夜 長屋

ゲストブックを閉じた。長屋は静かに寝室へ向かった。なかなか眠りにつけなかった。

カルシュ博士

三

カッセルはグリム兄弟で有名なヘッセン王国の首都で、美術館・博物館が多い、赤ずきんちゃん」のふるさとでもある。

長屋と別れたその年の十月三日、エンメラの七十五歳の誕生日に二人が寄り添うように笑顔で一緒に写真を撮った。苦楽を共にした二人「緒の最後の写真である。

それから三ヶ月後の年末に、二人は金婚式を祝った。長寿を願う長女メヒテルト夫妻と次女フリーデルンがかけた。

みんなの話は、つい日本へ引きずられる。

「すばらしかった！」

「また、行きたい」

「私達も行きかけたわ」

とエンメラとフリーデルンが口を揃えて言う。

しかし、それから半年後、フリッツが突然頭痛を訴えた。

「どうも、疲れかららしい。たいしたことないさ」

診断がついた。脳腫瘍であった。

エンメラが医師から呼ばれた。末期の状態であった。そ



フリーデルの誕生日を祝うフリッツ  
オーストリアの彼女の自宅で 1966年

う告げられた。

メヒテルトが急いでアメリカから呼び寄せられた。

フリーデルンも駆けつけた。

ベッドに横たわって思い出を語る。すべてがなつかしい共通の思い出である。

メヒテルト。メヒテルト

フリッツの呼びかけにメヒテルトが手を休める。

日本は、いや松江のことは運命だったのだね」

大山、隠岐、宍道湖…… 軽井沢 …… 私の……私の……」

あの大山とあの中海。永久の静けさの象徴を、もう見ることは決してないのだろうか」



1970年10月 カルシュ夫妻 最後の写真

フリッツは旧制松江高校の関係者から招待を受け、前年の秋にかつての生徒たちと親しく過ごしたことを思い出していた。

ベッドの上で、その時のアルバムをひろげてみた。

あの日本各地の再訪問が『遠来の師への追慕の美談』として新聞でも報道されたことを幻のごとく眼

前に見て、写真の上に熱い感涙を落とした。

#### 四

カルシュと大山の関係は因縁めいた特別なものがある。彼は子供の頃に、大山に似た景色を何度も夢見たという。大山の神秘性は彼の思想とは決して無縁ではなかった。拙著『湖畔の夕映え』でも、大山は彼の日本との関係の伏線であったし、日本での生活と自分の学問の源泉とも言うべきものであった。これから受けた自然観と人間観が生徒や娘のメヒテルトとフリーデルンに受け継がれたのはほぼ間違いない。

カルシュにとって、こうした景色だけでなく、見たこともなかった佐太神社や出雲大社、神魂神社などは特別の印象があったという。自然と結びついた古来の諸々の神々を信仰してきた伝統と、そこで整理統合されてきた神々の総体としての調和にやすらぎと美のエネルギーを見ながら、心の平安をこの地に見いだしたのがカルシュであろう。彼の先人である遠い昔に来日した外国人もおそらく、同じようなやすらぎをこの地に見いだしたのである。

神社に詣でて、鳥居をじっと眺めていたのをメヒテルトはよく眼にしたという。構えの内側が聖なる域であり、鳥居に佇む鳥が自由に羽ばたき、神々と人々を結ぶ。そんな上古の信仰を想ったのであろう。

カルシュにとっては、何よりも近くの神社とその雰囲気や彼の自然観・人間観・歴史観に、それに思索に直接的な影響を及ぼしたようである。このことは彼がやがて日本の自然と調和して暮らす人々をこよなく愛したことにつながるものである。彼が大山はもちろんのこと、多くの自然の様子や空想の景色

をパステル画に描いていることはすでに述べた。しかし、その中でも彼が大山と自分の関係を特別に考えていたことは、家族の証言からも明らかである。実際、子供の頃何度も夢に見たことを家族との話の中で、繰り返し語っていたという。

死の床にあったカルシュが、見つめては感慨に耽っていたのは金の飾りのカフスポタンの変わらぬ輝きだったという。彼を日本と結びつけたドレスデンの博覧会で日本人から入手したものであった。いまでも長女のメヒテルトの手許に残る父フリッツの形見の品である。

自分の行く路を照らしてくれた『その光の導きにより、 矢の恵みに満ちた』美しい人生であったこと、松江の地を自分の故郷とずっと考えていたこと、魂が日本人であると思っていたことは、晩年カルシュが繰り返し語っていたことだった。

静かに澄んだ心のうちをやさしく包む光の衣の輝きは、あの湖畔で見た夕映えの美しさそのものであった。

この天の光につつまれながら、自分は今その終着点に辿りつこうと  
しているのだ。

これらは、永遠の時の流れと静けさのなかで、カルシュに与えられた運命の輪によって結ばれて生じた数々の現象の根幹をなすものであった。

日本との関係はシックザール（宿命）であり、その生じたすべての事象は天命によるものであった。それゆえ、一九六八年（昭和四十三年）来日の折、出雲大社に参拝した時に、自分の人生のすべてが整理されたことをフリッツは明確に悟った。自らの人生の終末にあって、彼はその想いを周囲の者に、静かに語っている。

そして一九七二年（昭和四十六年）十一月十八日、フリッツはあの湖水<sup>みづ</sup>のほとりに生じたさざ波が消えるように静かに永久の眠りについた。



グリム兄弟の銅像 カッセル

## その後

—

カルシュ博士

カルシュは一九七一年（昭和四十六年）に夕日に彩られる湖畔のさざ波が日没と共に消えるように、静かにこの世を去ったが、その後も旧生徒との交流が妻エンメラや娘メヒテルトとの間で続いた。とくに、メヒテルトと酒井勝郎、増田義哉、遠藤捨雄、白石、奥野良臣、江上正孝、そして竹原敏夫らとは継続的に文通が行われてきたし、彼らの知人もドイツに行ったときには、カルシュ夫人とも面会している。前掲の手紙や前頁の葉書は、直接的な資料として遠藤とメヒテルトとの交流を示すものである。幸いなことに、彼女は日本語ができるので、遠藤は手紙をワー

長い間、しつれいいたしましたがいかがですか。今はチヤクアメリカの方はもう寒くまりました木の葉果は皆ちつてしまいましたが。京都の方も冬になったでしょうか。

貴男がう頂きました大優りどうも有難うございました。（八月の七日のお手紙でした）今まで二返事も書きませんでしたのですみません。貴男のお手紙は読みやすいですよ。漢字はいんさつしてあるし、小りがなをつけて下さるので、本玉にたい勉強になります。なんべんも読んで字をおぼえます。どうも有難うございます。

十月には主人とドイツへ行きました。FRANKFURTから BADEN-BADENに、それから BERLIN と POTSDAM と DRESDEN へ行きました。主人の小名は HEINAT、HAMBURG へ行きました。あついで写真をとつし、お手紙に入れておきます。

どうもおしあわせみ新年を迎えられますよう、お祈りを申し上げます。

いまでもお元氣におすごし下さいませ。

十二月三日  
かしこ  
メヒテルト。

メヒテルトの自筆の遠藤捨雄宛の書簡



メヒテルトによる遠藤宛の年賀状

プロで書いてフリガナを付けて置いたところ、これが案外役に立った。それにしても、彼女の日本語も大したもので、漢字も書けている。何年間かはフリガナを続けたが、横着して省いたら、偶然かも知れないが一九九八年（平成十年）には、竹内夫人代筆で手紙が来るようになった。彼女は昔、松江の奥谷に住んでいて、ノースカロライナ州から遊びに来たからだという。

メヒテルトは毎年、遠藤にクリスマスカードを送ってくれたが、英語以外の外国語が入っていたり、謹賀新年という字が入っていたりした。

このころになると、息子や娘の写真は無く、老夫婦の写真ばかりだが、いつも夫君の胸に、大きいメダルが映っている。そこで、訊いてみたら、それは二人がメンバーになっている名誉と歴史のあるグルメのクラブ（ギルド）の《Chaine des Rotisseurs 二四八AD》と記された、パリで開かれたときのメダルという。ライン河を船で下ったことをメヒテルトに話したところ、谷レーライの少し下流に、St. Goar (Sankt Goar) という町があるが、そこが主人の故郷である」という説明があった。こんなことを不自由な身体で遠藤捨雄が電話や手記で筆者に語ってくれた。

筆者とアメリカで面会したときにはさすがに、メヒテルトは日本語で文章を書くことはできないようであったが、当時は立派な文章を書いていたのが容易に想像できる。彼女の家に滞在していたとき、



蒐集品の一部  
マールブルクのフリーデルンの自宅で撮影

《花》の漢字を書いて見せてくれた。ところが、丁度、鏡に映した字になっていたのには、少なからず驚いた。しかし、日本語は依然として達者で、複雑なことは別にして、ほとんどすべてを日本語で語り合うことができた。



セイント・ゴア夫妻  
メヒテルトとヘルベルト

して描いたので、田総を直接に描くことはなかった。しかし、エピソードでは彼の言葉を引用している。それゆえ、筆者にとつて彼はカルシュの縁にある重要な意味をもつ人物である。

直接の生徒ではなかったが、何かと太いきずなを保っていた田総の残した手記から再び引用してみる。彼はギルソンと大山登山をした時、夏休の間大山に家を借りて過ごしていたカルシュ夫妻の在所に立ち寄ったし、山下夫妻とも、何度か一緒に過ごした。このことはすでに述べた。

カルシュが亡くなった後、一九七二年（昭和四十七年）田総の女婿が家族連れでドイツに留学した時のことである。娘達は彼の代わりに、老人ホームに住んでいたカルシュ夫人を慰問した。夫人は大変喜んで涙を流したという。日本が懐かしくて、部屋一杯に日本の色々な品を飾っていたという。その夫人もとうに亡くなった。当時、メヒテルトにも二人の子供がいた。月日の流れをしみじみと感じたという。彼女からは、毎年必ずクリスマス・カードが届き、時々写真も届いたという。

そうしたことが途切れることなく続いてきた。そして先の訪問から二十一年後の一九八九年（平成元年）九月に、メヒテルトは日本を再度訪問することを決心した。懐かしさでいっぱい自らの希望でもあった。その趣旨は東京と松江を訪ね、カルシュ博士に関する旧交を温め、その後、松原武夫元教授（二期理乙）にも会い、京都も見物したいとのことであり、木村登（二期文乙）にその旨の手紙が届いた。これをもとに田島康弘（十四理甲二）と竹原敏夫（十九期理甲二）が奥野良臣（十四期理乙）らとともに受け入れの準備を始めた。

翌年三月に時期を選んで、東京（十五〜二十日）、松江（二十〜二十六日）、京都（二十六〜二十七日）、大阪（二十七〜三十日）のように日程を決めた。こうして、計画が具体化すると、メヒテルトが三月十五日の夕刻に成田に到着した。それから十六日間のメヒテルトの日本滞在中に、各地で有志による心温まる歓迎の座敷や立食パーティなどが設けられた。

『翠松』の予告記事を見て是非会いたいと何人もの照会があり、遠隔地から東京か松江に来て歓迎会に参加することになった。

メヒテルトの東京での歓迎会は十七日学士会館で開かれ、八人が出席した。幹事を田島と酒井勝郎（五期理乙）がとともに務めた。他に荻原憲三（五期文乙）、渡辺駿（六期理乙）、木村登、中村啓成（七期文乙）、稻生肇（十七期理甲二）長曾一彦（二十二期文乙）などカルシュに直接・間接に指導を受けた人々が参加した。会話にドイツ語を混えて、和気藹々の中で話はずんだ。

メヒテルトは、十七日から三日間、酒井宅に宿泊し、旅の疲れを癒した。東京滞在中は、遠い昔に親しく交わっていた暉峻凌（三十四期文乙）の病氣を見舞い、稲生や田島の家との親交を深め、かつてメヒテルト宅にホームステイした通産省勤務の荒井寿光とも二十年ぶりに再会した。ウッドマン家の近くに編み物の上手な母と住んでいた赤川姉妹との再会も実現した。そしてまた、西独でカルシュ夫妻に世話になったという宇都宮在任の橋本ら多くの知人にも会うことができた。

メヒテルトは、二十日には、生まれ故郷へ胸をふくらませ出雲空港へ飛び立った。田総と竹原のほかに、昔のお手伝いさんら四人が出迎えて、懐かしい故郷の松江の「余テル宋道湖」に着いた。二十二日夕方には、「誓美館」の湖を見下ろす二階の座敷で歓迎会を開いた。開会前に控室で朝日新聞などの二社の取材があり、市民も彼女の松江訪問を知った。松江での歓迎会については最も古い教え子の一人である同窓会副会長の鈴木繁徳（五期理乙）が挨拶の中で、自分の娘の里帰りを迎えるように愛情をこめて呼びかけた。

メヒテさん、外国からはるばる訪ねて来て、ありがとう」

聞けば、各地で教え子が多数集って歓迎のこと」

「こんなことは、滅多にない嬉しいことです」

メヒテさん、恩師の娘さん」

松江を去られて五十年になるのですね」

そんなねぎらいの言葉が飛び交った。乾杯の音頭に応じて、彼女も

フーム・ヴォール 乾杯」

と杯を挙げ、春宵一刻の歓談は尽きることはなかった。出席者は、鈴木夫妻、増田、田総、富田幸美（六期理乙）、庄司保親（十期文甲）、高橋定（十期文乙）、石倉愧（十三期理乙）など直接・間接の教え子らであった。一緒に参加した日本語家庭教師の中村（吞飛）フデ子、日本の母の錦織きみえ、住込メイドの中村（大笹）トキエらは

再びお会いできたのは夢のようです。先生は心温かい方でした」と目をうるませていた。

同夜は皆美館に一泊、翌朝は、美しい庭から穏やかな宍道湖の風景を満喫した。湖畔の地蔵像を感慨深げに前日も眺めたことを思い出して、自らがかつて描いた松江周辺の風景のスケッチのことを傍にいた生徒達に語った。

二十四日午後には、小雨の中を、境港市の思い出深い庄司邸の茶の湯に招待され、鈴木夫妻と竹原も同伴して指定文化財の茶室で若夫人の点前により抹茶の接待を受けた。当主の庄司保親はカルシュ博士の直接の教え子ではないが、福永健司（七期文甲）、田総武光（六期文甲）や細田吉蔵（九期文甲）らとともに彼から大きな影響を受けた生徒の内の一人である。



病床にある十四期文乙の暉峻凌三からフリーデルンへの書簡

この日の夕方には、彼女の最も古い幼な友達の東史が宮崎県都市から到着し会食した。翌日は冬に逆戻りしたような寒さであったがふたりで昔一緒に遊んだ奥谷の官舎の近くの神社や寺院の近隣に今も住んでいる幼な馴み数人の家を訪ねた。午後は兩人を足立美術館に誘い、みんなで日本画と庭園美を鑑賞した。二十六日朝は松江駅で見送りの人と名残りを惜しみ、京都へ向かった。



東京学士会館での旧知による歓迎会



終生の友の長屋喜一とともに 1968年9月26日

このころ、遠藤は『翠松』のメヒテルトさんが京都には何日の何時に来る』という記事を頼りに、列車の着く時間に京都駅に行ってみた。支部長で大阪短大の松原武夫が迎えに出るだろうから、彼を探せば、一行は判るハズだと思っていた。しかし、見当たらない。

余テルが判って居るのだから、ホテルに行けばよい』と考えて駅を離れた。駅前の交差点に来たと

ころ、誰かが小さな声で、

「アッ、エンドウさん」と言っ自分を見つけてくれた。ついで遠藤さん！」と言う女の声が聞こえた。ホテルに着いてから、彼女がその昔、カルシュ先生の官舎に自分が訪ねたときの『空ノド、エンドウマメ、遠藤』の呼びかけを思い出したと言ったのであった。

明けがた、日が昇るのを見て、かつて父フリッツがよく口にした『ネンアウフゲ エンデスラント 甘の昇る国』という言葉を感じ出した。そして、宿泊先のタワーホテルからタクシーの車窓を通して、満開の桜花を見ては『ネルシュブ ユーテンデスラント 桜の咲き乱れる国』を想った。やはり、この訪問にも父フリッツの想いが重層していた。少々休憩をとってから、奥野と加納とともに三人で、万博公園と日本庭園等をゆっくり散策した。

翌日は、雨の中を三人で夕方の方の歓迎会場たる大阪倶楽部へ到着した。歓迎パーティーでは、奥野が最初に、田島の努力に始まる本会開催迄の経緯を話し、カルシュを偲び、メヒテルトへの歓迎の辞と記念品の贈呈を行った。日独両語の入り交じる涙ながらの謝辞が述べられた。次いで最年長である五期文乙生の伏見礼次郎の首頭で乾杯した。和洋とり混ぜた料理と、カルシュの思い出から、四方山話はずんだ。



大阪倶楽部での歓迎会  
岡崎、宮田らの姿が見える 1990年3月27日

司会でもあった岡崎が先生から教わったというドイツの軍歌を歌って、和やかな座は一層盛り上がった

た。他にも、メヒテルトの幼時の写真、それが貼られた思い出のアルバム、宍道湖の落日を撮った芸術写真、さらには個人的なお土産品の持参が続いた。やがて散会し、メヒテルトは満悦の様子で奥野の家に戻った。

翌日ミネアポリス市と姉妹都市の茨木市の重富市長からは記念品が贈られた。



白石、奥野らの新大阪駅での見送り

三十日には新大阪から白石・奥野らの見送りを受けて、新幹線で東京へ戻り、田島夫妻らと成田空港まで同行した。一九六八年（昭和四十三年）カルシュとともに来日して以来二十二年ぶりの再来日であった。彼女は淞高関係者以外の人々にも多数会うことができた。この時は来日の目的を父フリッツの教え子や知人との旧交を温めることを第一義としたので、観光にあてる時間は少なかったが、期待以上の目的を達し、彼女の心の琴線にふれた忘れ難い思い出の数々を胸に、また日本につきぬ名残りを惜しみつつ、この日の午後六時五十分発のデルタ航空で帰米の途について。

## 二

ここは、現在次女のフリーデルンの住むマールブルクである。美しい街並みは昔の様相と殆ど変わら

ないという。フリーデルンの案内してくれた小径は『ルールフュッサー通り』、日本語でいえば『裸足通り』というところか。

五味川純平の『人間の条件』が『ルールフスドウルヒデイヘレ』と翻訳されていた。さらに逆翻訳すると『地獄の中の裸足』であったが、どうしてこんな訳がついたか、不思議であった。一九七三年（昭和四十八年）、あこがれのドイツ留学時代に、筆者がテレビで見た加藤剛主演の映画の題名であった。

この通りの先にカルシュ夫妻がかつて住んでいた。静寂なライン河とエリザベート教会をシンボルとする、二人にとっての運命の街マールブルクには、今も、このような古い典型的なドイツ建築が見られる。広場や市役所、本屋もその他の店も昔の面影と学生時代の雰囲気想像させるに十分である。

二十五歳になっていたカルシュは戦争のさなかに感じるいろいろなとあって、宗教に大きな関心を抱き、ドイツ宗教界の随一の聖地とよばれるマールブルクに赴いた。そこは、ライン河の支流のライン川に沿ったグリム兄弟も学んだ由緒ある大学の街でもある。中央駅を降りて駅前通りをまっすぐ歩き、突き当りを左に曲がると、ドイツ最古のゴシック建築のエリザベート教会が見える。路地には古い木組みの家が見られる。坂の多い石畳の路をマールブルク城まで登るのは、ちよっと骨が折れる。今は大学の文化博物館になっている、宗教改革に縁の深い古城からの眺めはすばらしい。この地方を支配した宰相の住んだ城を右に見て、蔦の絡まる



マールブルクの路地

垣根と石畳の路を下ると市の中心の広場と市庁舎が目に入る。ワインやビールを楽しむロカール（居酒屋）が途中にある。古い建物だ。下りたところが市庁舎である。仕掛け時計が毎時美しい音色を響かせる。

市庁舎の傍の本屋はカルシュが再びラフカディオ・ハーンの本を眼にしたところである。このとき、言い知れぬ戦慄と感動の波が彼の身体を走ったという。このことは前述した。

現在のフリーデルンの住むリービツヒ通りのアパートの部屋に通して貰うと、カルシュ博士ゆかりの遺品や写真が目に入った。その際に、彼女はカルシュの使った靴べらと杖まで見せてくれた。数々の遺品が整然と並べられている。特にエンメラが残した家具、調度、着物、陶器類、置物、掛け軸などが家の中に保存されている。

その後、彼女はマールブルク大学の文学部の建物に案内してくれた。彼女の両親の出会い、そのエピソードは、このときに直接聞いたものである。



現在のフリーデルンの住居

それから大学通りに入り、左手に見える彼女の学んだ、そして勤務先でもある自由ヴァルドルフ学校を訪れた。さらに足を延ばすと簡素な墓地が目に入る。カルシュ夫妻と生後一週間で亡くなった長男ゴットフリートの眠る墓所に案内して貰った。手入れのあまり行き届かない小さく慎ましい墓であり、カルシュ夫妻の手柄を語っているようであった。

死して、カッセルより戻ってきたカルシュ博士にとって、人生の重大

事を決めた運命の土地であったマールブルクは、最終的な安らぎを与えてくれる終焉の地でもあったようだ。

午後はメヒテルとともに三人で、マールブルクを散策した。夕方、同じホテルに宿泊していたセイント・ゴア夫妻と四人で食事をした。天がカルシュ博士と我々に与えてくれた、慎ましくも楽しい夕餉であった。

この不思議さ、この縁を、そしてかつて見も知らなかったカルシュ博士に連なる人々との出会いを筆者に与えてくれた天に感謝して、明日また心のなかで出会えるカルシュの姿に想いを馳せ、夢路に就いた。



カルシュ夫妻と生後一週間で亡くなった長男ゴットフリートの眠るマールブルク

## 調査雑感

—

カルシュの生涯の叙述を終えて、偶然の不思議を筆者の体験を交えて補足的に話してみたい。

一九七六年（昭和五十一年）のこと、エルサルバドル訪問中に、隣国のグアテマラで、若き日にケネディ大統領の暗殺を予言した老婆に、筆者の運命を占ってもらったことがあった。

その折に、彼女から「不思議な出会いを経験する相だ」という、一言があった。スペイン語での言葉であるが、エルサルバドルのアルマンド・モネドロと呼ばれる、ドイツ留学時に友人となった富豪の息が、ドイツ語で通訳、説明してくれた。どのみち、人生で重要な事件と意味があることと言えば、師か配偶者のことであろうと、ごく当たり前のことと思っていた。筆者は、子供の頃から、見たことのないものを夢に見て、後でそれに思い当たるといふ経験が何度かあった。それゆえ、メヒテルトから父フリッツが見たことのない大山を何度も夢に見たといふことを聞いたときに、すぐに合点がいった。人は、普通これを頭から信用しないので、メヒテルトは家族と側近以外に、このことを話すことがなかった。うである。しかし、電話でいともすんなりと、種々複雑なことを筆者に話してくれた。なぜ顔を会わせなかったのらない筆者に抵抗なく話せたかをメヒテルト自らが、正直いって、後で不思議に思ったことである。

二〇〇二年（平成十四年）四月にアメリカのチャタヌーガの自宅を訪問したとき、

前世であなたは父と何かあったに違いない」と言っていたが……

カルシュ博士

事実、筆者はこの調査のなかで、ねらいがはずれたことの記憶が殆どない。調査にほとんど徒労が無かったことに何やら不思議さを感じるのである。

筆者は、もとより自然科学の専門教育を受け、数理学であるシステム工学を四十数年来専門とし、自分では物事をほとんどすべて実証的に論理的に思考ができると思っている。しかし、身の周りのできごとが、偶然ではあるが必然の流れの一つの切り口として眼前に何度も現れている。この『事件』の生起もドイツ、ドイツ語、ドイツ人、システム工学、国際会議、開催地、主催者、訪問地、ホテル、時刻などのキーワードのすべてが同時に満足されて初めて可能であり、偶然と言うにはあまりにも、出来過ぎていて仕組まれたような必然の糸で結ばれているように感じられる。このこともあって、拙著『湖畔の夕映え』では、一見『デジャ・ヴイ』のようであるが、カルシュの子供の時の体験を小説の中に意図的に組み込んだ。

さて、ドイツでほんの偶然から一人の女性と出会った因縁の不思議さをしみじみと思う。繰り返すが袖すり合うも他生の縁」とはよく言ったものである。全く縁もゆかりもない、存在すら知らなかった人とこれほどまでの繋がりもつことになるのは、想像すらできない、信じがたいことであった。その信じがたいことが一九九九年（平成十一年）筆者の周辺に突如として起こったからである。そこから生じた数多くの出来事を今こうして人々に紹介する立場になった。このことにも、何とも不思議な巡り合わせを感じるのである。

カルシュの調査では焦点を絞るとほぼ確実に、必要なまたは関連情報が手に入った。そして、多くの人々が自然な形で協力の輪を広げてくれた。カルシュから大きな影響を受けた酒井勝郎の愛弟子でもある江角比出郎との知己も、偶然に読売新聞島根版で、小生の調査紹介記事を見てのことであった。これ

を契機に彼が資料の紹介、『湖畔の夕映え』の書評を書いて、松江でのカルシュ博士の一本のパイプ役になってくれた。

全く見も知らなかったカルシュ博士に偶然出会って以来、種々の施設を訪ね、調査を行ってきた。その間に、思わぬ人に出会わずこともしばしばであった。そうした出会いが筆者の人生の中でどれほどの因縁をもって現実のものとして現れたのか、またこれがどのような意味をもつのかも同時に考えさせてくれたものである。

## 二

筆者は肝心な現象のほとんどが偶然のなせる技であったとも諸処で述べてきた。しかし、そうは言っても、筆者とドイツとの因縁をなくしては、カルシュとの結びつきを語るができない。その背景には、何と言っても、ドイツが好きだということがあり、これはもちろん偶然ではないのである。というのは、一九七三〜七五年（昭和四十八〜五十年）にドイツ学術交流会の奨学生としてドイツ政府より給費を受け、エルランゲン・ニュルンベルグ大学医学部の第一生理学教室でバイオサイバネティクスに関する研究をカイデル教授とプラティヒ教授のもとで行ったことにある。ドイツの文化とそれを生んだ風土に若き日に触れる機会をドイツから与えられた青年が、四半世紀後に、ドイツでの国際会議の時期に偶然にもカルシュ博士の娘に出会って、同博士に関わることになった。それゆえこの仕事は筆者に賜った天命と考えている。

カルシュ博士

ところで筆者がドイツに多少なりとも興味をもったのは大学入学時に、NHKラジオ講座を聞いたことに遡ることができる。しかし、大学では電気工学をもともと専門としており、縁あって生物・医学を

この立場から四十五年を越えて研究してきた。若き日に東京大学の水島生化学教授の講演に感動し、生体工学に興味をもってシステム工学を専門とする関口隆教授のもとで学んだことが、現在の生体機能の制御や医療機器の開発に繋がり、さらにドイツ留学とその人脈に連なり、カルシュ博士の縁に連なった。これまでの所属は医学系大学院であったが、研究室は医学出身以外に看護、電気電子情報工学、金属熱工学、化学工学、物理学、農学など他大学他学部出身の、また外国人の大学院生を容し、外国人との研究も積極的に行ってきた。

それはさておき、カルシュが筆者の中に眠っていた人そのものに対する興味を呼び起こしてくれたのである。調査をしながら、思いがけないこともわかった。またメヒテルト、フリーデルンからの書類公開可に基づいて、集めた資料の公開を併せて行ってきたことにより、いろいろな人との親交を得ることができた。

その中で、最初に『カルシュ』を公に報道してくれたのが、東京新聞文化部であったことはすでに述べた。東京新聞は、専門のことで以前に二度ほど世話になったことがあって、気楽に話したらこの未知の人物を採り上げてくれた。このお陰で、見知らぬ人から種々の情報が寄せられた。

話をもっと遡る。もし、筆者がかつてドイツに留学しなかったら、また専門がシステム工学でなかったら、そして後述する親しい友人であるフランク教授に出会わなかったら、『湖畔の夕映え』の話はおそらく、世の中に出ることはなかったし、増田義哉や竹原敏夫らもよく言っていたように、



東京医科歯科大学の研究室における筆者

カルシュに関するほとんどすべてが時と共に自然に消滅したことであろう。そういう意味からいっても、カルシュ博士の霊が、筆者を導いてくれたといっても過言でない。それゆえ、彼の顕彰が天命であると感ずるのである。

日本では全くといっていいほど未知の存在であったカルシュ、それゆえ、彼の次女に偶然出会ったことがすべてであった。当時、筆者は、二十年來の親しい友人であるデュースブルグ大学のフランク教授が大会長を務めるカールスルーエでの八月末からの第三回ヨーロッパ制御会議の国際プログラム委員として、また『呼吸循環制御』と『眼球運動制御』に関する発表と座長の任を無事に務めて、会議に別れを告げて開放感に浸っていたところであった。

同行した当時室蘭工大の高原健爾博士らとともに、九月四日に週末休暇を利用して、両者とも未だ訪れたことのなかったこの街に足を踏み入れた。その日の宿を決めてなかった我々は中央駅のインフォメーションで二軒の安価な小さなホテルを紹介してもらった。どちらにするか、ちよっと迷ったが、城内公園 (Schloßgarten) の近くに宿をとったのが、この運命の出会いの始まりであった。そのホテルの名はホテル・アム・フリーデンプラッツであった。この日は州知事の誕生日があり、官邸の広場で楽隊の行進と演奏に幸運にも遭遇し、土地の人とも親しく語り合うこともできた。Friederun と出会った場所が Friedenplatz で、その名称が不思議なことに一致していた。また、彼女の日本名は Hideo-ko、筆者の名は Hide-toshi である。ずっと後で気がついたことであるが、ここにもやはり彼女の父フリッツの意志が感じられた。とにかく何という偶然であつたらう。

そもそも一九八二年 昭和五十七年) にニューデリーでの国際自動

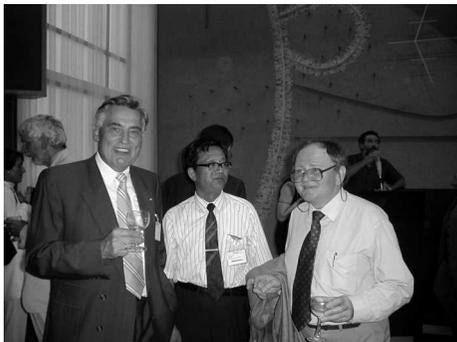


ポーランド自由化先駆け「連帯」のバッジ

制御連盟シンポジウムでフランク教授と出会った。会議終了後、時間をみて事務局の計画したアグラのタージマハールバス旅行に、会議に参加した他の研究者らと同行した。彼は、システム故障診断の著名な学者で、専門がもともと近いこともあって筆者の紹介で彼の研究室に留学した人もいる。例えば、親しい友人の元千葉工大の板倉秀清教授である。日本ではこの著名なフランク教授と密接な交流をもっていた人が少なくない。

写真のなかは、筆者の右隣のフランク教授と左隣のポーランドのガルコフスキー教授で、専門分野では最も重要な国際自動

制御連盟世界会議で、一緒に議論した科学者である。彼からは自国での計測自働制御国際会議の際、ジイローナ・グラ大学から招待を受け、講演をさせてもらった旧知の仲で、その間有名な改革の口火を切った『連帯』の記念すべきバッジを戴いた思い出がある。彼とは何度も国際会議で顔を合わせている仲であり、筆者の研究室もかつて訪問したことがある。



左からフランク教授・筆者・ガルコフスキー教授

ところで、筆者が大学生の頃、阿部賀隆教授のドイツ語の講義がおもしろかった。そのうち、筆者のドイツに対する興味から判断したのであるか、ゲルマニストに転向を強く勧められたことを思い出した。大学紛争の時期にドイツの著名な生理学者のもとに、留学を考え種々の方法を模索した結果、ドイツ学術交流会の採用試験に合格して留学することになった。その相談を持ちかけた阿部が一九七五年 昭和五十年) 一月、筆者の帰国直前に急逝した。ドイツから帰ってきて、このことを聞いて大きな精神的支柱を失ったのを知った。

次の写真は、初めてドイツの土を踏んだブラウボイレン(Blaubeuren)である。これは偶然であるが、実はフランク教授との関連で親しくつきあつてきたルール大学のシュミット教授の故郷がこの近くである。

ドイツに一九七三年 昭和四十八年) 八月六日に着いて、その日初めて宿泊したのがドナウ河の起点ウルムの近くに位置するこの閑静な土地である。街の中心から一寸はずれたところに位置する、例えばような美しい色の美しさのブラウトプッフ(Blautopf)という沼がある。



ブラウトプッフの水面



ブラウトプッフ畔の修道院

日の光の角度と強さにより水の色が変わる。ドイツの美しさの印象を強く植えつけてくれた忘れがたい風景である。ここで二ヶ月間、色々な国の人々とつきあったことは、後の外国人の見方に大きな影響を与えてくれたようだ。イタリア、フランス、アメリカ、トルコ、エジプト、レバノンからの語学研修生と一緒にであった。前頁の写真は、この沼の畔にある宗教学校として使われてきた修道院(クロスター)が水面に映った姿である。

留学先はバイエルン州エルランゲンであったが、左下の絵は一九七五年三月の帰国時に、友人との別れ際に受けとった教会のスケッチである。近くのニュルンベルクの美しさは、筆者の青春の宝であったし、当時そこに住んでいた学生で、四十年来の友人であるアンドレアス・シュテューブ(Andreas Stief)はこの調査にも大きく協力してくれた人の一人である。最近、昔の荷物を整理したところ、留学中に二千枚ほどの写真を撮影していたことがわかった。カルシュに劣らない数の撮影だ。同時に、当時のエルランゲンII ニュルンベルク大学のゲストを含めた職員名簿、奨学生身分証明証や自動車のナンバープレート、それにマスクルーク、ゼールのジョッキ)が見つかった。また当時のドイツ人学生の使った教科書や留学先の恩師の書いた書籍にも再会できた。それを眺めているうちに、大学の研究所内に住んでいた、機械技術のマイスターのバッフマン(Bachmann)を懐かしく思い出した。



エルランゲンの教会

研究のための実験用具を瞬時に頭の中で設計し、傍にいる弟子に、すばやくその寸法を指示する姿に驚いたものである。

多くの友人と語らった時から四十年を超える時間が経った。懐かしい声がカセットテープに残っていた。ドイツ人の友人宅に招待されたとき、友人が録音したものだ。この時期に、カルシュの声アメリカのメヒテルトによって自宅の荷物から発見されたことを電話で聞いた。

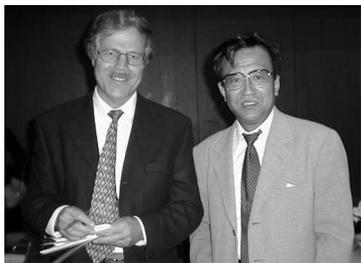
よかった。カルシュ先生の声が聞ける！」

筆者にとってはどんなに大きな喜びであったことか。

#### 四

カルシュ博士

カルシュ博士の存在を偶然に知り、僅かな手掛かりを辿って事実を発掘し、彼の足跡を追跡する中で筆者は彼の偉大さを知った。カルシュ博士に直接・間接に接したことのある人以外には誰も彼を知らないほど、日本では残念ながら名の無い哲学者である。そんな中で、筆者は公務の間に時間をみて、調査や聞き取りを行った。誰もが、《酔狂な》と言っていた。この調査に意を尽くしたことは、カルシュ博士の隠れた、または激動の世の中で紛れた功績を発掘しまとめおき、同時に彼の縁者が元気なうちに少しでも多くの《空の声》を収録しておくことであった。実際に、縁者達も自分達が元気なうちに、記録して置かなければ、遠からずして、すべての記憶が消滅する運命にあると心配していた。彼の縁者以外で、客観的な資料をもとにカルシュ博士に光をあてようとしたのは、筆者が初めてということで、調



記念講演後のアモン教授と筆者  
2000年6月16日

査には縁者の諸氏が親身に協力してくれたし、とくに、旧制松江高校九期生が高齢にも拘わらず、自分の身を削って協力してくれた。その際に、お願いして可能な限り彼らの肉声をも録音させてもらった。

調査を開始した二〇〇〇年（平成十二年）は折しも、筆者は自ら総務理事を務めるドイツ学術交流会（DAAD）の元留学生会でもドイツ関連の諸々の行事に参画していた。現在に至るまで及ばずながら三十年以上、ドイツ学術交流会奨学金で留学した人々の活動や現在の日独奨学生のために役立つような文化交流の手伝いをしている。これもすべてドイツとの縁がなせるわざである。そして、同年六月十六日にはドイツ学術交流会創設による世界との学術交流をドイツが始めて七十五周年になる

のを祝して、記念式典が東京ドイツ文化会館でドイツ大使ケストナー博士、東京事務所所長リンス博士、文部事務次官佐藤禎一の臨席の上で催された。併せてデュースブルグ大学のアモン教授の記念講演およびシンポジウム、元留学生音楽家による音楽会が行われた。その際に、記念講演を行ったアモン教授とフランク教授は同じ大学に勤務し、専門は互いに異なるが親しい関係にあることを驚きをもって知った。やはり、カルシュとの出会いには幾重にも偶然が働いていたのだった。

その後、六月二十七日に筆者がドイツ大使公邸に招かれた折りに、ドイツ大使ケストナー博士に直接、調査の結果を説明し、資料を差し上げる機会を得た。同日、樋口日独協会会長とケストナー大使から招待されたガーデンパーティーでのことである。このとき、花井、織田日独協会の両理事からも調査激励があっただけでなく、後には、日独協会の『日独文化交流に尽くした人』の第一回の記事にカルシュを採用してくれた。また、七月になって、ドイツ大使より調査の激励と成功を祈る手紙を拝受した。幸運にも、これが日独ベルリン文化センター Japanese-Deutsches Zentrum Berlin) と日独協会の刊行になる『Brückenbauer Pioniere des japanisch-deutschen Kulturaustausches』に三十人の重要人物の一人として取り上げられるきっかけになり、実際に、カルシュは森鷗外らとともに大きく紹介された。ところで、ドイツ学術交流会を創設し、ドイツが世界と本格的な学術交流を始めたこの一九二



2000年6月16日ドイツ学術交流会(DAAD)設立75周年記念式場にて左からリンス DAAD 東京所長、通訳、石川 DAAD 留学生会会長、ケストナー駐日ドイツ大使、佐藤文部事務次官



ドイツ大使公邸でのガーデンパーティでの撮影花井日独協会理事、ケストナー大使、筆者

五年 大正十四年) は奇しくもカルシュ博士が来日した年でもあった。

そして、DAAD創設七十五周年のこの二〇〇〇年 平成十二年) はドイツでは 百本年にあたり、特に日本との関係を重視した催し物がドイツ各地で行われた。さらに、周知のように二〇〇五年 平成十七年) から翌年にかけては日本における 千イッシュ博士は戦中・戦後の混乱に埋もれていた。筆者がカルシュ博士を知ったのは全くの偶然ともいえるが、このように状況が熟している今こそ、殆どの日本人がその存在すら知らない状況にある



シュティーフ夫妻  
エーデルトラウト と アンドレアス

カルシュ博士を正しく知ってもらおう好機であった。しかし

かし、これとは独立に、彼の業績と日本における功績のみに注目した客観的な顕彰を行うに留め、以後はそれを知った人々の判断と評価にすべてを任せるべきかと思っていた。

二〇〇一年(平成十三年)には、小生はすでに、『湖畔の静けさ』または『湖畔のさざなみ』と題して、個人的なカルシュに対する思いを



まとめていた。この件については、芹屋ではなく、例外的に東京で白石と会ったときの対話の中で、彼の周辺の事績を平易に描いた小説を完成すべきとの賛意をも得た。これが後の『湖畔の夕映え』になった。なお、翌日には松江高校の同窓会の一つである二木(耳目)会に出席すると、細田、白石、瀧谷らの意見により、同窓会としてカルシュ顕彰の応援の約束を得た。さらに筆者がかねてから提案していたカルシユハウスの創設に向けて努力する旨を松江高校同窓会の名の下に、顕彰発起人代表の中村会長が同窓会へ『翠松』の紙面をもつてその運動展開を呼び掛けることに合意した。この時期にドイツ学術交流会東京事務所長リンス博士やバイエルン州のカウフボイレン在住のシュナイフ夫妻からもカルシユ調査の協力を得ることができた。そして、それらの支援のもとに、当初の目的でもあった、カルシユ個人の業績、周辺の記録、門下生の自伝と業績、帰国後の生活、日本再訪問時の記録、写真、絵画、カルシユ没後、著書、未整理書のうち日本に関する記事の要約、国内外でのその後の状況、メヒテルトによる翻訳書のアメリカでの反響、日本人研究者による『カルシユの研究』の呼びかけ、資料の永久保存とカルシユの提言などをまとめて出版することを計画するようになった。

カルシユ博士については、生徒との交流の記録、数々のエピソード、さらにドイツ帰国後の生活、日本との絆など、多岐にわたって、これまでに調査済みでその内容が筆者の手許に山積している。

なお、旧制松江高校生徒より提供された写真を含めて、メヒテルト、フリーデルンから入手した資料を筆者が彼らの許可を得て展示会や報道などのために必要に応じて公開してきたことを付記したい。

最後に本調査に協力して下さった、また数々の資料を提供して下さった関係者の皆様に心より感謝の意を表するとともに、この大きな足跡を山陰に残したフリッツ・カルシユ博士が公平な目の高さで、人々からの評価がなされることを心より願って止まないことを世に訴えるものである。

### 【カルシユ家年譜】

- 一八九〇年 ラフカディオ・ハーン松江に入る
- 一八九三年 フリッツ・カルシユ、ブラゼヴィッツに生まれる
- 一八九六年 エンメラ・アクセンフェルト、ゴードスベルクに生まれる
- 一八九九年 市立小学校入学
- 一九〇一年 父ヘルマン肺炎で死亡 (六歳)
- 一九〇三年 王立ドレスデン・ノイシュタットギムナジウム入学
- 一九〇六年 ブラゼヴィッツ職業ギムナジウム転校
- 一九一一年 ドレスデン国際衛生博覧会が開催
- 一九一四年 大学入学資格試験に合格 (二十一歳)
- 一九一四年 ドレスデン工科大学入学
- 一九一八年 第一次大戦 通信兵として従軍
- 一九一八年 復員
- 一九一九年 マールブルク大学入学 (二十六歳)
- 一九二一年 エンメラと結婚 (二十八歳)
- 一九二三年 マールブルク大学で哲学博士授与 (三十歳)
- 一九二五年 松江高等学校着任 (三十二歳)
- 一九二八年 メヒテルト誕生 (三十五歳)
- 一九三一年 アクセンフェルト教授 日本眼科学会の招待により来日、各地を巡回講演
- 一九三一年 ドイツ一時帰国・親類との交流 (三十八歳)
- 一九三七年 ウッドマン家全焼
- 一九三七年 フリーデルン誕生 (四十四歳)
- 一九三九年 松江高校退任・ドイツ帰国 (四十六歳)
- 一九四〇年 ドイツ大使館勤務 副武官 (四十七歳)

- 一九四五年 終戦 五十二歳)
- 一九四七年 ドイツへ強制送還 五十四歳)
- 一九四七年 メヒテルト、ホルトンと結婚
- 一九五四年 メヒテルト離婚
- 一九五四年 メヒテルト、ヘルベルトと再婚
- 一九五五年 エドワード誕生
- 一九五七年 フリッツの米国チャタヌーガ訪問 六十四歳)
- 一九五七年 エリザベート誕生
- 一九六〇年 日本週間に三笠宮崇仁殿下主催のパーティに招待される
- 一九六七年 年金生活にはいる 七十四歳)
- 一九六七年 カルシュ夫妻アルベルト・コルベ・ハイム 老人ホームへ入居
- 一九六八年 日本訪問 恒制松江高等学校同窓会の招待による)
- 一九七一年 フリッツ、カッセルで死亡 七十八歳)
- 一九七八年 エンメラ死亡
- 一九九〇年 メヒテルト再々来日
- 一九九九年 筆者とフリーデルンとの偶然の出逢い
- 二〇〇一年 筆者とメヒテルト夫妻・フリーデルンとの面会
- 二〇〇二年 筆者のアメリカ訪問、メヒテルト夫妻と再会
- 二〇〇五年 日独文化交流の架け橋の功労者として日独協会が森鷗外らとともに紹介

【フリッツ・カルシュ個人の社会的背景】

- 一九二五年九月 一九三九年三月 旧制松江高等学校にて専任教官。
- 一九二八年二月 Die Behandlung des freiherrlichen Problems bei Kants und Nicolai Hartmann 日独文化協会
- 一九三二年三月十月ドイツ一時帰国、妻の父母の家に滞在。
- 以後、一九三九年三月までドイツ渡航の経験はない。

- 一九三三年 ヒトラーの首相就任。次いで一九三四年総統就任があった。その結果カルシュの信奉する人智学 (フタイナ哲学) はナチスより国内外で禁止された。
- 一九三四年 一月 Die ehelichen Grundlagen der Nationalen Bewegung in Deutschland 日独文化協会
- 一九三九年 契約満了により三月退職、ドイツ帰国。

一九四〇年 一九四五年 オット大使と友人であった縁から大使館付副武官に着任。フリッツがナチス党員であったとすれば、戦時中、当時の上司からの命令で強制的にユダヤ人の夫人とは離婚させられたはずである。しかしカルシュ夫妻の離婚の事実はない。

一九四五年 一九四七年 無職で軽井沢居住。軽井沢在住の大部分のドイツ人については財産没収、早期退去。カルシュについては財産没収なし。米軍によるカルシュ周辺のドイツ人の状況の長期間尋問尋問のために、一九四七年八月まで滞在、その後家族とともに強制送還、自由意思でマールブルクへ転居。メヒテルトは米軍将校と結婚。ドイツ国籍喪失・米国籍取得し、フロリダに居住。

一九四七年 一九六六年 米国フォード財団によるドイツ青年教育の教師の任を得る。なお、戦後の駐日ドイツ大使 クラップフの義母 (ゲルツ夫人) を通じて、バイニング夫人 (今上陛下の家庭教師) との親交あり。後に三笠宮崇仁殿下や神学者ハイラー教授との学術的交流あり。

一九六七年 一九七一年 ドイツ政府より正式な国家認定の年金受給

カルシュの妻エンメラ(文中エンメラ)の民族的背景はユダヤ人の定義に合致、その母のベルタ・シュテルメル、父ゴットフリート・アクセンフェルトも同様である。長女メヒテルトは極東軍事裁判での日独英三ヶ国語の通訳を務めた。この間、米国シテイ銀行勤務。米軍将校ホルトンと離婚後の一九五四年に、ナチスに虐殺された父をもつユダヤ人ヘルベルト・セイント・ゴアと結婚。彼は戦時中は米国に亡命後、バルジ作戦に米兵として参戦。戦後ヒトラー側近のハンス・パウアーを尋問し重要記録フィルム、ベルリン博物館保存) を押収した。

記録と報道

以下、関連報道および筆者らが行ったカルシユ顕彰に関する報道記事・著作である。

- 一 東京新聞 夕刊 三品信 心のファイル 忘れられた 日本の恩師「ドイツ人哲学者」(二〇〇〇年十月四日)
- 二 日本経済新聞 文化欄 遠来の師今なお追慕(二〇〇〇年十二月二十日)
- 三 産経新聞 関東版 文化欄 独人哲学者、フリッツ・カルシユ氏 日本を愛し、偉大な足跡を残す(二〇〇一年一月十三日)
- 四 産経新聞 関西版 文化欄 第二の故郷、日本を愛して、あるドイツ人哲学者のこと(二〇〇一年一月十八日)
- 五 読売新聞 島根版 カルシユ博士のこと知って「旧制松江高で十四年間教壇」(二〇〇一年三月二日)
- 六 山陰中央新報 カルシユ博士の情報提供を「第二のハーン顕彰へ東京の大学教授呼び掛け(二〇〇一年四月六日)
- 七 読売新聞 島根版 カルシユ博士と学生の交流小説に、「旧制松江高で十四年間教壇」、松江での功績知って、  
東京医科歯科大・若松教授が出版(二〇〇二年七月十八日)
- 八 山陰中央新報 明窓「岡部康幸(二〇〇二年七月二十八日)
- 九 山陰中央新報 江角比出郎 文化 残した足跡明らかに 若松秀俊著  
湖畔の夕映え「カルシユ博士と松江」
- 十 東京新聞 著者に聞く 偶然の出会いで調査にのめり込む  
湖畔の夕映え「カルシユ博士と松江」の若松秀俊さん(二〇〇二年八月四日)
- 十一 山陰中央新報 松江での足跡たどり偉大な業績に再び光り(二〇〇二年八月十六日)
- 十二 山陰中央新報 石川明 日独文化交流とカルシユ博士(二〇〇二年十二月十一日)
- 十三 山陰中央新報 若松秀俊 カルシユの足跡を追って「三十二回連載(二〇〇三年五月十三日)〜二〇〇三年十二月三十日)
- 十四 山陰中央新報 カルシユ十四年の足跡 人柄しのお展示会(二〇〇四年四月二日)

- 十五 フリッツ・カルシユ展 NHK松江放送局「階ロビー」(二〇〇四年四月二日〜四月十八日)
- 十六 NHK松江放送局フレッシユガイドインタビュー(二〇〇四年四月二日)
- 十七 日経新聞 文化欄 ラフカディオ・ハーン没後百年(二〇〇四年七月三十日)
- 十八 読売新聞連載 島根の記憶「十五回連載(二〇〇四年七月十五日)〜二〇〇四年十二月九日)
- 十九 福島県立磐城高校同窓会新聞 若松秀俊 第二のラフカディオ・ハーン ドイツ人版坊ちゃん  
カルシユ先生を知って(二〇〇四年一月)
- 二十 島根日日新聞 若松秀俊 フリッツ・カルシユ 神々の里に見た美と安らぎ(二〇〇五年一月一日)
- 二十一 松江郷土資料館 企画展示 松江を訪れた外国人たち(二〇〇五年四月一日〜二〇〇五年八月三十一日)
- 二十二 朝日新聞 島根版 金井信義 もう一人のハーン「名はカルシユ旧制松江高で独語教え、欧州の窓口功績」外国人宿舍保存と共に 東京の大学院教授訴え(二〇〇六年三月二十四日)
- 二十三 山陰中央新報 第二のハーン「カルシユ博士の宿舍、取り壊し案が浮上(二〇〇六年四月十一日)
- 二十四 NHK松江放送局しまねっと(二〇〇六年九月八日、十一日)
- 二十五 朝日新聞 島根版 旧松江校外国人宿舍、保存へ大正期の折衷様式 貴重(二〇〇六年十月二十日)
- 二十六 彩の国 いきがい大学 伊奈学園 若松秀俊 公開講座  
大間発見 谷本教育の礎を形成したドイツ人カルシユ博士(二〇〇六年十月二十五日)
- 二十七 島根大学 ミュージアム学公開講座 若松秀俊  
日本教育の礎となったカルシユ博士(二〇〇七年一月十二日)  
マヒテルトさんの語る外国人宿舍と松江の日々(二〇〇七年九月二十六日)
- 二十八 松江の宝・島根大学旧奥谷宿舍への想い「カルシユの足跡と残した偉業」(二〇〇九年十月二十日)
- 二十九 山陰ケーブルビジョン さんいん TODAY 伝えたい、故郷の魅力(二〇〇七年三月)
- 三十 忘れ得ぬ人 日本の教育の礎となったドイツ人シヤムティッシユ、日独協会  
Japanisch-Deutsche Gesellschaft 講演 若松秀俊(二〇〇八年一月四日)
- 三十一 福徳産業 「戦前の高等教育に尽くした知られざるドイツ人」若松秀俊(二〇一〇年十一月八日)
- 三十二 東京浅草中央ロータリークラブ 「歴史の狭間に埋もれたカルシユ博士と山陰地方」若松秀俊(二〇一六年五月十八日)
- 三十三 若松秀俊 特別講演 旧制松江高等学校教師フリッツ・カルシユ博士「日本断熱住宅技術協会ヨコハマグラウンドインターコンチネンタルホテル(二〇一七年五月十二日)

三十三 若松秀俊 夢に見た大山」大山開山 二三〇〇年記念特別講演。カルシユ写真展・米子コンベンションセンター (二〇一七年六月二日)

## 著作・出版物

- 一 若松秀俊 忘れられた異人さん」多くの若者を育んだフリッツ・カルシユ 松江での日々と日本への想い(私家版 二〇〇〇年十二月)
- 二 若松秀俊 想い出の中の旧制高校」私達はカルシユ先生の生徒でした 私家版(二〇〇一年一月)
- 三 日独協会機関誌 かけ橋 Die Brücke」カルシユ家が住んでいた官舎  
Die ehemalige Wohnung der Familie Karsch. 二〇〇一年五月号 表紙
- 四 日独協会機関誌 かけ橋 Die Brücke」日独文化交流を支えた人々 第一回 旧制松江高等学校教官  
フリッツ・カルシユ博士 Förderer des japanisch-deutschen Kulturtausches (1) Lektor an der Matsue  
Kotogakko. Dr. Phil. Fritz Karsch (1893-1971) 二〇〇一年九月号 七―八頁
- 五 若松秀俊 湖畔の夕映え カルシユ博士と松江」文芸社 (二〇〇二年六月)
- 六 若松秀俊 第二のラフカディオ・ハーン」致知 二〇〇二年九月号 八十七―八十八頁。
- 七 H.Wakamatsu Brückenbauer Pioniere des japanisch-deutschen Kulturtausches 158-163 Japanisch-Deutsches  
Zentrum Berlin Japanisch-Deutsche Gesellschaft.  
Janisch-Deutsch Gesellschaft Tokyo (2005)
- 八 若松秀俊 忘れ得ぬ偉人」カルシユ博士と松江 マツモト(二〇〇七年二月)
- 九 若松秀俊 「四ツ手網の記憶」松江を愛したフリッツ・カルシユワン・ライン(二〇〇七年七月)
- 十 若松秀俊 縁の環」財形福祉協会 (二〇一二年二月)

カルシユ博士

- 十一 若松秀俊 朝霧の瀬」財形福祉協会 (二〇一二年二月)
- 十二 カルシユの教育の原点を探る(一八) インターネット新聞 二〇一〇年六月十六日―八月二十三日
- 十三 カルシユの見た出雲地方 (一十九) インターネット新聞 二〇一〇年六月二十五日―八月十二日
- 十四 カルシユの見た日本各地 (二十四) 二〇一〇年 インターネット新聞 十一月一日―十二月二十九日
- 十五 H.Wakamatsu: Erinnerungen aus dem Viereckigen Tauchnetz-Japanische Schoenheit, gesehen durch blaue Augen-Fritz Karsch und seine Liebe zu Japan. Matsumoto(March 2016)

情報入手源としては、同窓会関係資料など以下のものを参考にした。

- 一 嵩のふもとに(旧制松江高等学校校史)
  - 二 翠松 旧制松江高等学校同窓会報)
  - 三 大阪支部会報松友
  - 四 東京松高会報
  - 五 カルシユ旧生徒および同窓生の手記
  - 六 カルシユ講義録 (一九三〇―三二年)、宮田正信所蔵
  - 七 新聞など
- |         |            |
|---------|------------|
| 松陽新聞    | 一九三七年三月三〇日 |
| 朝日新聞    | 一九六八年十月五日  |
| 山陰中央新報  | 一九六八年十月五日  |
| 長崎新聞    | 一九六八年十月十六日 |
| おもしろ紙三号 | 一九九七年三月    |
| おもしろ紙十号 | 一九九九年三月    |

- 八 松江高等学校同窓会員名簿 一九九四年四月
- 九 松江高等学校六期生卒業アルバム 澤田弘夫
- 十 写真 遠藤・江上・白石・溝上・中村・奥野・宮田・増田・田島より提供
- 十一 手記 坪内・増田・白石・宮田・岡崎・奥野・遠藤・松本・矢崎・千代・前田より提供
- 十二 資料 竹原・野津・田島・江角などより提供
- 十三 酒井勝郎 田舎の大学から(私家版) 一九六九年
- 十四 酒井勝郎 初旅のヨーロッパ三週間 (私家版) 一九七五年
- 十五 酒井勝郎 カルシユ先生 (私家版) 一九八〇年
- 十六 学制百年史 文部省編 (一九七二年八月)

なお、細部にわたつての資料や確認には、以下の官庁・公的機関などを利用した。文部省 人事課任用班、福祉班、島根県教育庁高校教育課、国立島根大学 総務課人事係 図書館員、松江市役所 国際交流課、出雲大社社務所、東京都世田谷区役所、横浜市役所、日独協会、ドイツ文化会館、ドイツ学術交流会、東京大学独文科、筑波大学図書館、衆議院前議員室、宮内庁、外務省、外交資料館、旧官立松江高等学校生徒同窓会、ドイツ連邦共和国ドレスデン市庁住民局、カッセル市庁住民局、アルベルト・コルベ・ハイム。さらにインターネット情報検索を利用した。

併せて、ふるさとの文化遺産 郷土資料事典 三十一島根県 大文社) 一九九八年、また松江市および境港市観光ガイド、島根県内の読売新聞をはじめ各社の新聞を参照した。

## あとがき

筆者がドイツのシントウットガルトで偶然にカルシユ博士の次女に出会つてから十七年以上の歳月が流れた。カルシユ博士の偉大さには、ほとんど誰も興味をもつことなく、一部に好意的な人がいても、結局は相手にされず、最初に書いた小説の同窓会の支援以外には、新たな出版について何も目立った進展を見なかった。これら一連の記録は一時的にはなく、後世に残すべき重要なものであるにもかかわらず〈取り上げる価値がない〉という冷たい反応だけであった。その理由は、《カルシユ博士は誰も知らない。もし、そのように重要な人であれば、既に各方面で知られているはずである》とのことであった。

ところで、筆者のような自然科学者は、研究の結果知り得た新しいもの《、窺られざる法則》や 真理《、さらにそれらの 念用》などを世に出す役目を当然のことと受け止めている。しかし、一般にはそうは考えて貰えないようである。それゆえ、カルシユ博士の業績を知って貰う為に、奔走した筆者の思いこそが世の常識に反することであるか、またはカルシユ博士に対する思い違いであったのかを分らないでいる。どうしても思い違いとは考えられないのだが……。

筆者が調査の中で知り合つて、尊敬して止まなかつた九期文乙生の宮田正信滋賀大学名誉教授は、

日本では一旦物事の評価が固まるとそれが決して動かないといつても過言ではない」といつて、学者として世の傾向を嘆いていたし、事実他の分野でも、興味本位のまたは利益直結のテーマ以外は扱わないことが少なくない。そういう文化的雰囲気も伝統的にもっている。歴史上の人物評価については特にそうである。そんな中、カルシユ博士の話に誰も見向きもしなかつた頃、東京新聞の文化部記者の三品信氏が彼を記事として扱い、初めて世に広めるべき報道をしてくれたことを思い出す。何の評価も

得られそうもない記事を敢えて掲載に努力してくれた彼の勇氣ある行動と先見の明を特筆すべきことと考えている。

もちろん、その後陰になり、日向ひなたになり協力してくれた、カルシユ博士に涙をもって親しみと感謝の気持ちを持ってくれた直接の生徒は最大の味方であったが、高齢であり、自ずと行動範囲に限界があった。そして、今はすでに鬼籍に入っている。

彼らの悲願を思うにつけ、それゆえ何としてもカルシユ博士の業績を世に知らせたいと願っている。

先の出版では、出版後に調査の不十分さと記憶違い、さらに記述の誤りなどが判明した部分を正し、若干署の構成を変えた。他に、本書で書き足りなかった部分は、写真を含めて拙著『環の環』と『朝霧の瀬』を参照していただけることを願っている。

なお、本書のタイトルの『四ツ手網の記憶』は、時の流れに運ばれた諸々の事実が網にかかり、それがいまに至るまで保存され、時を経て人目に触れることになったことを意図するものである。すなわち、『四ツ手網の記憶』はカルシユが好んで散歩したり、パステル画に描いた、松江の象徴でもある宍道湖や中海との間をつなぐ大橋川に、地元の漁師が流れに逆らって水中にかけた網に獲物がかかることを念頭に置いたものである。その『網』に捕とらえられた水産物にカルシユや筆者の当時の松江への想いを投影した。この『網』はカルシユの再来日のころまで細々と宍道湖周辺の名産の漁に使われていたが、現在は地元の博物館に見られるだけである。

調査のさなか、カルシユの家族が十四年間にわたって住んだ松江市奥谷町の官舎は、長女メヒテルトの類いまれな記憶をもとに、当時の様子を図面上で復元した。このいまにも朽ち果てんばかりの状態で寂しく立ちすくんでいた建物に市民の協力もあって修理を施すこともできた。出雲のこの地を限りなく

愛した偉大なカルシユと彼の残したものを永久保存するために、カルシユ記念館として設立されることをかつて心から願っている。また彼の残した一万五千ページの未整理の学術論文原稿をデータース化して、次世代を担う若者の研究素材となることを心から願っている。これらは調査を始めた著者と旧生徒の切なる願いであった。これからも方針を変えず、多くの心ある人々の願いを基礎に真にカルシユを検証すべき企画を考えて、筆を置くことにする。

カルシュ博士



著者略歴 若松 秀俊 昭和 21 年福島県生まれ。昭和 47 年横浜国立大工学系大学院修了後、東京医科歯科大医用器材研究所助手、足利工大助教授、福井大工学部教授を経て、平成 4 年より東京医科歯科大医学部教授、同大学大学院教授、平成 24 年より東京医科歯科大名誉教授。その間、沖縄県立看護大学大学院・文京学院大学非常勤講師。専門は生体機能支援システム工学。昭和 48 年～50 年ドイツ学術交流会奨学生としてエルランゲン・ニュルンベルク大学医学部バイオサイバネティクス研究所研究員、米国オレゴン州立大学、中国首都医科大学、南京航空航天大学、韓国釜山国立大学などの客員教授・研究員兼任。工学博士（東京大学）。

専門著書に「医用電子と生体情報」「医用工学」「救急医療のための機器システム」「新しい大学院教育を探る」「ナースのための遠隔情報管理システム」「バーチャルリアリティにおける力覚表示とその応用」など。専門外のライフワークとして、教育界の偉人のカルシュ博士についての著書「湖畔の夕映え」「忘れ得ぬ偉人」「四ツ手網の記憶」「縁の環」「朝霧の瀬」、「Erinnerungen aus dem Viereckigen Tauchnetz」、また歴史小説に「王家の祠（日本語版および韓国語版）」「大海の都邑」「祀られた昔日」「古代の移り香』がある。

## 新版 四ツ手網の記憶 日本を愛したカルシュ

2017 年 1 月 20 日 第 1 版第 1 刷発行

著 者 若松 秀俊

発行所 杉並けやき出版  
〒166-0012 東京都杉並区和田 3-10-3  
TEL/03-3384-9648 FAX/03-3384-9649

発売元 株式会社 星雲社

印 刷 株式会社 (有) ユニプロフォート